

3274
63

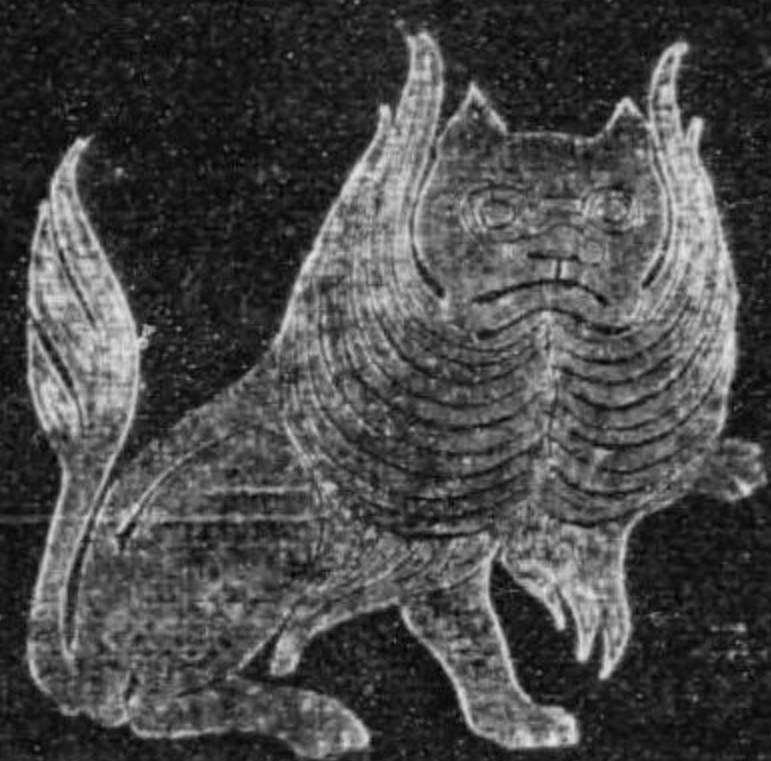
0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40^{0m} 1 2 3 4 5

始



324

63



324-63



續淨土宗全書

大正
11. 9. 2
内交

即心念佛淨土問辨一卷
 念佛往生明導筭二卷
 蓮宗禦寇編二卷

知	空	撰	自三八四頁
僧	濱	撰	自四一三頁
義	海	撰	自四七六頁
			自四七七頁
			至五一四頁

即心念佛安心決定談義本序

客歲の秋。江州大津。善通寺の住持。清堂上人。幻々菴に來りて。寒温を叙し畢りて。台宗の即心念佛は。末世の要行。往生の直路なる旨。兼て御示しを承り。難有思ふゆる。折々檀越の輩に對して。説聞しむれども。吾さへ。とくと會得せぬことなれば。聽人も。難有は思へども。深く信受は。なりがたきやうに見へたり。何にとぞ。吾等がため。諸檀越のため。此念佛の安心決定して。深く信得するやうに。御書記し玉はり候へか。と。懇望せらる。余が云く。此念佛のこと。拙者も。勤め得たりとは。思はれねば。いかでか。人々をして。深く信得せしむることを得んや。然れども。五十六年。台宗の教觀を學び。唯心の淨土の往生を期すること。忘るゝ日なければ。此念佛の安心は。暗からぬやうに思ふ間。暇あらば。書記して見まひらせんと云へば。上人。喜びて歸りぬ。其の後間もなく。上人俄

に身まかりぬと聞て。驚惻の裏に。前約を速に償ふと思ひぬれども。指當ること多くて。延引せり。頃日。右の約束を。傳へ聞たる人。頻りに舊約の償を請はる。こばみ難くて。小僧に筆を執せて。書付さす。因て先箇條を立て。七座の談義となす。第一には。即心念佛の起りの事。第二には。即心念佛の四字の義理の事。第三には。即心念佛の申し様の事。第四には。即心念佛は。往生無生なる事。第五には。末世の要行は。即心念佛なる事。第六には。即心念佛の功德利益の事。第七には。即心念佛の回向發願の事なり。此の七座を。談義の功者なる人が。堅き處を和らげ。深き處を説ひろげ。種々の因縁。種々の譬喩を加へて。説のべたらば。一座が二座になりて。二七十四座にもなり。一座が三座にもなりて。二十一座になり。乃至一座が七座になりて。七々四十九座にもなるべし。其より上は。説廣ぐるること。入ざることならんか。天台大師云。略知佛法大意。即須覺悟無常懺悔行道。豈可馳逐不急

之言と。此御示しを仰ぎて。即心念佛の荒増を。聞得たる人は。早く無常を悟りて。即心念佛の務を。勵ますべし。其勤の内には。難有心深くなることあるべし。又疑ひ起ることもあるべし。疑ひ起らば。速に師家へ。尋ね聞べし。但し談義は。四十九座に過べからざれども。同じ談義を。幾度も聞ことは。然るべきことなり。西方重聞。以表不輕とて。唐土日本の人などは。同じことを。度々聞ば。くどしとて。いやがるなり。天竺の人は。大切のことゆへ。度々仰らると思ひて。聞ば聞ほど喜ぶなり。日本人も。山ほととぎすは。聞度にめづらしと云。即心念佛を。山ほととぎすのやうに。思ふ人は。幾度も此法談を。聞度思ふべし。或人問。談義本と云は。童への遊ぶ。魚の名に似て。いとをかし。余云魚の名にも似よ。談義説の名にも似よ。それは。苦しからぬこと。唐の書に。講録の。講本のと云ふことあり。講釋を書付たる本なり。今は談義の爲に。書付たる本なれば。談義本と名付くるに。何のと

があらんや。時に享保十二年。臘月仲旬。謙靈空。幻々菴にて。書付さするものなり。

即心念佛起りの事

抑末世の佛弟子は。極樂往生を求めて。念佛の行を務むるほど。結構なることはなし。然るに。往生の務め。其品多けれども。持名念佛ほど。勤めやすく。肝要なるはなし。持名念佛に就ても。理持の念佛。事持の念佛。其品分れたり。善導。法然の勤めは。一向の事の念佛なり。吾天台宗の貴む所は。即心念佛なり。亦約心觀佛とも云。亦理持とも云なり。即心念佛と云は。各我等が心は。身の内にあるやうに思はるれども。身の内にあるやうに思はるゝものは。縁影と云ものにて。本の心には非ず。本の心は。色もなく。形もなく。周徧法界とて。どこがかぎり。どこがはてと云こともなく。いつ始る。いつ終ると云こともなきものなるゆへ。西方十萬億土の淨土も。彌陀。觀音も。心の外に出たるものにてはなし。故に淨土も。彌陀も。即ち我心

なりと知て。念佛申して。往生を求むるが。即心念佛なり。此をよく心得るより外に。即心念佛と云法門はなし。此即心念佛の義。根本は。佛の説せ玉へる。觀無量壽佛經より出たり。それによつて。即心念佛と云名を立て。専ら弘め玉へるは。大唐宋の代の天台宗。第十七代の祖師。四明尊者なり。因て尊者。妙宗鈔序に。適時之巧。非我所能。願其有情。即心念佛との玉へり。此意は。時々宜しきに順つて。色々の法を説。それくの機に適て。さまざまの法門を授くることは。佛や。大菩薩ならでは。ならざることなるゆへ。四明尊者は。只法界の衆生と共に。即心念佛の一道を。勤めんと。御願ひなり。此御願は。安樂行品の。但大乘法答の意に。本づき玉へり。又。爲種亦強の。思し召入なり。然れば。即心念佛の起りは。近くは四明尊者に始るなり。さて其根本は。佛の説玉へる。觀經より出たりと云は。是心作佛。是心是佛と。説せ玉へる文なり。是心作佛。是心是佛との玉ふは。是心とは。各

吾等が。西方の彌陀佛を。思ふ心なり。其心が。彌陀佛を見出し奉るなり。即其心が。直に是彌陀佛なりと云ことなり。又四明尊者。釋しての玉は。以心佛同體。名心是佛。觀生彼果。名心作佛。意在即心念佛。及令慕果修因と。此釋の意は。本來佛と。めんくの心とは。同一體にして。少しも相かはらぬものなれば。是心是佛と説玉ふ。我心と佛と。相かはらずと思ふて。佛を思ひ。佛の名を唱れば。我が即ち。阿彌陀如来の如くの。結構なる佛になるゆへに。是心作佛と。説せ玉へり。かくの如く説玉ふは。佛になりたく思ひて。即心念佛せしめん爲なりと。釋せられたり。往生極樂を勤め玉ふ御經に。如此の理觀觀心を。説せ玉ふには。及ぶまじきことなるに。理觀觀心を説玉ひ。殊に亦令未來世。一切凡夫。欲修淨業者。得生西方極樂國土と説て。只今の我等凡夫までも。往生を求むる人には。理觀觀心を勤め玉へり。とかく佛の本意は。念佛に付ても。讀經に付ても。理觀觀心を示し玉ふな

り。我心と佛と。少しもかわらぬ。一體と云こと。合點のゆかぬ人は。疑はしく思ふべけれども。佛諸の大乗經の中に於て。處々に明かに說せ玉ひたることなれば。少しも疑ひを生ずべからず。面々見たひ。聞たひ。惜ひ。ほしひ。あつひ。さむひの心の起るは。無始より以來。迷ひたるゆへなり。何ほど迷ひて。見たひ。聞たひ。をしひ。ほしひの妄念が起れども。其心の體は。結構なるものにて。佛の心と。少しも相かわらざるなり。譬へば。金を以て。佛の形を作り。金を以て。鬼神の形を。作りたるが如し。形に難有と。こわひとの。かわりはあれども。金の體に。少しもかわりはなし。因てたれにても。金の鬼を見付たらば。早速鑄とらかして。大判。小判。一分などにして。自由につかひ用ゆべし。此譬への如く。見たひ。聞たひ。をしひ。ほしひ。あつひ。さむひの念を以て。即ち念佛の念に。なすべきものなり。右の通り。是心作佛。是心是佛と。佛の說せ玉へる意を知て。即心念佛を勤むれば。限りなく深

く大いなる。功徳利益あることなり。因て觀經に。稱佛名故。除五十億劫生死之罪と說。五逆十惡を作れる人も。臨終の十念にて。重罪を滅し。往生する旨を說せ玉ひたり。此程難有。大なる功徳はなし。此即ち即心念佛を明せる。御經の說なるゆへ。如此の大功徳あり。淨土の三部經の中に。無量壽經。阿彌陀經には。即心念佛の旨を明さず。觀經ばかり。是心作佛。是心是佛の觀念を明すゆへ。前の如きの大功徳あり。因て天台大師は。此經明觀。故說得生と釋し玉ひ。無量壽經には。觀心を明さるゆへ。五逆謗法の人を嫌玉へりと。仰せらる。然れば。何ほどの重罪を造たる人も。懺悔念佛すれば。決定して往生すと許すは。即心念佛を明せる。觀經の力用なり。勤むべきは。即心念佛なり。但し即心念佛の意を。能く合點したる人は。左様の功徳もあるべし。吾等底の。即心念佛の意の。合點のゆかぬものは。何とて。左様の功徳あるべきやと云。疑あるべきことなれども。合點のゆかぬこと

も。度々聞ば。後には合點ゆくものなり。退屈すべからず。其上又。人の宿習は。知ぬことなり。面々昔し如何なる種を。まさきたるも。知ぬことなれば。念佛の功徳にて。昔しまきをける。大乘の智慧の種が。發することもあるべし。天台宗の念佛申しの。圓解の明らかならぬは。大いに富る盲兒の如くなるべし。大福長者の家には。七珍萬寶。衣服米穀。數かぎりもなくあれども。目の見へぬ。長者の子は。其寶物を見分ることは。曾てならず。寶は目に見へねども。父母の言を聞て。家の内に。七珍萬寶盈満りと思は。心面白かるべし。況や飢こゝへに。及ぶべきかなどの氣遣は。微塵もなき筈なり。即心念佛には。無量の功徳備りたりと聞て。其譯は。心の目に見へねども。こゝろよく思ひ。決定往生に氣遣なくて。勤むべし。勤めてゆく内には。念佛の功徳にて。過去の罪が滅し。さとり目開けて。大いに喜ぶことあるべし。たとひ業障重くて。今生にて。悟りの目開けずとも。往生したら

ば。彌陀。觀音の。諸法實相。除滅罪の法を。說せ玉ふを聞て。早速に甚深の悟りが開くべし。此亦觀經に。慥なる證據あり。此界にて。小乗の修行を務めたる人は。其小乗の行を。回向發願すれば。極樂へ往生す。極樂にて。鳥の聲。林の音を聞て。小乗の法を悟り。阿羅漢果を得と說せ玉へり。此れ宿種ゆへなり。此にて知り。即心念佛を務むる人は。縦ひ今生に。明かなる圓解開けずとも。往生したらば。速かに諸法實相の圓解。豁然と明かに開くべし。事の念佛ばかりにて。往生したるは。宿習なきゆへ。悟りかねて。ぐづぐづべし。其人が。即心念佛の人の。早く悟るを見ては。けなく思ふべし。勤むべきは。即心念佛なり。上だんだん云通りは。觀經の所說なれば。即心念佛の名は。近く四明より出れども。根本は。佛の所說にて。未來世の。一切の凡夫の爲にし玉ふ處なれば。慥に思ひ。信受して。勤むべきことなり。善導。法然の勸めの。事の念佛は。大慈大悲より。末世の劣機に返せんがため。

段々と念佛をひきく説なし玉へるゆへ。段々と佛の本意は薄くなるなり。傳教大師の玉へる。牧女添水之乳。終少本味と云ものなり。涅槃經の菩薩品に。如牧牛女。爲欲賣乳貪多利故。加二分水。轉賣與餘牧牛女人。彼女得已。復加二分。轉復賣與近城女人。彼女得已復加二分。轉復賣與城中女人。彼女得已。復加二分。詣市賣之特有二人。爲子納婦。急須好乳。以供賓客。至市欲買。是賣乳者。多索價直。是人語言。此乳多水。實不直是值我今日瞻待賓客。是故當取。取已還家用煮作糜。無復乳味。雖無乳味。於苦味中。猶勝千倍。何以故。乳之爲味。諸味中最とあり。此喻は。滅後弘經の人のことを。説玉へり。善導法然の勸めは。大分水を加へたる乳なり。去れども。出離生死の法なれば。九十六種の外道等の法よりは。百千萬倍勝れたり。吾宗の即心念佛は。少しも水のまじらぬ乳の如くにて。佛の本意に能くかなひたる念佛なり。勤むべきは。即心念佛なり。

即心念佛の四字の義理の事

即心念佛とは。即心念佛と讀なり。即と云は。つくともむなり。つくとは。離れぬことなり。心とは。各我等が。現前の心なり。念とは。をもふなり。佛とは。西方の阿彌陀佛なり。凡そ念佛と云は。根本。心に佛を思ふことなり。又口に南無阿彌陀佛と唱ふるも。念佛なり。口に唱ふるは。心にをもふより出るゆへ。口に唱ふるも。念佛と云なり。此は即心念佛の四字のこゝろなり。即心念佛の總ごゝろは。我心が周徧法界の體なれば。十萬億土の末への極樂國土も。我心を離れず。阿彌陀佛。觀音。勢至。清淨大海衆も。我心を離れずと知て。往生の願を起し。念佛申すが。即心念佛なり。即心念佛の義。此外にはなきことなり。かく云分は。むつかしき入くみにてもなし。合點し難きこともなければ。いかなる人も。合點ゆくべきことなり。只此意を忘れずして。念佛申すにつけて。此意を思ひ。此意を思ふて。念佛申すが。即心念佛なり。右云所は。即心

念佛の大きなり。取要言之と。云ものなり。猶此を委細に説のべば。即心の即の字は。つくと云は。物が二ありて。とりつきたる様なれども。左様にてはなし。我心も法界。阿彌陀如來も法界なれば。心と佛と一體なるを。即と云なり。法界の理體は一なれども。彌陀は。結構なる佛にて。西方に在し。我等は迷ふて。此界に在。此界の人の心にて。西方の彌陀を念すれば。事の方より。約心の。即心のと云ことが出來たり。さて心と云は。面々の心なり。心の體は。色もなく。形もなければ。一とも云れぬものなれども。心の起り様に付て。此を分れば。八識。九識と云ことあり。目で物を見る心を。眼識と云。耳で聲を聞心を。耳識と云。鼻で物をかぐ心。舌で物をあじをふ心。身に觸て知心を。次の如く。鼻識。舌識。身識と云なり。只心の中にて。色々のことを思ふを。意識と云なり。立ても。居ても。寤ても。寐ても。我を忘れぬ心を。第七識と云なり。とくと能ねいりて。夢も見ぬ時も。死人に

あらざれば。心あり。其心を。第八識と云なり。その第八の見分を。第七が認て。我なり。法なりとするなり。第九識と云は。八種の識の。總體なる心なり。總體と云は。性相の分ち。染淨の分ちに。そむかぬことなり。禪者は。心法無形。通貫十方。在眼曰見。在耳曰聞。在鼻曰香。在口談論。在手執捉。在足運奔。本是一精明。分爲六和合といへり。目で物を見。耳で物を聞。心は。ちよつと起りて。擊石火の如く。閃電光の如くにて。ひつかり。ちらりとしたる。やうなる。ものなれども。其體は。みな周徧法界の物なり。心の内で物を思へば。心は我身の内。胸の間にある物のやうなれども。左様に思ふ所の物は。縁影と云て。鏡の中の影の如くにして。鏡の光りにもあらず。鏡の總體にもあらざる如くなり。心で物を思ふ其體は。色もなく。形もなく。聲もなく。臭もなく。過去にいつ始ると云こともなく。未來にいつ終ると云こともなく。東西南北。十方法界。どこにはてもなき。周徧法界の體なり。

因て大佛頂經には、含吐十虛、寧有方所」と説て、吾等が物を思ふ心は、十方の虚空を、吐出しもし、又十方の虚空を、含でもをるものなり。然れば、十萬億土、はるかに遠く、彌陀如來、結構なる佛と云ども、我心を離れぬが、即心なり。さて念佛と云は、前に云し通り、根本、心に思ふことなり。然るに、佛教の意、無想無念を談する。一筋あり。因て禪宗などは、殊の外、念を嫌ひ、想を嫌ふなり。然れば、念佛は、迷の方なるべしと云不審。古へよりこれあることなり。此云分も、古への祖師達、くはしくしをき玉へり、其趣きを、荒増申さば、先づ儒書の意にても、書經の多方の篇に、惟聖罔念作狂、惟狂克念作聖とあり。此語は、藕益大師も、度々引用し玉へり。此語の意は、たとひ上々の聖人なるも、善を念せざれば、狂亂の人となる。たとひ下々の亂氣人も、善を念すれば、聖人となるなり。念ほど能事はなきなり。さて楞伽經には、用楔出楔と説玉へり。楔を打抜には、其わきに、また楔をう

てば、本の楔が抜出るなり。此譬への通り、念佛の念にて、諸の妄想惡念が抜出るなり。猶又、眞實の無念無想の位は、只彌陀、釋迦の如くなる究竟妙覺の位なり。其より下は、起信論に、一切衆生、從本以來、念念相續、未曾離念と説て、一切衆生は、念想を離れざれば、念でなければ、修行はならぬなり。猶又、法華圓頓の意は、修惡全性惡と知ば、念が即ち無念なり。此が即心念佛の極意なり。如此念即ち無念、修即ち性なれば、高聲に南無阿彌陀佛と唱へ、數珠をくりて、所作を勤むるを人が見て、能く念佛申すと云ば、一念も不念、一返も不申と答へても、そむかぬことなり。さて所念の佛は、三身具足の彌陀なり。三身は、三諦なり。三諦の彌陀を念するは、即ち一心三觀なり。此理を知て、此理を照すは、上々の人なり。此理を知ねども、此理は離れぬものなれば、愚癡無智の人の申す念佛も、一心三觀の即心念佛と云に、相違なきなり。此則即心念佛の人よりは、事の念佛申すも、即心念佛を

離れずと見れども、事の念佛申しの方よりは、左様にはる云ぬなり。因て法然上人は、唐土吾朝の、諸の智者達の、沙汰し申さるゝ、觀念の念にも非ず。又念の意を、悟りて申す。念佛にも非ずと、拂ひ玉へり。親は子の事を、善惡につけて、能く思へども、子はわらくすれば、親の事を、思はぬが如し。天台宗の意からは諸宗の淺さ、深さ、高し、低しを能く分ことも、自由なり。又淺きも、深きも、皆一佛乘にて、結構なる修行と、みなすことも、自由なり。是が法華經の、相待判變と云。絶待開權と云の意なり。然れば、即心念佛と申す人は、諸宗の親なるべし。因て法華經の藥王品には、又如大梵天王、一切衆生之父、此經亦復如是。一切賢聖學無學、及發菩薩心者之父と、説せ玉へり。同發菩提心、往生安樂國と、唱ふる人は、皆即心念佛を父とすべし。即心念佛と云は、段々言通り、淨土も、彌陀も、我心を不離と照して、念佛申ことなり。此外にはなきなり。

即心念佛の申し様の事

總じて念佛修行の儀式、法要等は、自他宗の祖師達の、具さにのべをき玉へることなれば、今此を申し沙汰するに及ばず。今は即心念佛の申し様の沙汰なり。其に就て、拙僧が、先年より申す通り、凡そ世間の藝能には、手前と云事を、本にするなり。又能をし、舞をまう人、たばこきぎみ、かごかきまでも、腰をすゆるが本なり。然れば、即心念佛の行者も、手前を能し、腰をすゆるを、本とすべし。其手前、腰のすへやうは、とかく佛道修行は、六道の中にては、人道が最上なれば、人間の心になり。人間の心を失なわぬが、念佛申しの手前、腰のするやうなり。ひつかりすれば能見、くわつたりと云ば、能聞、高き處に上れば、遠き處をも能見、しづかになれば、十方の事も能聞は、不思議に、明かなる心なれども、此心は、犬猫にもあり、牛にも馬にも、持たる心なれば、人の心とは云れず。近き比の去禪宗は、鳥が啼ば、明かに聞、犬がほゆれば、明

かに聞ものが。不生不滅なりと示さる。なるほど。其體が。不生不滅にてはあれども。それは。犬にも猫にもある不生不滅にて。人の心の不生不滅には非ず。人の心と云は。體能義讓。即人道心と釋して。仁義禮智の心が。人の心なり。其體が。不生不滅なるものなり。孟子に。無惻隱之心非人也。無羞惡之心非人也。無辭讓之心非人也。無是非之心非人也と云て。物をあわれみいたむ心なきは。人に非ず。はちにくむ心なきも。人に非ず。辭退しゆづる心なきも。人に非ず。是非を分つ心なきも。人に非ず。此は是此は非と能分つが。人の心なり。あらずひかつ心なく。人に譲りじぎするが人の心なり。此はせまひ事。此はきたなひ事とはちにくむが。人の心なり。一切の物をあわれみて。少しもむごひ心のなきが。人の心なり。此心を。儒者には。四端と云。仁義禮智の本と云なり。佛家にては。不殺。不盜。不婬。不妄語の。四戒の意なり。此心を推し立。推ひろめ。此念を失なわす。そだて守るが。念佛

申しの手前。腰のするやうなり。念佛さへ申せば。心はきたなくても。惡を作りても。不苦と云様なることは。なきことなり。右云が如く。即心念佛の。手前をたしなみ。腰を能するて。其上に勤むる。即心念佛の中し様は。段々あることなり。めんくの。力次第なり。藕益大師は。將平日觀心得力處。融入持經念佛との玉へり。平生一心三諦。一心三觀のことを。能明らめ得たる人は。何の造作もなく。南無阿彌陀佛と申す處に。一心三觀が。あきらかなり。此は。上々の即心念佛者なり。我先師の玉へるは。即心念佛。其要唯在修惡即性惡也と。此意は。我等が妄心が。法界に徧じたるものなれば。十萬億土の極樂も。彌陀。觀音も。我妄心を離れず。故に極樂の依報。正報が。即ち我妄心なり。我妄心が。即ち彌陀の依正なり。我妄心。彌陀の妄境が。即ち性惡なれば。妄の當體が。三諦法界なり。かく照すは。三觀なり。それゆへ。即心念佛の要は。修惡即性惡に在との玉へり。如此の玉ふは。性惡と云

ものを能合點して。性惡は。法性の惡なれば。惡が。即ち法性にして。三諦法界なることを。能平生明らめ得て。居られしゆへ。妄心妄佛。即ち性惡と。一念照す處に。三觀が自ら明らかにして。即空即假即中と。觀じ運ぶに及ばぬなり。此處。一大事なり。此ほどにゆく事は。なり難き事なれども。心がけによつて。なるまじき事にもなきなり。上に云通りに。ゆかぬ人は。かやうに思ふべし。其思ひやうは。我心が法界なり。阿彌陀如來も法界なれば。能念の心の外に所念の佛なく。所念の佛の外に能念の心なし。能所がなければ。即空法界なり。ともに法界なれば。彌陀も三千具足。我心も三千具足。各具し互ひに融じたる體なれば。即假なり。即假の義あり。即空の義あるは。其體性。空に非ず。假に非ざる中道法界の體なるゆへなり。如此一念の念佛の處に。三諦圓融せりと。思ふべし。三諦の理の。明らかならぬ人にて。とかく我心が法界なれば。西方の彌陀は。我心の内の彌陀なり。

我は。彌陀の心の内の衆生なりと。思ふて。念佛するがよきなり。此念佛の功積らば。次第に三諦の理が。明らかなるべし。此分は。學問せぬ人も。なるほど覺へ易きこと。心得易きことなれば。天台宗の念佛申しは。必ず此意にて。申すべし。即心念佛の安心決定。此外にはなきことなり。此安心に。淺きあり。深きあり。暗きあり。明らかなるあるは。又なるほどあることなり。是心作佛。是心是佛の文の上に。諸佛如來。是法界身。入一切衆生心想中と。說せ玉へり。佛の身は法界なれば。一切衆生の心想の中に入玉ふ。心と。佛と。衆生との三は。其體差別なきゆへ。一切衆生の身も。法界身にして。十方の諸佛の心の中に入れてをるなり。我等が心も。法界心にして。十方の諸佛。彌陀。觀音の心の中に入れてをるなり。然れば。此意を知て。念佛申す人は。此界にありながら。極樂に往生してをるなり。臨終の時。息のたゆる時が。即ち極樂往生の極りなり。此を去と。彼に生ずるとは。はかりの。あが

り。さがりの如くにして。あとさきなく。只一時なり。因て天台大師は。臨終在定之心。即是淨土受生之心。動念即是生淨土時と。釋し玉へり。此文。心得やすきやうにて。人のとくとる合點せぬ文なり。此意は。人の死ぬるは。定心にては。死なぬものなり。それゆへ。念佛を申し入たる定心にては。いつまでも死なす。其念佛の定心を。動すれば。死ぬるなり。因て念を動するが。即ち淨土に生ずる時と。釋し玉へり。如是我心が彌陀。彌陀が即ち我心にして。三諦法界なりと云ことを。しづのをだまき。くりかへしくして。思ふべきことなり。然るに同じことばかりは。思ひにくきものなるほどに。極樂往生につきたることをば。折々はとりませて思ふも。苦しからぬことなり。此念佛の功德にては。過去の一切の罪がほろび。未來の一切の罪もほろび。現在の諸のつみとがも滅す。難有ことと思ひ。此念佛にて。臨終に決定往生を。とぐるやうにと。彌陀をたのみ奉れば。彌陀の悲願は。念々に我

心に薰じ。我念佛は。念々に彌陀の悲願をたゝき。淨業決定して。三尊の來迎にあづかりて。觀音の蓮臺に。打のらんこと。難有ことに非ずや。極樂に生しては。寶の池の。此方にて見なれぬ。四色の蓮華。青色青光。黄色黄光。赤色赤光。白色白光の蓮を詠めば。かぎりなく難有。面白かるべし。七重行樹の中をあるかば。此界の野邊。山邊の風景とは。百千萬倍ちがへば。大いなる氣轉じにて。自ら一心三觀の智慧も。朗らかならんと。難有思ふべし。かやうに。淨土の色々のことを思ふも。皆悉く三諦法界の理にして。一心三觀の勤めなりと。安心するが。即心念佛の安心決定なり。

即心念佛は往生無生なる事

即心念佛を務むる人は。極樂へ往生すれども。往生即ち無生なり。因て幽溪無盡大師は。淨土生無生論を。著玉へり。往生無生の義を。心得るに就ては。先佛法の至極の道理は。法性無生なり。無生を。亦是寂滅相とも名づけ。亦是不生不滅とも名付るなり。因て維摩

經の中に。法本不生。今則無滅。得此無生法忍と。說玉へり。諸法無生と云が。即ち不生不滅なり。法華經の方便品に。諸法從本來。常自寂滅相と說玉へり。諸法は。寂滅相にして。無生なり。昔し有禪宗。この諸法從本來。常自寂滅相の文を疑ひて。久しく思案工夫して。春の朝。鶯の啼を聞て。始めて大いに悟りが開けたり。因て頌を作りて。諸法從本來。常自寂滅相。春到百華香。黃鶯啼柳上と。いへり。此意は。春來れば。柳は綠。花は色々に咲亂れ。都は春の錦なりと見ゆるに。鶯の妙法華經とさへづる。春のけしき。それが即ち諸法寂滅相なりと。悟れるなり。かやうの春のけしきは。迷ひの厚き凡夫も。同じながめなるゆへ。相替らぬことと思ふへけれども。左様にてはなきなり。悟りの目より見れば。花は唯心法界の色。柳は唯心法界の綠。鶯は唯心法界の囀りなれば。凡夫の見る處とは。大いにかわれり。因て法華經の壽量品には。如來如實知見三界之相。無有生。死。若退若出。亦無在世。

及滅度者。非實非虛。非如非異。不如三界。見於三界と。說玉ひて。諸佛如來の見には。生もなく。滅もなきなり。然るに。極樂往生は。既に往生と云ゆへに。生なき中に生を見て。生を求むれば。迷ひの上の迷ひと云べし。佛道修行とは。云へからすと云疑ひ。古へよりあることなり。因て上代の祖師達。色々に會釋し玉へり。天台宗の意は。死は即ち唯心法界の死。生は即ち唯心法界の生なれば。往生すれども無生なり。往生を求むるが。少しも法性無生の道理に。そむかぬなり。事の念佛を申す人は。無生の道理を。沙汰はせねども。極樂へ往生すれば。自然に生滅の見がなくなるなり。因て曇鸞の往生論の註には。彼下品人。雖不知法性無生。但以稱佛名力。作往生意。願生彼土。彼土は無生界。見生之火自然而滅とあり。此通りなれば。事の念佛の人は。此界にては。生の見を離れず。極樂へ往生して。其後生の見を離るゝなり。然るに。事の念佛にても。淨土を期するは。小乗とは云れず。

大乘の事の行にてあるなり。去れども見解は。小乘三藏なり。涅槃經に。四教の意を。四句と説せ玉ひたり。生生不可説。不生不可説。不生不生不可説。不生不生不可説なり。生々は。三藏教なり。極樂へ生じ生すと思ふは。小乗の見解にあらずや。即心念佛の人は。此界にて。念佛申す時。はや生の見を離るゝゆへ。遙に勝れて。目出度修行なり。去ども。不生不滅の無生の理は。上根利智の人は。合點ゆくべけれども。學問もせぬ。愚かなる人は。いかでか合點ゆくべき。用にも立ぬことなりと。思ふ人あるべけれども。左様にてはなし。無生の理を。深く明らむることこそ。なり難きことなれども。無生のきみあひを。大様合點することなるまじきことにあらず。合點すれば。相應の利益あることなり。昔しの人の云るは。往生を求むる人は。死ぬると思ふべからず。只生ると思ふべしと。示せり。此よき示しなり。深き道理にも。相叶へり。死ぬると思へば。物がなしく。心ぼそし。生るゝと思へば。

面白く。未だのもし。此ことは。いかなる愚かなる人も。合點し易きことにあらずや。然るに。死ぬればこそ。生るゝと云ことあれ。死なねば。生るゝと云ことはなきなり。死ぬとは思はずして。生るゝと思ふなれば。實には生れもせぬなり。よく合點すべし。極樂往生は。別のことはなひ。遠き處に。遊びに往と思ふべし。都の人が。吉野。初瀬の花を見に往。須磨。明石へ。月を見に往は。宿。出るを。死ぬと思はず。彼地へ往を。生ると思はぬゆへ。只月を見。花を見んと。心面白く思ひ。いさみすゝんで。遠き處なれども。ゆくなり。即心念佛の人。臨終の時。死ぬると思はず。只八功德水の月を見。七重行樹の花見に往く心なれば。大安樂大快樂の往生なり。此心になりきはまりたるが。眞實の念佛申しなり。何とぞかやうに。安心決定するやうにすべし。若人ありて。何の爲に念佛申すぞと問は。八功德水の月見の爲。七重行樹の花見の爲と。答ふべし。それはこなた。死にて後のことにてはなしやと問

ば。此方の宗旨には。死ぬるの。生るゝのと云ことは。御座なく候と。答ふべし。若然らば。何とて往生を求め。臨終正念など願ふやと。難せば。死なずして死に。生れずして生るゝゆへなりと。答ふべし。死なずして死に。生れずして生るゝは。生死ありながら。生死はなきなり。如此安心すれば。生死に於て。大自在なり。大安樂なり。かやうの道理は。學問せずとも。志あり信心ある人は。合點ゆくべし。然れども。死なずして死に。生れずして生るゝと云ことは。大方の人が。深く信徹して。難有殊勝に思ふことありかぬべし。今通二箭路。箭一すぢほどの。ほそき路すぢを付べし。不死而死。不生而生ると云ことの。合點のゆかぬは。無始より以來。死ぬと思ひ。生ると思ひつけたるゆへなり。然れば。不死と云處。不生と云處を。隨分力をつくして。つよく思惟すべし。左様にしたらば。不死而死。不生而生る處が。難有殊勝に思はるべし。譬へば。砂糖など入たる曲物のふたが。とりてをとつて引

ども。とられぬときは。そのふたの。一方をつよくせば。一枚板なれば。必ず前がさがりて。向があがり。ふたがよくとらるゝなり。如此死ぬる生るは。一法界にて。一枚板の如くなれば。死なぬと云處。生れぬと云處を。つよくをしたづぬれば。死ぬる生るゝのさきが。あがりて。不死而死に。不生而生るゝのふたが。よくとられて。難有殊勝に思はるゝなり。昔し天衣の懷禪師。有時學者に問玉はく。若言捨穢取淨。壓此欣彼。則是取捨之情。衆生妄想。若言無淨土。則違佛語。修淨土者。當如何修と。此意は。穢土をすて。淨土をとると云ば。取捨の情とて。妄想妄念なり。若又淨土なしと云ば。佛の言ばに背く。いかなが修行すべきと。問はれたれども。答ふる人なきゆへ。禪師自分に答へて云り。生則決定生。去則實不去。又譬を取て云。如鴈過長空。影沈寒水。鴈絶遺踪之意。水無留影之心と。此答の意は。念佛の行者は。生ずることは。決定して淨土へ生ずれども。去ことは。實

に不去となり。去と云は。此土に死して。彼土にゆき去ることなり。此土に死して。西方に往き去ることは。實にはなしと云ば。生ずることも。決定して生ずれども。實には生せぬなり。此即決定往生が。即不生不滅なり。譬の意は。鴈が空をとべば。影が水に浮ぶ。影は浮べども。水に心なく。鴈にも心なきなり。鴈の影の水にうつるは。極樂往生なり。鴈に心なく。水に心なきは。往生即ち無生なり。如此の道理。一度聞て合點ゆかずとも。度々聞たらば。後には合點ゆくべし。斷へず修行したらば。無生の道理自然に朗らかになりて。上品上生の往生も。とぐべきものなり。然るに又。即心念佛の人にて。正しく往生の期に至らば。跡に留まる人が。涙をこぼすべし。其を見たらば。往生する人も。涙を浮むべし。事の念佛の人が。見たらば。あれを見よ。平生死ぬるの。いきるのと云こととはないと云。即心念佛申しも。まことのときは。涙をこぼすと。笑ふべし。此笑ひ。尤もなるやうにて。聞へぬことな

り。譬へば。御公家の御歴々が。姫君を歴々の大名へ遣さるゝには。先づ云ひ入があれば。其姫君や。御兩親は勿論。御家頼や。御親類衆まで。さても目出度。結構なる御事。御影にて我等まで浮むべしと。大いに喜ぶはづなり。其喜び。物などもらうに付て。次第に段々と。深くなるはづなり。喜びの止ことは。あるべからず。然れども。諸事調ひ。時至りて。正しく江戸へ。御下りなさるゝは。今日なりと云ときは。なごりををしみて。人々皆涙をこぼし。袖をしぼるべし。何ほど。涙をこぼしても。最前の喜びは。心の底にあつて。少しもかわるまじ。即心念佛の人も。亦如此死ぬる生ると思はず。極樂へ。遊びにゆくと云合點なれども。正しくふみだす段になりては。暫時の別れに。涙をこぼすべし。御笑ひやるな。

末世の要行は即心念佛なる事

總じて先。往生極樂を求めて。念佛を務むる人は。佛教の大意を。よく知たるにてなければ。安心決定

せぬなり。淨土念佛の法門。たやすきことにあらず。輕きことに思ふべからず。淨土宗の人の。念佛を務むるは。宗旨の建立にて。習ひ來り。仕來りたるばかりのことにて。佛教の大意を。よく知。見識あるより務むるにあらざれば。尊むに足す。尤事の念佛不足尊と云ことにてはなきなり。天台は勿論。禪宗にても。其外の宗旨にても。佛教の意を。能明らめて。生死と云ものは。こうしたこと。凡夫と云は。こうしたもの。修行の位は。だん／＼こうしたこと。能明らめたる人は。皆極樂往生を求むるなり。其ゆへは。佛法は。別の爲にてはなし。只一切の衆生をして。生死の輪廻を離れて。常住不滅の。結構なる佛にならしめんが爲なり。生死の輪廻に就て。二つあり。地獄。餓鬼。乃至人天の生死流轉を。界内分段の生死と云なり。聲聞。緣覺。菩薩も。微細の生死輪廻を免れず。此を變易の生死と云なり。先その界内六道の生死を。我でに出離すること。中々。一世や。二世の修行にては。難成こと

なり。佛の教への。種々の觀念法を修して。色々の邪見惡見を離れ。見ること聞ことに迷ふ心の。思惑と云ものを。ちりほこりほどもとゞめず。斷じ盡したるにてなければ。我でに自然に。界内六道の輪廻を。離るゝことはならぬなり。それを。なるやうに勤むるには。てまがいのるゆへ。退屈したり。縁にひかれて。しりぞひたりするゆへに。此界の修行は。中々。はかどらぬことなり。阿彌陀佛をたのみて。念佛を修すれば。臨終に。必ず極樂へ往生す。往生すれば。諸の修行のさはりを離れ。風のをと。鳥の聲までも。妙法をのぶるゆへ。退轉の因縁は曾てなく。自然に深妙のさとりが開くるなり。誠に生るべきは。極樂淨土なり。因て馬鳴菩薩の起信論の中に。初學大乘正信。以在此土。不常值佛。懼謂信心意欲退者。當知如來有勝方便。攝護信心。但當專念極樂世界阿彌陀佛。眞如法身。畢竟得生。住正定故。論判し玉へり。四明尊者。此文を引て。末世行人。淨土を求むるわけとし玉ひ。又

念阿彌陀佛真如法身と云がゆへに。即心念佛の證據とし玉へり。然るに。極樂往生を求むることは。事の念佛にても。能なることなるに。何とて即心念佛が。末世の要行なりとは云やと云。疑ひあるべきことなり。此をよく心得べし。凡そ佛教の意は。心を知より。外にはなし。生死出離の法は。心を観するより外にはなし。因て心地觀經の中に。生死沈與不沈。由心性觀與不觀相を。能觀心者。究竟解脫。不能觀者。究竟沈淪と説り。明らかなることなり。達磨大師は。直指人心。見性成佛と云り。禪宗の至極大事。此外にはなきことなり。馬祖は。即心即佛。非心非佛。不是心。不是佛。不是物との玉へども。畢竟は。直指人心。見性成佛を。顯さんが爲なり。因て曇橋州は。即心即佛。非心非佛。是馬大師直指人心。見性成佛之旨と云り。密教の意は。大日經に三句の法門あり。第一句は。菩提心爲因なり。其菩提心の相は。如實知自心と説り。實の如く自心を知なり。然れば。佛の教へ。出離生死の道

は。心を知外にはなし。このゆへに。事の念佛ばかりにては。佛の教への根本に遠く。出離生死の道すぢ。近からず。即心念佛は。事の念佛の上に。一心法界なれば。彌陀も我心。淨土も我心と觀し照すゆへ。佛教の根本にかなひ。生死出離の路が。往生せぬさきにはや。少しづゝひろくなるなり。即心念佛。豈至要の行にあらずや。事の念佛にても。極樂へ往生すれば。早速さとりが開くるやうに思ふべけれども。左様にてはなし。前にも云し通り。心觀の宿習がなければ。淨土にても。早速には悟り開けがたきなり。さて又。佛法の修行は。さまざまの法門あれども。事理の二つの外はなきなり。禪宗などの如き。理を貴む人は。事の行がかくるなり。淨土家などの如く。事の念佛ばかりを務むるは。理觀がかくるなり。事理の二行は。鳥の兩の翼。車の兩の輪の如くにて。一つもかけてはならぬものなり。此譬能思ふべし。吾宗の即心念佛は。事に即して理を照し。理に即して事を修するゆへ。鳥の

兩翼。車の兩輪の如くにて。自由自在なることなり。末世の愚癡無智。此修行は。なるまじきことといへども。左様にてはなし。女にも。男にも。貴にも。賤にも。智慧聰明なる生れつきの人をし。能教へ。能習ひたらば。なるまじきことにてなし。只志しなく。教へやうのわるきゆへなり。昔しの龍女の作佛せしは。畜生なり。觀經の當機なる韋提希夫人や。五百の侍女は。皆歴々の女人なり。六祖大師は。越前の中からうすふみのやうなる人なり。石鞏禪師は。奥山の獵師なり。それでも。さとりが開。大祖師となれり。日本の橘皇后は。禪を悟りて。もろこしの。山のあなたに。たつ雲は。こゝにたく火の。煙りなりけりと。よみ玉へり。此歌を。去人。隔山見煙。早知是火之意也と云て。比量智の意と云り。禪を嘗て知ぬ云分なり。此歌などは。活句と云ものなれば。義理の付られぬことなり。千代野と云女は。餘り遠き世の人には非ず。美濃國。武義郡。松見寺と云尼寺の。仕女なり。菜つみ。水くむもの

なりしが。禪の工夫をして。終に悟りが開けて。とやかくと。巧みし桶の。そこぬけて。水たまらねば。月もやどらずと。讀たり。此歌。世上には。千代野をが。いたゞく桶の。そこぬけて。水たまらねば。月影もなしと。覺へてをるなり。千代野が傳と云ものには。前の通りの歌なり。此歌の意は。禪宗の嫌ふこと。入ぬ註釋なれども。緣影の無體なることを知て。本心の無相空寂なる氣味を。合點したるなるべし。無相空寂と云に付ても。通教の無相空寂あり。別教の無相空寂あり。圓教の無相空寂あり。圓教の無相空寂でなければ。即心念佛の心體とは云れぬなり。千代野が味ひたる處は。定て通教の無相空寂か。別教の無相空寂なるべし。如此なれば。貴きも。賤きも。女人にても。學問せぬ文盲なる男にても。志あれば。道理は能悟るものなり。今の世とても。志あり。善教へを受たらば。智慧明かに。なるまじきものにてはなし。智慧明かになりたらば。淨土を求むることは。入まじと疑べけれど

も。その智慧に。だんくこれあるゆへ。天台大師を始め。悟り開けたる人々。皆念佛申して。往生を求め玉へり。能佛教の修行の位。だんくこれあることを知。究竟妙覺の佛にならんことを。求め玉へばなり。さて又。浄土宗は。事の念佛が。時機相應と云ども。左様ばかりではなきはづなり。時機相應と云ども。日本國が。浄土宗ばかりにもならず。天台宗もあり。禪宗もあり。眞言宗もあり。此等の宗旨は。時機不相應かと思へども。左様にてはなし。志しありて學ぶは。右の宗旨の人に。面々の宗の意を。明かに知て。能勤むる人。間々有之ことなり。浄土宗は。時機相應かと思へども。眞實に念佛申す浄土宗は。甚だすくなし。浄土宗僧に。宗風にて。人には念佛を勸むれども。心の底には。浄土もなし。阿彌陀もなしと。撥無したる人。甚だ多し。何として。知ぞと云ば。其人々の平生の身もちにて。知ることなり。此ことは。委しく云に及ばず。少し心ある人は。皆合點の前のことなり。

尤も此事。今時諸宗の僧。皆大様同じことにてはありなり。然れば。事の念佛ばかりが。時機相應にて。即心念佛は。時機相應にあらずと。云べからず。前々も云し通り。極樂も。彌陀も。我心と知て。念佛申すに付て。此理を思ふが。即心念佛なりと云ことは。心得がたきにもあらず。覺へにくきことにもあらざれば。志ある人ならば。なるほど務めらるべきことなり。願くは。無常の速なることをよく知て。本性の彌陀をたのみ。唯心の浄土に生じ玉へ。

即心念佛の功德利益の事

即心念佛は。事の念佛より遙に勝れて。功德利益。廣大無邊なり。前にも云し通り。先三世のつみとがを。滅することが。廣大なり。觀無生の懺悔を。大地をくつがへせば。諸の一切の草木。一度に皆かるゝが如しと云り。如此觀念理持の。即心念佛ほど。滅罪廣大なるはなし。さて又。同じ念佛にて。同じ浄土に生ずれども。即心念佛の人は。浄土の依報。正報を。感見し奉

ることが。殊の外勝れて。微妙不思議。結構至極なり。因て四明尊者は。永異事善。及小乘行。得往生者と。釋し玉ひて。即心念佛の人の見る境界は。事の念佛。小乘行などの人の。往生して見る處とは。大いにちがへりとなり。猶又。如諸經說。凡小善行。廻向求生。縱依大乘。仍是散善。故感安養。淨相猶劣。若今頓教。心觀妙宗。所見淨相。永異他部と。釋し玉へり。此意は。觀經に說玉へる浄土の相は。餘の浄土部の經に。說玉へる。浄土の相よりも。遙に勝れたり。其ゆへは。觀經には。是心作佛。是心是佛の。即心念佛を明すゆへ。其念佛の人の。見る處の相なれば。結構至極にて。事の念佛の人の見る處とは。大いにちがへりとなり。如此同じ浄土が。此界の念佛の人の。智慧の勝劣にて。大いにかわると云は。業力所隔。感見不同と云て。めんくの業力から。見る處が。かわるものなり。一つの河を。餓鬼は膿河と見。魚等は宅路と見。人は清水と見。天は寶の地と見。空定を得たる人は。但空の

みと見る。此に就て。一質異見。異質異見と云ことあり云云。事の念佛の淨業力も。不思議にして。往生はすれども。其人の前には。浄土の相が。あまり勝れぬなり。即心念佛の。淨業力にては。見る處の浄土の相が。殊の外勝るゝなり。そのはづなり。老僧四十餘りの比より。牡丹芍薬を植て樂めり。其比は。目が能見へたるゆへ。花の色つや能見へ。はんなりとしたる處が。明らかに能みへて。見事なりしが。七十に餘りて後は。目殊の外。わるくなりたるゆへ。老年花似霧中看と云て。霧のふりかゝる中に。花を見るやうにて。花の色つや。はんなりとしたる處は。明らかならぬゆへ。昔しのやうに。見事にはなきなり。此を以て知。事の念佛の人の。浄土に生じたるは。老人の見る花の如く。寶の樹。寶の地。寶の池。金の蓮の花。色つや明らかにはなく。又廣大無邊の相も見へまじ。即心念佛の人の。見る所の寶の樹。寶の地。寶の池。金の蓮は。わかき人の目にて見る花の如く。色相莊嚴。微妙清淨。

不思議廣大なるべし。猶譬を以て。此を云に。東國西國の田舎人。京都を見物に上りて。やどを借が如し。金持ぬ人は。三條の小橋あたりの。巡禮やどならでは。得べからず。金を多く持たる人や。歴々の人は。京中にも。結構なる座敷。廣き處をかりてをり。或は木屋町邊にても。結構なる借座敷。風景のよき處にをりて。楽しむなり。此めんくの。福力次第なり。即心念佛の人の見る處。永異事善。及小乘行。得往生者と。釋し玉ふ。四明の御釋。疑ふべからず。事の念佛の人が。往生したらば。極樂の巡禮やど位にならでは。をるまじ。かやうに云を。淨土宗などが。聞たらば。此は。勿體なきわる口なり。極樂に何ぞ巡禮やどあらん。念佛者の信心を。云さますなりと。しかるべし。此方の心。事の念佛者の信心を。云さますに心はなし。即心念佛を。たきつけんとの心なり。かやうの校量は。經論に多くあることなり。事理の勝劣を。たくらべあらはさんが爲に。今此を云なり。善住天子經に云

く。文殊。告舍利弗。聞法生。墮於地獄。勝於供養恒沙佛者。此通りなれば。諸佛を供養するは。用いたぬこと。わけもなきことと。聞ゆるゆへ。勿體なき。わる口と。聞ゆれども。かやうの校量。甚だ多きことなり。わる口などにては。曾てなきなり。福よりも。智の勝れたることを。顯さんが爲なり。三條あたりの巡禮やどは。山邊の柴の編戸や。海邊の海士の蓬やに。くらぶれば。京の町屋ゆへ。遙に勝れたり。極樂の巡禮やどの位なる處も。極樂なるゆへ。娑婆世界の穢土などに。中々これあることにはなき。結構なる處なり。至極愚癡無智のともがらは。極樂の巡禮やどにても。たぬべし。少し智慧ある人は。即心念佛を勤めて。結構至極。廣大無邊。不思議微妙の。玉の臺に登り玉へ。さて慧心の先徳の。往生要集の中に。知心作佛。有何勝利と。問玉へり。是心作佛。是心是佛の問なり。此を答玉ふ時。若觀此理。能了三世一切佛法。乃至一聞。即得解脫。三途苦難。如華嚴經如來林菩薩偈

云。若人欲求。知三世一切佛。應當如是觀。心造諸如來。華嚴傳曰。文明元年。京師人姓王。失其名。既無戒行。曾不修善。因患致死。見被二人引。至地獄門前。見有一僧云。是地藏菩薩。乃教王氏。誦此一偈。謂之曰。誦得此偈。能排地獄之苦。王氏遂入。見閻羅王。王問此人。有何功德。答云。唯受持一四句偈。具如上說。王遂放免。當誦此偈時。聲所及處。受苦之人。皆驗解脫。王氏三日始蘇。憶持此偈。向諸沙門說之。參得偈文。方知是華嚴經第十二卷。夜摩天宮無量諸菩薩雲集說法品。王氏自向空觀寺僧定法師說とあり。此意は。是心作佛。是心是佛を。知ば。一切の佛法を解し。一度聞ば。三途の苦難を免ると云て。華嚴經の破地獄の文の利益を。引玉へり。此即ち觀經と。華嚴經との。文の意同じきゆへなり。たしかなる利益。疑ひなきことなり。此文に就て。地獄を破滅する道理は。諸の大乘經の中に。いかほどもあるべきに。地藏菩薩。華嚴經の此文を。授け玉ふは。何としたるゆへぞと云。疑もあ

るべきか。さて又。觀經。華嚴の。此文の功德利益を云ときは。地獄を破るばかりは。餘り廣大なることにてはなし。觀經。華嚴の文を。會得すれば。三惡道をのがるゝことは。勿論のこと。人間の輪廻。天上の輪廻をも離れ。聲聞。緣覺。菩薩たちの。微細の輪廻生死をも。永く離るゝことなり。何ぞ只地獄を脱するを。觀經。華嚴の文の利益とせんやと。疑ふ人もあるべきか。此を心得るは。王氏の人。華嚴經の文に。何とぞしたる因縁ありしものならん。因て地藏菩薩。此華嚴の文を。授け玉へるならん。かやうの例これあることなり。さて又。觀經。華嚴の文の利益は。廣大無邊。甚深微妙のことなれども。其中に。しばらく近きを舉玉へるなり。若觀此理。能了三世一切佛法。乃至一聞と仰せらるゝにて知たり。唐土近代の袁中郎は。西方合論と云書を作りて。讚嘆如來不可思議度生之力。感得飛行自在。遊諸刹土。凡諸佛說法之處。皆得往聽。此實爲勝。非諸衆生所能及也と。弟の袁中道につげた

り。如來不可思議。度生之力とは。法華經に。定慧力莊嚴。以此度衆生とあるゆへ。佛の禪定智慧の力なり。それを讚歎せし功德にて。十方の諸佛の。説法の座につらなり聞と云り。大乘智慧の功德。廣大なること如此。然れば。少しづつなりとも。聞習ふべきは。大乘の觀法なり。急に精を出すべきは。理觀事行。一度に雙べ勤むる。即心念佛なり。

即心念佛の回向發願の事

淨土の修行は。肝要は。信。願。行の三なり。信。行の二は。前に大様申し沙汰せし處に。自ら顯はれたり。猶旭師の要解に。信自。信他。信因。信果。信事。信理の相を釋せられたり。即心念佛の信のすがた。あらわなり。具に彼文を見るべし。其に就て。信自の相を釋して。信我現前一念之心。本非肉團。亦非緣影。豈無初後。橫絕邊涯。終日隨緣。終日不變十方虛空。微塵國土。元我一念心中所現之物。我今雖復昏迷倒惑。苟能一念回心。決定得生自己心中本具極樂。更無疑

慮。是名信自とあり。此に就て。弟子の成時。評して云く。學者須從者裏。死盡偷心。不可草草と。尤もなることなり。人のうわばしりする處なれば。警策したるなり。行と云は。即心念佛なり。今即心念佛の。回向發願の相を。申し述ん。先回向と云は。回自向他。回因向果。回事向理こと。常のごとし。念佛の回向は。善導大師の。願以此功德。平等施一切。同發菩提心。往生安樂國の文。能あらはれたり。我申す念佛を。一切衆生に施して。同じく菩提心を發し。極樂に往生せんと。回向するなり。此分は。淨土宗と同じことなり。天台宗の意は。一切衆生は。我心具心造の衆生なれば。我心の内の衆生と知て。念佛の功德を施すゆへ。衆生縁の慈悲が。即ち無縁の慈悲と云。結構なることなるなり。其に往生する處の安樂土は。我心所具所造の極樂なれば。唯心の淨土なり。如此知て。善導大師の文を唱ふるが。即心念佛の回向なり。さて發願は。無盡大師の云く。第所發之願。有通。有別。有

廣。有狹。有遍。有局。通知長途修懺課誦。古德所立。回向發願之文。別則各隨自己之意所立。廣如四弘。上求下化。狹如自修自度。決志往生。局如課誦有時。隨衆同發。遍則時時發願。處處標心。要須體合四弘。不得師心自立と云云。具さに彼文を見るべし。願文は。自分に作るがよきなり。去ども。昔しの人作りたる願文が。我心にかなひたらば。それを用ひてもよしとなり。善導大師の發願經あり。慈覺禪師の發願文あり。慈雲懺主の發願文あり。何れも殊勝なる願文なり。拙僧が知る念佛申し。雲棲の發願文を。常に唱へし人。一兩人ありしなり。藕益大師は。大朗居士と云し時。四十八願を起されたり。阿彌陀如來の。因位の時のやうなることなり。上代の人にも。聞及ばぬ。不思議の志しなり。かやうの願。なにとぞ。發したきことなり。略なる願文を。用ひたくば。善導の發願經を。讀たるが然るべし。若自分に願文を作らば。四弘誓願の心に。よくかなふやうにすべしとなり。四弘誓

願は。一切の菩薩の。皆起す所なれば。總願と云なり。衆生無邊誓願度。煩惱無邊誓願斷。法門無盡誓願知。無上菩提誓願成の願。即心念佛の意に。かなふやうに。心得べし。衆生無邊誓願度と云は。衆生の生死が。即ち清淨涅槃なれども。衆生は。涅槃を全ふして。無始より以來。迷ひたり。其衆生を度して。生死を全ふして。即ち涅槃となさしめんと。誓ふなり。煩惱無邊誓願斷とは。修惑即ち性惡なるゆへに。煩惱は。本微妙清淨の法なれども。一切衆生は。無始より。性惡寂滅の體を全ふして。修惑煩惱のけがれとなして。をるゆへに。其衆生をして。煩惱即菩提とさとり。煩惱を。斷せずして。斷せしめんと。誓ふなり。法門無盡誓願知とは。一切衆生に。諸の法門を。知しめんと。誓ふなり。一微塵の中に。大千の經卷を納むと云譬は。めんくの一念に。本來無量無邊の法門を。具足してをるを。譬へたり。故にめんくんに。内證に持てをる法門を。盡く知あらはさしめんと。誓ふなり。無上菩提誓

願成とは。彌陀。釋迦の如くなる。無上菩提を。一切衆生に。得せしめんと。誓ふなり。此無上菩提は。四明尊者は。斯是行人。心之本性。所求之果と。釋し玉へり。殊の外難有釋なり。無上菩提は。行人の求め願ふ處の。結構なる大果なるが。其體を尋ねれば。別のものに。あらず。各は法を聽。拙僧は法を説。其聽者說者の性が。即ち無上菩提なり。一切衆生をして。此體を證じ得せしめんと。誓ふなり。此四弘誓願を成就すること。中々。一世や。二世になることにはなきゆへ。先極樂往生を。求むることなり。因て普賢菩薩も。願我臨欲命終時。盡除一切諸障礙。面見彼佛阿彌陀。即得往生安樂刹。我既往生彼國已。現前成就此大願と。願ひ玉へり。右の趣きにて。即心念佛の。發願の要を知べし。四弘誓願。前の如く。深妙廣大なることなれば。學問もせぬ。愚かなる人は。いかでか。此願を立得んと。思ふべけれども。四弘誓願のあらまはしは。いかなる愚かなる人も。願はるゝことなり。何とぞし

て。我も人も。生死輪廻を離れたし。我も人も。何とぞして。煩惱妄想を離れたし。自他共に。何とぞ少しづゝにても。法のごとは。聞くやうにしたし。自他共に。結構なる佛に。はやくなりたしと。平生願ひ思へば。四弘誓願の意に。かなふなり。いかなる人も。なるべきことなり。かへすゝ。即心念佛の安心は。別のことはなし。十萬億土の淨土も。阿彌陀如來も。我心が法界なれば。我心を出すと知て。念佛申すが。即心念佛なり。此外にはなきことなり。此心得に。淺きあり。深きあり。明らかなるあり。暗きはあるなり。隨分はげます。べきことなり。即心念佛の安心。淺くても。暗くても。功德は廣大なるべし。其證據は。涅槃經の四諦品の中に。若有能知如來常住。無有變異。或聞常住二字音聲。若一經耳。即生天上。後解脫時。乃能證知如來常住。無有變易と。此文の意。常住の二字を。耳に觸たるばかりにても。即天上に生ずる等とあれば。即心念佛の。名に聞たるばかりも。大功德を得べ

し。況や即心念佛の安心。淺くとも。暗くとも。もし決定せば。決定往生。疑ひなきなり。如來常住と云は。即ち是心作佛。是心是佛のことなれば。分明なる證據なり。信心なき人。佛語を信せぬ人は。格別。佛語を信じ。信心ある人ならば。即心念佛の功德。深く難有かるべし。さて此談義。他宗に向て。説べからず。他宗の中にも。禪宗などには。聞せても。害あるまじ。淨土宗などに向て。必ず説べからず。淨土宗は。信受せぬばかりにてはなく。いきどをりを起し。誹謗して。罪を得べきが故なり。淨土宗の事の念佛も。往生せぬにはあらず。此方よりは。事の念佛も。即心念佛を離れずと知ゆへに。事の念佛をも。眞實心に申す人を見ば。隨喜讚歎すべし。天台宗ならば。即心念佛を。自の爲にも。他の爲にも。専らとせいでば。天台宗になりたる甲斐はなきなり。時に享保十二年臘月下旬老苾芻光謙謹で口授し畢るものなり

即心念佛安心決定談義本 終

即心念佛談義本補助記

序

天台大師の云 四教義第五三

西方重聞 妙樂第九六

山ほととぎす すぐたびにめつらしければ時鳥いつ
も初音の心地こそすれ 權僧正永縁の歌。金葉集
にあり。

第一座

理持の念佛 事持。理持の名は。旭師の彌陀經の要解
に出たり。天台の普門品の疏に。稱名有二。一事。
二理云云。此に本づきたるなり。

但以大乘法答 文句^{廿四} 金錘論 身子差機のこと
あり止觀^{五の四の}_{十六}

爲種亦強 止觀大意
彌陀佛を見出し奉る 抄宗鈔^{上の}_{六十五}

即心念佛談義本補助記

觀經の力用なり 融心解
牧女添水之乳 袖中策云。牧女添水之乳。終少本味。
涅槃經菩薩品^{會疏九の}_{廿七}
第二座
口に唱ふるは心に思ふより出 推邪輪^{上の}_{廿八}云。謂稱
名位。必有專念佛心。譬如世人呼人時。必有專念
其人之心。
心と佛と一體〇出來たり 一室兩燈云云。
一とも云れぬもの 百法論直解三 唯識論^{七の}_{十八}云。俗
故相有別。真故相無別。述記^{七の本の}_{九十九} 又述記^{一の}_{七十二}
性相の分ち染淨の分ち 別の筆記 楞嚴文句^{三の}_{四十五}
云。祇約八識之性出障圓明。故更加以白淨之號。此
說原乎金剛三昧經。曰。諸佛如來。常以一覺。而轉
諸識。入菴摩羅云云。宗鏡錄^{五十六の}_初 并名義集引
之。
大佛頂經 文句第三^{四十}_九

即心念佛の極意 第三段云云。
三身は即ち三諦なり 宗論^{四の二の}云。所持之佛名。無論悟與不悟。無非一境三諦。能持之念心。無論達與不達。無非一心三觀。

第三座

儀式法要等 往生要集 淨土指歸行法門第五六道の中に於ては人道が最上。行事鈔上^{三の二の}の業疏三上^{五十五}近比の去禪宗 壽昌大師云。念佛心即是佛也。豈今時念佛。他時成佛哉。此說非今時禪師所知也。體能義讓 金錘論私記
此心を推し立 旭師^{淨信堂}云。世出世學問。固不可判作兩概。亦不可混作一事。蓋真儒與真佛。其下手同。其要歸異。若不從真儒下手處下手。則學道無基。若不向真佛要歸處要歸。則真性不顯。彌陀の依正安境 群疑論一。問曰。極樂世界。既許凡夫得生。未知爲是有漏土。爲は無漏土。釋曰。如來

而變土。佛心無漏。土還無漏。凡夫之心。未得無漏。依彼如來無漏上上。自心變現。作有漏土。而生其中。若約如來本土而說。則亦得名生無漏土。若約自心所變之土。而受用者。亦得說言生有漏土。雖有漏以託如來無漏之土而變現故。極似佛無漏。亦無衆惡過患。十義書^{下の}
一念照す所に 竹菴頌云。中論因緣所生法。一句道盡無剩語。我説即是空假中。朱簾暮捲西山雨。はかりのあがりさがり 阿彌陀經要解。
臨終在定之心 止觀講錄第二。
四色の蓮七重の樹 先師詩。七重不信唯心樹。四色難談本性華。

第四座

生無生論 宗論^{五の三}云。幽溪繼之。一時稱盛。然唯生無生論。足稱完璧。而自所最得意圓通疏。殊爲不滿人意。何哉。但能跏坐書空。作妙法蓮華經字。

脫然西逝。則誠蓮華國裏人矣。
昔しある禪宗 阿彌陀經疏鈔^{三の六}
大乘の事の行 行願二門云。小乘經部。括盡貝書。曾無一字讚勸往生他方淨土。
死すると思ふべからず 余嘗譯之云。求淨土者。唯做生看。莫做死想。
取捨の情 圓覺經^{集註}中の三云。種種取捨。皆是輪迴。

第五座

眞如法身 教行錄^{八の五} 引此文已云。專念眞如法身者。豈異大乘正信。妙宗鈔云。若一毫法。從心外生。則不名爲大乘觀也。
直指人心 非心非佛。不是心不是佛。曇橘州光明藏^{上の}七十一云。僧問。和尚一爲什麼說即心即佛。師云。爲止小兒啼。云啼止時如何。師云。非心非佛。僧云。除此二種人來。如何指示。師云。向伊道。不是心。不是佛。不是物。僧云。忽遇其中人來時如何。師云。且

第六座

大地をくつかへせば 金光明文句^{三の五十四}
四明尊者は永異事善 妙宗鈔序 淨土或問第八問。一つの河を 天親攝論第十二 唯識論第七。
一質異見 述記 淨名疏^{十一}
如華嚴經 大疏^{十九の}上の破地獄文。
かやうの例これあること 元亨釋書第二十九十三
西方合論 珂雪齋紀夢

第七座

弟子の成時 淨土十要

無盡大師の云 淨土法語
 慈覺禪師慈雲懺主 樂邦文類
 大朗居士 宗論
 一微塵の中に 止觀一の五の
 四明尊者 妙宗鈔下の
 普賢菩薩 華嚴行願品五十二

即心念佛談義本補助記 終

享保十三戊申年六月吉日
 皇都 書肆

淺野久兵衛 壽梓
 山本平左衛門

即心念佛談義本辨惑編并序

今茲は。益會も過ぬれど。殘暑も凌がたく。此にイみか
 しこに倚て。風を招夕暮。或人來て。閑に談する序に。
 客曰。頃日書肆に新板の書あり。即心念佛談義本と題
 す。台家理事の念佛の談義なり。而るに善導法然の勸
 め玉ふ事相の念佛は。佛の本意に非ず。理持よりは
 大に劣り。又娑婆にて無生の解會なきものは。淨土に
 生れても悟開がたく。品位も劣し様に聞ぬ。大學者の
 談義なれば。其ゆへあることにやと。日比の安心も。
 ゆるぎて覺ゆ。吾儕愚蒙の者は。何に決定せんや。委
 書誌て玉へ。同行の方軌にせんと。予問。誰人の選述ぞ
 や。客の曰。幻々庵の老比丘なりと。予曰。爾はさもあ
 りなん。此老漢は。動すれば淨土宗を是非せられ。圓
 底方蓋の義を以て。淨土の正意など、自讃せらる。無
 慚愧の滓沙門なれば。今更辨するにをよばず。客愕て
 曰。大矣哉子か言耶。曾て此の師に隨從して。能其非

なることを知乎。予曰。不然。此老漢は當時叡嶽の碩
 德。律家の老宿なり。余若面謁して縦小慙を知とも。
 何夫れ是を擧て譏嫌すべきや。況や街談途説をや。今
 滓沙門と云は。立義詰理載在方策。旁觀記の僻釋は
 匡解に正之。止訛には列十種惡癖。此等の書天下に
 散在し。萬代に流行せんに。人焉度哉。このゆへに。余
 斯謂のみ。本より聖道淨土。各別の宗意なれば。是非
 すべきに非ず。併もし我が家の安心に。害あることな
 らば。他日辨之。客喜て去ぬ。其後目前の事に。紛冗
 して延引す。亦頃日或上人の此義を。物語せられしに
 思出て。書林に得一本周覽し。客が先日の求に應し。
 隨節辨邪解事相念佛者のまどひを。わかつてば。辨惑
 と題するものなり。

時

享保十三戊申涼秋中旬援筆洛東白河上寓舍

即心念佛談義本辨惑編

談曰。即心念佛と云ふ名を立て。専ら弘め玉へるは。四明尊者なり。因て尊者。妙宗鈔の序に。適時之巧。非我所能。願共有情。即心念佛と。の玉へり。辨曰。此の談義の趣きを見るに。即心念佛とは。一心三觀を以て。無量壽佛を觀する。觀念の念佛のことにして。南無阿彌陀佛と申す。口稱の念佛のことにしてはなし。故に即心念佛を。約心觀佛とも云と談せられぬ。又是心作佛是佛の文を解して。是の心とは各々我れらが。西方の彌陀を思ふ心なり。其の心が彌陀佛を見出し奉るなり。即ち其の心が直に是れ彌陀佛なりと談せらるれば。觀佛に紛れなし。然れども始終に多く念佛申すくと云はるゝが故。此に因て見れば。口稱の念佛にして。觀念の念佛とは思はれず。甚だ相違せる談義。かの鳥にも非ず鼠にもあらぬ。蝙蝠の様なる即心念佛なり。安心決定とは。題しがたし。四明の本

旨豈に然んや。恐くは天台四明の正義に背く。老漢妄作の即心念佛ならん。猶又口稱念佛の勧めかと思れば。彌陀の願に立て。釋迦の經に説き玉ふ。念佛の安心。三心の義は少もなし。其上往生極樂を勧め玉ふ御經に。如是理觀觀心を。説せ玉ふと念を入れて。談せらるゝからは。やはり天台四明の義の如くに。觀念の觀佛を。勧めたきことなり。今の所立を見るに。即心念佛と云ふ名は依四明。起修は法然のまねにて。念佛申すくと云るれども。引文は心佛同體の文どもにて。末に到ては即心念佛を務る人は。縦ひ今生に明かなる圓解開けずとも。往生したらば開くべしと談せらる。此の得生後の圓解は。淨家通途の所談。事持念佛の手段なり。畢竟自法愛染の局執より。他宗易行の建立に楯をつき。負じと巧み出したる。貢高我慢のしわざより。貶法然所立。書きしものと見えたり。談曰。淨土の三部經の中に。無量壽經。阿彌陀經には。即心念佛の旨を明さず。觀經ばかり是心作佛。乃至天

台は。此經明觀故說得生と釋し玉ひ等。辨曰。是等は並に觀の證文也。執持名號の證てはなし。但し當時も能く觀法に。堪る人あらば。さもあるべし。逆誘生否は。十五家の異義あり。善導は。抑止攝取二門を用て釋し玉ふ。大經は未造逆の邊て抑止し。觀經は已造逆の邊にて攝取す。斯則大悲不捨物。萬機普益を顯也。三部經とは。善導釋曰。言弘願者。如大經說。一切善惡凡夫得生者。莫不皆乘。阿彌陀佛。大願業力爲増上緣也と云て。彌陀の本願。法藏の發心。願成就の相は。大經に説き。諸佛の證誠。執持名號。我見是利。故説此言とは。彌陀經に宣て。未來の所修を開き。韋提の請に依て。定善を説き。任佛本意。散善を自開する等は。觀經に明し玉ふ。此三經は。世の伊の三點の如し。天台は。觀心を宗とし玉へば。大小の二經は。觀を明さざれば。逆誘往生を許し玉はざれども。淨家は。三經一轍に用ゆ。所望各別なり。其の由へは先大經には。本願に觀心觀理はたて玉はず。乃至十念と名號を誓

ひ。機は不簡善惡。十方衆生と云。十方の辭に器世間のあいだ。一處として残ることなく。衆生と云ふ言には。衆生世間のあいだ。生を得るほどのもの。此の中にあらずと云ことなし。其行は。稱我名號なり。阿彌陀經には。執持名號。若一日等と説き。大經には。乃至一念。爲得大利。無上功德と宣べ。觀經には。汝若不能念者。應稱無量壽佛と説て。彌陀の本願釋迦の勸讚。諸佛の證誠。悉皆事持の口稱のことなり。觀經に。定散を説たまへども。序分に。諸佛如來。有異方便。令汝得見と云ひ。亦以佛力故。當得見彼。清淨國土と説き。善導は。加被韋提。盛皆得見と釋して。十三定善は。皆佛力觀にして。全く諸法實相の開解。妙心體具の機情造修の觀には非ず。天台は。此經は心觀を爲宗とのたまへ共。宗家は。觀佛爲宗。念佛爲宗と。兩三昧を立て。一經を定散二門として。俱に他力を明し玉ふ。定善は一往韋提の請に應じて説たまへども。付屬流通は名號の一法なり。故に善惡萬機。その益を許す。今

如老漢談即心念佛の意の。合點ゆかぬものも。度々聞けば。後には合點のゆくものなり。退屈すべからずと。是等は。善人上機。平生無事底の人。五人三人は其益もあるべし。愚夫蠢婦。或は臨終の死苦來逼のものは。をもひもよらぬことなれば。攝機周ねからず。爾れば。十方衆生の誓。又爲未來世。一切衆生。爲煩惱賊。之所害者の經説は空くなりて。其益はなしとせんや。又大福長者の喩は。念佛の具徳。稱名者の家珍なるべし。大論の徳瓶の喩も同じ。安樂集に。七番の喩を借りて。念佛の利益を明す可見。又過去の罪が滅して。さとり目の開けて。大に喜ぶとのこと。是義なれば。此土の利益になりて。他力往生淨土の益にてはなくなりぬ。今淨土門の義は。此土に悟りの開けぬものを。淨土に攝得するを手段とす。無生而生類あり後に釋すべし。十疑論曰。阿彌陀經。無量壽經。鼓音聲經等云。證誠一切衆生。念阿彌陀佛。乘佛大悲本願力故。決定得生極樂世界。當知阿彌陀佛。與此世界極

惡衆生。偏有因縁。云云台宗二百題。論散心念佛功云。念佛功力深重。雖散心何不滅重罪往生。然疏鈔中委悉示由。修觀力者。此依觀經本宗。專論妙觀故見。乃至彌陀本願。持名功德。深重縱不修觀。至心稱名。何不滅重罪生彼國耶。等。略抄老漢曾質此題。而今談否塞正義。塗人天之眼者也。夫鈎するものは。不。如網罟射ものは不及。爾羅。終日營々として不過數什。其術小なるを以なり。今持戒觀心。讀誦智惠等の。修行學道に。堪たる者は化すと雖ども。彌陀の願網。十方衆生の。善惡萬機悉く救れて。其の多きこと争ふべからず。楊子曰。觀日月而知衆星之蔑也。嗚呼。事持念佛。其功莫大なること可仰可貴。談曰。事の念佛ばかりにて。往生したるは。宿習なきゆへ。悟りかねて。ぐづつくべし。即心念佛の人の。早く悟るを。見てはけなりく思べしと。辨曰。是等義を以て見るべし。爲法の人乎。此老漢惡意樂よりの所作なることを。凡今の淨土とは。無漏相。實相之相にし

て。其得生する者は。坐時即得無生忍と判す。溜瀆一味の土なり。本より横超斷四流の行者。亦何をか羨んや。其往生とは。無生の義なり。悟道と云も。亦是無生なるを以て。淨土の往生とは。諸宗の悟道と同じ。涅槃經。亦名無生。亦名涅槃と説き。大經に。次於無爲泥洹之道。亦虛無之身。無極之體と。觀經に。當坐道場。生諸佛家と説玉ふ。娑婆の聞薰あるもなきも。昨夢の覺たるが如く。俱に得無生法忍。爰を以て五乘ひとしく願淨土。法身地上の薩埵。普賢文殊を始て。歸投して往生を願し。十方の諸佛共に讚して。極樂を法王家とす。法照禪師の。五會法事讚曰。彼佛因中立弘誓。聞名念我總來迎。不簡貧窮將富貴。不簡下智與高才。不簡多聞持淨戒。不簡破戒罪根深。但使回心多念佛。能令瓦礫變成金。實斯金山の飛鳥は。不染成金色。老漢自力の封情にて。淨土を娑婆のごとくと思ふ。倒見可哀。談曰。善導法然の勧め乃至段々と佛の本意は薄くなる

なり乃至善導法然の勧めは。大分水を加たる乳なり等。辨曰。這老漢。胸中の痞塊。於之發熱し。今時の衆生の信を妨く。大法敵。無願の惡人なり。本實義なきより起りしこと故に。先づ自語相違あり。旁觀記には。法然上人。この教へ大慈大悲より起りたり。誠に有り難き御すゝめなり。又法然上人は。よく法華經の意を明らかに。佛意を得玉へる故に。至て愚なる尼入道の類ひまで。往生極樂の安心を。決定せしめ玉ふなり。又上人の御本意は。事の念佛にてはあれど。圓頓の意にも。そむかざることなり。此こと大事なり。又末代の劣機をして。何とぞ惡道の流轉をはなれ。極樂へ往生せしめ。其上に速に成佛せしめたと。思しめしたる無上の善巧方便なり。乃至豈大慈大悲より。此一門を建立し玉ふに非ずや等。老漢既に圓光大師は。佛意を得玉へるの。圓頓の意にそむかぬの。法華經の意を明め玉ふの。無上の善巧のと。書置ながら。今はまた。佛の本意は薄なり。大分水を加へたる乳とは。

大體に挨拶せは。老耄かとも云べけれども。實は自法愛染より。他宗を嫉む惡意よりなす所なるが故に。在家にて。一枚起請を拜覽せしには讚歎し。今は理持の念佛と云ことを拵へて。淨人どもまで。念佛申す者の。淨土宗を慕やふなるを。嫌はんとして。如此搯擊遊談。止訛に所謂無慚愧等の穢名尤悉的中せり。涅槃經の乳加水賣とは。佛説に。佛説ならぬ凡夫の。私なる語を加えて。衆生を欺き誑すを云へるものなり。然るに善導法然の勸めは。無量壽經。阿彌陀經等の佛説に依て。口稱念佛を勸め玉へば。此全く私の語に非ず。何ぞ水を加ふと云はるゝや。況や大分加えたるとは何ことぞや。但し老漢には。無量壽經。阿彌陀經には。即心念佛の旨を明さすと云はるれば。此兩經も。大分佛説ならぬ水を加えたる經なるや。其水を加えたるは。何れの文なるや。ききたし。もし此兩經。大分水を加るに非ずば。此兩經の佛説による善導法然を。何ぞ妄りに大分水を加ふと破さるゝや。又老漢台

宗綱要の中には。事持と云は。餘念を起さず。心を彌陀の名號にかけて。南無阿彌陀佛と唱るなり。此邊は善導法然の勸めと。かはることなしといへり。かくの如くに。事持の邊。善導法然の勸めとかはらずば。何とて善導法然ばかりを大分水を加ふと破さるゝや。もし善導法然の勸めが。大分水を加えたるに極らば。それとかはらぬ天台四明も。皆々大分水を加えたる。誑惑人と云れんや。甚た信仰し難き妄談義なり。抑世尊一代の教に。處々廣く念佛の功德を讚し。往々普く彌陀の威神を歎し玉ふ。本願名號は。貴賤智愚を論せず。十四佛國の薩埵。在世の文殊普賢。佛滅後の龍樹天親より經道滅盡の時の衆生まで。信樂受持すれば。即往生す。何を以の故に。此名號には。無上の功德を具するが故に。唯一念の處に。大利を得ること。喩へば百川千江。悉く海に歸し。七政衆星。共に北に拱が如し。更に誰か其爾る所以を測量せん。所謂萬行衆善は。是を有上と名く。唯是一善。僅に一惡を滅し。一行只

一障を除き。開遮偏曲にして。融通義該せず。今此本願力成就の一句。南無阿彌陀佛一稱一念の處に。多劫の罪障を滅し。無邊の功德を成す。故に元照曰。我彌陀以名攝物。是以耳聞口誦。無邊聖德。攬入識心。永爲佛種。頓除億劫重罪。獲證無上菩提。信知非少善根。多善根也矣。老漢の云へる如く。此の理を知らねども。此の理は離れぬものなれば。愚癡無智の人の申す念佛も。一心三觀の義も。萬行衆善も。此名號の具徳にして。一念名號の全體。自ら周備す。正像末法の中に亘て。悉く漏るゝ機なし。故に善導大師釋曰。自餘衆善。雖名是善。若比念佛者。全非比擬也。法照禪師曰。夫如來設教。廣略隨根。終歸實相。然念佛三昧。是真無上深妙門。蓋其念佛とは。口稱南無阿彌陀佛なり。南無者救我。度我。歸命と翻すれば。我が邦の。たすけ玉へと云ことなり。是衆生の願心にして。迷の凡夫より。佛をたのむの意なり。本願の。若不生者の方なり。阿彌陀佛とは。十劫覺成の佛體。悟りの方にて。

本願の不取正覺の方なり。然れば纔に南無阿彌陀佛と唱時。自迷悟一致し。凡聖一際になりて。若不生者の衆生も。不取正覺の佛も。生佛一如にして二如なく。願行具足す。斯れば此れ佛智の所構。佛願の所建なれば。行者の機情に。曾て雖不知之。自然として。一如に冥合す。故に善導は。不覺轉入真如門と釋し。古徳は。泯絕機知。格外宗風。剝盡悟解。自然悟道と云。沒滋味にして。入實相手段なり。願禪師の曰。十劫一如。無念念なれば。終日念佛すれども。無念不乖。清淨本願。無生の生なれば。熾然として往生すれども。不背無生。凡聖住自位。而感應道交し。東西不相往來。神遷淨刹。此不可得。而致詰也。然れば心行具足し。一度も南無阿彌陀佛と唱るもの。往生の素懷を遂げざるはなし。三寶滅盡の衆生ま。遣迎二尊の本乳。全く不失本味。在滅一同の大法門と云ふは。我が念佛の巨益にあらずや。牛羊の眼測て窺ふ所にあらず。老漢が祖師の智者大師も。請救彈舌し玉ふ圓頓佛

乗の稱名を。九十六種の外道に譬對すること。佛祖にそむくの大外道。謗三寶の破戒。入阿鼻の罪人に非ずや。傳聞。慈忍阿闍梨は。後飯室に閉ち籠りて。念佛三昧の外。他事なかりしが。人に示して曰。昔し今の人。觀法。或は行業を積て。慢心をなし。即心成佛の妙法を行て。天魔破句の賤きわざとなること。甚たを、し。可恐所なり。必ず智行兼備の人にあることなりと。のたまへりとなん。可愼。正に今返問すべし。老漢を始め今時の台宗誰か法華三昧を行て。寂寞無人聲の床の上には。妙法華の薰芬郁とし。端坐思實相の樞の前には。遍法界の雲鬢鬚し。人跡稀なる山の奥に。妄想の夢さめて。煩惱の塵を拂ふ行人ありや否。漸く法華經を讀誦するを。本味と思ふべけれども。是も天竺震旦は。總じて行誦にして。義を通するか故に。讀經のうちに。餘縁もなく。それくの經意を。心徹すれば。縦ひ兒女の輩の讀經も。讀誦法師といわれ。結構なることなれども。日本は片假名の。かへり

點つけねは。終日通霄萬部を讀ても。何のことやらもしらす。行者の胸中は。妄念のみにて全く讀誦に功なし。例せば。湖人薛氏か婦。喪して不得脫。其家齋千僧。誦金剛經。婦憑語曰。謝翁婆一卷經。今得解脫。翁問。千僧同誦。何言一卷。答曰。明法師所誦者。蓋師誦時。不接世語。兼解義爲勝なり。統紀十五斯以て今を見るに。皆鵠噪蛙鳴にして。詮もなきこと。心と口と各異なり。自分義解の利をもえず。亦側らに聞經の益もなし。超八純圓も。丸のみにして。即是の妙觀も。口で云ふたばかり。乳のことは開き。水まで乾きし寔に枯槁の衆生とは。汝等がことなり。併ら老漢は。學問の力にて。事持よりは。理持勝れ。妙解を開て。申さば。しかるべしとをもわるれども。夫もみな勝解作意の分際なり。事持の口稱の者は。一文不通の頑魯も臨終に好相祥瑞を得て。終りを取り。或は夢中に。淨土の品位快樂を。託告する等のこと。和漢の史記。往生傳のごとし。現生護念の益にたよりて。祈禱の爲めに。

尼入道聚首念佛するも忽蒙其益。こゝを以て是を見るに。皆眞實作意なり。袁中郎かことを。書れしまゝ。珂雪參集選の。一驗をそなへむ。彼第十六。袁氏三生傳の略に曰。伯修有子曰登。年十三なり。小時より。淨業を修することを聞ときは喜び。十氣を以て念佛す。萬曆辛卯。伯修京師に官し。中郎以公車至。兒か病辭不治。まさに死せんとして。人に語て曰。二りの叔を。請しきたれと。中郎至る。兒が曰。我れまさに往かんとす。叔我をたすけて。念佛すべしと。兒危坐して。數百聲を念す。中郎及び伯修。みなこれを助く。兒又曰。我が氣急にして。全く念することあたはず。もつはら南無佛と念せんも可ならんや。叔曰よしと。兒復た念すること。百聲ばかりして。大に笑て曰く。蓮華至れりと。家人ことごとく走り視る。登愀然といろがわりして曰。蓮華皆なくなりぬ。室中汚穢者はなきかと。詢之果して不淨を洗ふの下女あり。依て是をしりぞけ出せば。又笑て曰。蓮華復あまねし。一々の

華の上に。如來まします。如來きたり玉ふ。我もゆかんと。遂に合掌して。愴然として逝く。次に中郎か娘。禪那年十四歳。未死せざる四五日前に。淨土を感見し。其後専ら上品を念じて往生す。次に袁中道か子。名は海四歳。念佛百餘聲して往生す。具には往て可見。如此唯心法界の妙解もなく。即心念佛にてもなし。只口稱果號往生す。老漢何ぞ大分水を加るの。外道よりましの。ぐつつくの云ふや。既如此現證に背く。無慚の賈僧なり。をよびもせぬ開解だての。即心念佛の者。かゝることを見聞せば。うらやましかるべし。はやく過を改て。任口念佛すべし。談曰。理の念佛の人よりは。事の念佛申すも。即心念佛を離れずと見れども。事の念佛申しの方よりは。左様にはるいはぬなり。辨曰。理持念佛者離れずと見ば。事持念佛者も。同じかるべし。事有挾理之功。理無雙立之能。已不謂如兩輪雙翼耶。總じて不照應ことをし。愚癡無智も。なるまじきことにてなしと

云。又智慧聰明なるの人もを、しと云。始觀心觀理を云。後珠數つまぐり。所作を勤と云等のこと。偕々鳴立澤の。常念佛よりは。物の哀れなる。即心念佛なり。

談曰。法然上人は唐土吾朝に乃至念佛にあらずと拂玉へり。辨曰。是又料簡ちがひなり。本より機情悟解を離れたる。他力本願の念佛にして。觀念學解の及ぶ所にあざれば。悟りて申す念佛にも非ずと。の玉ひしものなり。故に三四歳の。思慮なき幼兒も。八九十歳の。老せる老人も。念佛して往生せり。惡輩も。禽獸も生ず。如諸傳。精き學者に候へば。不逮之出。

談曰。天台宗からは諸宗の淺深を。能く分つことも。自由なり等。辨曰。老漢驗非の中に。自力の修行も。他力の法門も。執すれば皆過なり。執なければ。自力も他力も。成佛の勝方便なりと。又曰。容易に人を譽事さへ。心ある人はせぬことなりと。如此いながら。今は亦自宗を執せらるゝことかな。天台宗諸宗と云も

後のことなり。佛八萬の教を説かせ玉ふも。機の淺深あるゆへなれば。何れの道よりも。早く得悟するが。かちなり。智旭の逐末而不求本。求解而不求證との玉ひしは。如何が心得らるゝや。證を本とせば。何宗彼宗の。自慢はなき筈のこと。自ら非を飾らるゝ。笑止千般なり。自己の封執なり。天台宗ありとをもわすとも。我れは是れ釋迦の弟子の。法華經よみなり。智者大師は。吾か先祖なり。我は其の末孫なりと思はるべし。天台宗と云ものありと思はるゝより。佛説をさしをき。三心の沙汰もせず。只觀心と云ふもの程。結構なることは。ないと思つめ。他宗を押し下したが。剩へ旁觀記には。淨家の古徳を。僻解邪説など、下して。法然の正義とて。開天の瓦礫をうち出して。自讃せられ。或は諸宗の學者は。精しからぬの。癩ひのと。毀他して。いつとなく。波羅夷の犯にならる。先づ手前のことを。能くしらるべし。約心觀佛も。とくと根ずみもせず。近年まで賀山の和上と往復して。妙

宗十義書の祖判に背くこと顯はれ。旁觀記は。匡解にたゞされ。土砂一物の辨。答駁は。並に止訛にせめられ。今も藥王品の文を引れしが。是れは法華經のことにてこそあれ。即心念佛申す人が。諸宗の親との證には非ず。若し繼父か。但し養子親か。とくときゝたし。

即心念佛申し様のごとは。都て今家の所立と違しことなれば。不及辨。申と云へば約心觀佛ではなし若し石女生兒乎

談曰。事の念佛の人は。此界にては。生の見を離れず乃至見解は小乘なり等。辨曰。是れ何と云ことそや。本より淨土宗旨は。本爲凡夫。兼爲聖人なれば。此界にて生の見を離れ。無生の解會に契ひなば。何夫強願生せん。凡そ生無生とは。妙明眞如の性。本自ら無生なり。因縁和合すれば。即ち生の相あり。性を全して相を現すれば。無生即ち生なり。相既に性なれば。生即ち無生なり。唯迷の凡夫。此の理にくらし。故に遠切より已來。還源の要術なし。聖道の一門は。今世

に難證。故に法王建誓無方域の上に方域をかまへ。無生の上に生を示す。其生と者。往生論注曰。彼淨土。是阿彌陀如來。清淨本願。無生之生非如三有虛妄生。何以言之。夫法性清淨畢竟無生。言生者。得生者之情耳。乃至體。夫生理。謂之淨土。下喻を出して曰。聞阿彌陀如來。至極無生清淨。寶珠名號。投之濁心。念々之中。罪滅心淨得往生。又如氷上燃火。火猛則氷解。氷解則火滅。斯乃氷喻無明。火喻見生。無明の氷解れは。見生火自然に滅して。法性無生の智水のみなるが。是れ淨土宗の往生なり。然れば臨終の夕までも。隨分往生の見強きか。佛智所構の善巧なり。自己の才智に於ては。一分も所用なく。單身專修なる則。其の博覽廣才の智人の無信なるには。甚た勝絶して。速疾に往生して契無生。這密意は。凡夫よりして彌勒に至るまで。測知すること能はず。善導釋曰。佛密意弘深。教門難曉。三賢十聖。弗測所窺と。然に時既に澆季なり。人も亦下賤なり。三學の修行。殆んと證し難し。

若此の本願に遇ふこと無くは。輪回の轍何れの時か免れん。僅かに戒行修道の人。定惠困學の徒も。或は名利の穿に陥りて。徒らに名を偷み徳を衒ひ。或は觸犯の毒に中りて。空く身を穢し業を増す。形は持律の如にして。三毒胸に満ち。自を是し他を非して。浮華の僞風に飄零す。

藕益曰。古之受戒者修心之基址也。今之受戒者我慢之幟幟也矣。老漢應羞死也。

談曰。事の念佛にても。淨土を期するは。小乗と云はれず。大乘事の行にてあるなり。去ども見解は小乘三藏なり。涅槃經に四教の意を。四句と説せ玉ひたり乃至。極樂へ生じ生すと云ふは。小乗の見解にあらずや。辨曰。此は老漢。殊外耄せられて。擇法の眼を失はれしと聞えたり。涅槃經に小乘三藏を。生々不可説と宣玉ふは。三藏經は。三界の外に。他佛の淨土を明さず生の縁に従て。諸法生ず。因縁に従て生ずる法は。皆必ず空なり。此空理は。言語の及ぶ所に非ず。不可

説との玉へり。然に凡夫の極樂に生せんと願ふは。娑婆の外に。他佛の淨土を立て。其淨土に生せんと願ふが故に。大に小乗の見解と異なり。此を小乘に同せらるゝは。精き學者との自慢には相應しがたし。さて他佛の淨土へ實に生せんと。生の見を逞しくするは。凡夫の執想と云ものなり。故に往生論の注に言生者。得生者之情耳といへる此なり。此謂實の情執は。生これ空なりと解する。小乘には同じからず。而るに此凡夫の情執を。生の縁に従て生ずる法は空なりと明す。小乘三藏の見解なりと云るゝは何ぞや。摩訶衍に對すれば。小乘三藏は。卑劣の教なりといへども。此も亦佛の所説の教法なり。此を凡夫謂實の。生の見解と同じことと。混亂めされたるは。兎角擇法の眼が。すきと見えぬ故なるべし。今願力往生の者は。佛の教えに順し。信じて願生すれば。或は生の見もあるべく。無生の見もあるべし。生も無生も只南無阿彌陀佛と唱て終れば。佛力住持して。淨土の門に入り。自然と

して悟得無生妙理なり。因て鸞師は。不斷煩惱。得涅槃分と釋し玉へり。たゞいわれざる。心法沙汰を止めて。他力に打もたれて念佛し玉へ。

談曰。昔人の云へるは。往生を求る人は。死ぬると思ふべからず。只生ると思ふべしと。辨曰。是れは淨家に常に云ふことにて。往生を勸るが故の辭なり。或は諸願満足するの時と思ふべしとも云へり。因みに云はん。事持念佛申すことを。何のためぞと。ひとが問はば。娑婆分段の穢質を捨て。淨土へ生ると答べし。それにては生の見を離れずと云は。喩ていへ。砂糖などの入し。曲げ物の蓋は。一枚板なれば。生の方を強くせば。獨り無生の方が。あがりて。一法界となるなり。無生に即するの生なればなりと。長蘆禪師曰。夫以念爲念。以生爲生者。常見之所失也。以無念爲無念。以無生爲無生。邪見之所感也。念而無念。生而無生者。第一義也。談曰。即心念佛申しも。まことの時は涙を。こぼすと

笑ふべし。此の笑尤なるやうにて。聞ぬことなり。譬へは御公家の御歴々か。姫君を歴々の大名へ遣さるるには等。辨曰。此段別して。人の一大事を誤る魔説なり。必々勿入邪窟。御姫様の嫁入は。江戸まで泣つめても。苦しがるまじきが。曠劫希遇の一大事の。出離生死。臘月三十日の時。なごりをおしみ。境界愛を起して。落涙にをよば。忽可墮惡趣必せり。是れは忘惡迷執なり。恐れても尙を可惶之用心なり。又始の喜びは底にありて。隨時泣とのこと。さては公家大名の娘。家頼には。同時並起を許す乎。憂と喜とは表裏なり。前後忘却して袖をしぼるは。別離の悲き分にて。無生を解する悲喜交互ともいわれまじ。さてきて精き學者。戰慄するに堪たり。彼五戒の優婆塞。臨終一念の愛に依て。婦の鼻中の虫となるが如し。經律異相さてあぶなき妄談義なり。又今家の。事相念佛者の臨終は。名號に三縁の義ありて。平生まめやかに。念佛せしものも臨終始て念佛せしものも。化佛菩

薩尋聲到とて。其の聲につきて。佛菩薩等の來迎あれは。諸邪業繫。無能礙者とて。無始の罪障業惑。一も障ることなく。華臺に目移りして。穢土の名殘も忘。聖衆を拜すれば。妻子眷屬の愛もなく。頭を傾るとひとしく。蓮臺に趺を結。佛に引接せられてゆけば。横截五惡趣。惡趣自然閉と何の恐もなく。其の身を願れば。紫磨黄金の膚となるなり。即心念佛者は。袖をしぼらるべし。これぞよき笑ものなり。

談曰。淨土宗の人佛教の大意を能しり。見識あるより務るにあらざれば。尊に足らず等。辨曰。さてく慮外千般。慢過慢といつべし。上代和漢の碩徳高僧は云にをよばず。法然上人已來の縑素を。一概に無見識頑魯とは。以何言之耶。縦一隻眼を具するものも。尼入道に同ふして。智者の振舞をせざるが。淨土の宗意なれば。隱光韜徳。上人も不尠。光明は覺王の化身。法然は勢至の權跡なり。其の流を汲んで。超世の願意を悟りて。捷徑の淨土を願ふは。見識あるか

故なり。怯弱區々の器材を以て。志幹歴々の觀解を修し。無明を絶去し。塵勞を追却して。直ちに實際の局に至らんこと。階たてゝも難及。故に鐘打たゞき念佛して。悟道を一念にとりて。早作佛を求む。これ大見識なり。和漢の碩徳。本宗を捨てゝ。念佛門に入る。今日の縑素。衆車同轍なり。凡そ淨家に定往生三等あり。一無生而生の往生。在世滅後薩埵。或は天衣天如天台等の類は。早作佛のゆへに願往生。二證得往生。如韋提侍女等。三見生無生の往生。今日如凡夫是也。第一無生而生類。三界業繫畢竟して斷盡し。無生忍の位に至り。隨其心淨。即佛土淨。光明大師曰。門門見佛。得生淨土。斯れ乃十方法界にして。彌陀即諸佛。諸佛即彌陀。一多包容。大小融通す。於中願極樂。超勝特妙にして。六八莊嚴の故に。別して願生するなり。不退の土住正定故に。二證得往生とは。如韋提。垢凡の女質。未捨質礙身。佛力に加被せられて。悟無生忍。觀經の即便往生なり。是れ韋提一人

に。被るに似たりと雖ども。廣く一切衆生。專念願生するに。皆往生決定の機を成就するなり。三見生無生の往生とは。謂く見生誠信の當體。即全無生なり。事理縱横。即相不退。さきに辨するが如し。此の外に不體失の現身往生あり。天竺の阿私多太子。天竺往本朝生驗記勝尾の善仲。善算。元亨釋書武州増上寺第三世。音譽。本朝僧傳五十六等なり。今老漢の引文道理は。並無生而生の一類なり。今時有相耽著の凡夫。絶希望。涓流の水巨舟難浮。短綆汲深井耶。各々量自涯分可願生。諺に曰。身のほどをしれと。

談曰。事の念佛ばかりにては。佛の教への根本に遠く。出離の道すぢ。ちかへらす等。辨曰。旁觀記に。淨土家の書は學び候はねば。違たること多く候はん
とあれば。老漢の爲めに。一箭路を通ずべし。先づ淨土の行者。厭娑婆欣淨土。娑婆を厭ひ惡むは。一分の嗔なり。欣慕淨土。一分の貪なり。未藉思量一念功これ癡なり。此の三毒の全體。斷迷開悟の起修な

れば。斯乃煩惱即菩提なり即生無生なれば。生死即涅槃なり。彌陀の強縁をたのみ。低頭合掌して念佛するは。縁因なり。解脱なり。娑婆の浮偽を。わきまへ。淨土の不退を欣ふは。了因なり。般若なり。然れば全性起修。當體全是。即事而真なれば。穢身を捨るとひとしく得無生。何れか淨。何れか穢。厭ふべきもなく。欣ふべきもなし。與麼の時。唯心法界にして。本來無東西。盡十方世界。一箇の明珠なり。過十萬億とは。方境を定むる閻浮の化道にして。全く去此不遠なり。故に善導は。釋一念即到。天衣は去ることは。實に不去とのたもふ。圓頓一佛乘なり。此の開解は。淨土の益なり。故に八宗九宗の外に。淨土宗と云ものあるなり。爾れども是並法門の義理にて。物だてゝ謂はず。只仰信して念佛すれば。果然として。冥合此理。正覺の彌陀。今日得生凡夫。一如にして二如なく。全體若不生者。不取正覺十劫覺成の姿なり。老漢の談は。皆是此土の開解にして。一代聖道の化益なり。今此の

濁世の。凡小愚惑にして。愛見癡網密縈ひ。實我の妄繩堅く縛しめ。窮理の得道に拙きことは。良とに拙なし。燕雀の翹さを振ふて。冲天迅蜚を慕ふに異ならんや。函蓋齟齬して入門かたし。故に古人曰。法然上人。有一選擇。謂計機分。亦驗佛誓。捨十一宗出要。方期十八願往生矣。誠に水潜陸行。各得其處而安須知。

談曰。心觀の宿習がなければ。淨土にても。早速には悟り開けがたきなり。辨曰。是れ老漢の臆斷なり。何れの經論にありや。設如此釋し來れば。得生淨土は詮なきこと。宿習の有無を論せず。佛力住持して。隨品開悟す。如來淨華衆正覺華化生は。淨土の徳義なり。爾らざれば。臨終始て佛法に遇し輩は。宿習毫髪もなし。此の惡機は。淨土にても。冥々として迷心なるべきや。可晒。

談曰。淨土家などの如く。事の念佛ばかりを務るは。理觀がかくるなり。辨曰。事理は兩輪のごとくと云

ふは。自他共許の義なり。其のうちに。法華經等は理を面とし。淨土經は事を面とす。然れども其の事に理を具して事理不二なるが。圓教にあらずや。理觀は。本願にあらずれば修せず。却て非本願の行を修するは。往生一定しがたし。總じて。此書の始終に。彌陀を念じ。西方を願がごとくして。一處として本願を出さず。唯天台の觀心を肩荷して。勸む。漸く五品觀行の智者と。三覺窮滿の法王と。何れを用て誠證とすべき。祖師に牽強して其他を誣蔑するや。智論曰。自法愛染故毀皆他人法。雖持戒行人。不免地獄苦。

談曰。韋提希や侍女は。皆歴々の女人なり。辨曰。是亦經旨に背く。既に我宿何罪生此惡子と説て因果に暗し。故に佛も汝是凡夫。心想羸劣との玉へり。佛世の當機は。權化なりと雖ども。權は實を引んが爲なれば。經面の如く。羸劣の凡夫。以佛力故に見淨土。五障非器の女人。五濁の實凡往生門を開くなり。龍女の權實は。こゝに盡さず。六祖石叢等は。今日の所論

にあらず。橘皇后。千代野を以て例とせば。老漢何ぞ大悟せずして。ぐすつかるゝや。筆を勞する而已にて。無益の言辭なり。通教にもせよ。別教にもせよ。斯れらこそ。宿習開發のもの歟。即心念佛者は。鶴のまねする鳥。談曰。さて又淨土宗。時機相應と云へども。乃至天台宗もあり。禪宗もあり等。辨曰。是亦絶倒するの談義なり。時機の應不は。法門のことなり。宗旨のことにてはなし。南都には今に法相俱舍宗もあり。昔は吉利支丹耶蘇宗もあり。夫が。相應不相應のと云べきや。時機相應と云ば。五濁亂漫の世なり。人も下根にして。三學分なし。都鄙共に。宗旨も寺も僧もあれども。坐禪觀法。三密瑜伽の修行に堪がたし。皆宗の規則ばかりにして。機教相應しがたし。尤も多き中には。一人もあるまじきにも非ず。老漢も。間有之いへり。あひだにはあるべし。念佛のものは。三歳の兒。八十の老翁八宗九宗。智愚となく。皆能く念佛す。正しく現

量底なり。恐くは天下を十分に。八九分の有情は。念佛を唱ふ。是れ時機相應の現證なり。迦才淨土論曰。若自知有定慧分者。即於此方修道。求無上道。若自知無定慧分者。即須修淨土門。就淨土中。求無上菩提。談曰。淨土宗の僧。乃至撥無したる人甚だをし。何とて知るぞと云へば。其の人々の平生の身もちにて。知るゝことなり。辨曰。淨土宗の僧。大分多きことなれば。其中には。なる程心の底には。淨土もなし。阿彌陀もなしと。撥無したる人もあるべし。さりながら。よく吟味して見られよ。此撥無の人は。淨土宗よりも。他宗の中に。猶以て甚だ多く有之ことなり。而るを別して淨土宗とさし出さるゝは。彼胸中の一物のなす所なり。又平生の身もち惡きこと。も尤も此事今時諸宗の僧。皆大様同じことにてはあるなりと。談せらるゝが如く。末法濁世のことなれば。淨土宗に限らず。他宗にも。亦いよゝ多く聞ゆるが故。平生歎息するこ

となり。因てかゝる末法の惡業重き輩に。一心三觀の。三密の修行の坐禪觀法のと云ては。よく勤むる人さへ。間希なることなれば。況や時機相應して。速に證悟を得ることはあるべからず。十方衆生の願文には。かゝる惡業の輩をもすて玉はず。順次に往生して。不退轉の身となり。無生忍の悟りを開かしめ玉ふ。本願の念佛は。最も時機相應なること。いよ／＼顯然明白なるに非ずや。何れの宗にか。かくの如く廣く惡人善人。智者愚者を擇ばず。末法惡業の時機に應じて。速に生死を出離して。不退轉を得せしむることあるや。

談曰。即心念佛は。時機相應にあらずと。云べからず等。辨曰。僥倖に。圓頓の宿習なるもの。至極の法門云にたらず。爾れども今此の談義のごとく。唯心西方の妙解。或は死なすして死に。生れずして生る。陰入に即する彌陀等のこと。近く山下の野夫に對して示さんに。會得するや否。試て可知ことなり。此れ則ち時機相應にあらざることを。應知。大論曰。錯投藥者。

病則爲増云。若し西方も彌陀も。唯心ときかば却て大に僻見となるべし。危きこと累卵に過たり。隨分二而に下りて教え。自づから致不二善巧とす。雷聲洪大にして。雨天全くなし。

談曰。即心念佛は。事の念佛に遙かに勝て乃至先三世の罪を滅する等。辨曰。是れ何と云ことそや。事にもせよ。理にもせよ。念佛滅罪は。經の中に説玉ふ。稱佛名故。於念々中。除八十億劫。生死之罪とは。稱名の滅罪なり。般舟贊にも。念々稱名常懺悔と釋し玉て。專修の行者。必しも自己の罪體に目をかけず。唯た本願の不思議を信じて。常に能く念佛すれば。名號の中に滅罪の徳用ありて。諸礙自然に消除す。觀無生等の理の懺悔を用ひず。然れども善導の禮讚の廣懺悔。又五悔等は。是れ行事の方法の作式なり。一向に用ひざるにも非ず。所作の罪を悲傷するは。後世者の常の用心なり。聖淨二門これ同じ。故に不怠念佛して。三業の過非を恐れれば。自ら防非止惡の義をなわりて。例せば

道共戒のごとく。斯れは是れ佛號の具徳にして。其の滅罪廣大無邊なり。是佛智の所構なれば理は勝れ事は劣ると云こと。曾てなきことなり。然れども。如此功徳に誇て。ことさらに惡をなし。暴虎憑河して。悔なきものは。佛菩薩とても如何かせん。

談曰。四明の永く異事善及小乘行得往生者。辨曰。四明は天台をなじく。妙觀を宗とし玉へば。凡小の善行とは。散善三福等の事善をさすなり。稱名念佛のことにてはなし。此の文次の文。皆まぎらかしなり。事善は散善なれば劣なりとの判釋なり。宗家とは各別の所立なれば。所望不同なり。然るに今事の念佛の人。小乗行などの人の見る所とは大いにちがへりとは。四明何れの處に。事の念佛の人とさすや。照曜裏の切賊なり。

談曰。業力所隔。感見不同等。辨曰。天台四明等。なを自力の封執ありて淨土を判す。若し自らの業力修因を論せば。地前猶難及。而るに凡夫の得生を許す

は。唯佛願の強縁に牽かれて。毫も私なし。縦ひ即心觀行のものにもせよ。具足大戒の比丘にもせよ。見思未斷の凡夫。窺べき所に非ず。而るに惡人女人の得生を許すは。皆願力なり。他力なり。如來兆載永劫の修因に酬て。感得し玉ふ報身報土。以佛力故に感見す。焉んぞ優劣を論せんや。既に韋提垢凡の女質。有漏の眼を以て。無漏の勝境を見るは。以佛力故なり。今日得生後尙爾なり。事の念佛者は。佛誓に能くかなへば。所見遙に勝る。論注に所謂。正覺の華より生ずればなり。今老漢の教のごとく。西方も彌陀も。心を離れぬとき。凡情妄想の臆度の開解。何ぞ勝境を拜せんや。得生尙を難許。願文に異するが故に。諸佛の證誠なきが故に。四明の釋は。能く觀し。觀成理顯の者の上へを釋して。永く異他部との玉ふ。老漢の所立と。玉石濫することなかれ。

談曰。一質異見異質異見云云。辨曰。此れら。群疑論に釋すれば。今煩しく不出。一往法相附順の釋なり。

宗家の正意にあらず。法苑義林章に。佛本願力。大威徳力。唯識性相所不判矣。今は是本願力なり。得生者何夫各見不同あらんや。佛力加するときんば。能見の者の業力にはよらず。足指按地思之。穢土既に爾り。況や質を蓮臺に託して。得無生忍の後なるをや。

談曰。老僧四十餘りの比より。牡丹芍薬を植て樂めり。乃至老年の華は似霧中看等。辨曰。事持念佛者は佛願に酬て。生後忽ち具六通。地樹華池等。一所として。其の實を得ざることなければ。此の譬喩は分も不合。却て具足三心。稱名念佛の修因なき。觀心持戒等の。諸行往生の者は。霧中の看なるべし。非本願の行なるが故に。況や今の談義の。しづのをだまき。くりかへし／＼て思ふ様な開解は。臆度情慮の分なれば。得生も許しがたし。又老漢四十餘りの比より牡丹芍薬を植て樂まるゝとは。凡そ風華雪月に。心を寄するは。悠々の凡情なり。但し老漢は。牡丹を見ても。無

常生滅の觀をなし。芍薬を詠めても。色香中道の觀をなす故に。悠々の凡情には非すと利口せられんか。爾らはその無常生滅や。色香中道の觀は。必ずしも牡丹芍薬には限らず。野菊や。菜大根の華。名もなき窓前の草々も。皆これ無常なり。中道なり。何ぞ此等にて。觀法をなさずして。別して牡丹芍薬の。色よき中にも。色よきを賞愛せらるゝや。其心の底をとくと吟味せられよ。これ愛情ならぬとは。全く云れまじ。先に淨土坊主の身もちにても。しらるゝと謂れしが。此の愛樂の心持にて。老漢の眞實の後世者にあらざることをしりぬ。雜阿含經に蓮香の比丘を。池神のとかめしごとく。持戒清淨の比丘には許しがたき心底なり。心戒上人は。踰躄し玉ひ。明禪上人は。調味の食に。水を加はへて。執を厭ひ玉ふとなり。而るに老漢の。霧中の看までも今に捨られぬ著心は。誠に哀なることなり。若し又唯心法界の華ならば。修觀の功深きにしたがつて。尙鮮潔なるべし。洞空滅後一紀も過て後。

往復の切紙とて印板し。難詰せらるゝ等のこと。皆是貪愛と。嗔と。慢と。名利との所作にして。眞の道人にはあらず。嗚呼即心念佛や。心口各異。言念無實といいつべし。
談曰。猶を譬を以て。此を云ふに。東國西國の田舎人乃至淨土宗が聞たらば。勿體なき惡口なり等。辨曰。これは早伏難を通じられしが。惡口に非ずして。何と云べきや。事持念佛者の信を妨ぐる惡意。於之顯れぬ。引證の文の。聞法生誘と云ば。乃ち老漢淨土の法を聞て。かく誘りを。なさるゝからは。墮獄疑ひなし。若又如此引文は。即心と事相との證文になるや否。這箇惡比丘拔舌不遠。
談曰。事の念佛を。云さますに心なし。即心念佛を焼つけんとの心なり。辨曰。是れはいゝわけと云ふものなり。凡そ佛化を助け。爲人悉檀に心あらんものは。何れの宗。何れの法よりも。衆生の斷迷開悟を思ひ。先づ佛法の分を得せしむるを。善しとすべし。今

日公私に暇なく。或は星を戴き。月を帶るの業作者。或は惡律儀の渡世。飛脚駕籠かき。一文不通の頑愚の輩。皆是佛法の分。毫もなし。幸に我が祖。専ら此法門を弘め玉へり。不問行住坐臥。時節久近。念佛するに。かたからず。解あるものは。解に即して唱へ。學徳の鴻儒は。擲毫して誓をなし。鉅賢至聖は。文藻を舒へて盟をなし。解なきものは。仰いで信じて。往生を願す。經には特留此經。止住百歲と説き。慈恩は。經道滅盡の後の益とし。善導は。萬年三寶滅。此經住百年と釋して。並に稱名の利益なり。然れば肩荷法門の大徳は。隨喜して可勸の法門なり。老漢も。前には法然上人のこの教。大慈大悲より起れり。誠にあり難き御すゝめなりと讚せられて。今はまた。極樂の巡禮宿の様な所に生るとて。信を助け。疑路に墮さんとするは。無慚放逸の至にあらずや。今時誰か即心の妙解を開き。觀心念佛すべきや。彼も助け。此れも成せず。邯鄲に歩みを傲ふ。畢竟焦熱の火のたきつけなり。今の

淨土は、一味等味の淨土にして、華開已後、曾て差降なし。九品は、釋迦如來、閻浮一往の化道と釋す。九品は、機の相を分ちし差降なり。然りと雖ども、華開の遲速ありて、餘殃をつくす。故に論註曰、而願往生者、本則三々之品、今無一二之殊。又如漕澠一味、焉可思議。又化人、當麻の變相を織るに、右の縁は經の序分、逆惡の故に、六縁を下より上へ逆にをりのほせ。左りの縁は十三定善を、上より下へ順にをり下し。九品は、下の縁に、一位に是を織て、一品一品の隔相あり。是れ九品は、機の差降なり。得生は、同一念佛、無別道故に、階品差なし。故に上々品に説く所の三心は、下々品までの修因にして、一品として、三心不具の念佛はなし。下々に所説、令聲不絶の稱名は、上々品に通して、往生の修因なり。並には無差の差の無差を顯示せり。而るに老漢、彌陀如來、一法句清淨心より修起し玉ふ、莊嚴淨土を、有情の業感の如く、報身の土に、優劣を喩釋して、念佛の信を妨ぐ。老

漢をたのみし清堂上人とか云もの。此の談義をきかずして死しなば、定て極樂の巡禮宿に、虱をたづね居られなん。痛しきことかな。次に往生要集、所引の華嚴經の文は、老漢の料簡の如く、如是縁は、諸經論に多きこと。王氏の人因縁ありしものならん。揚州の釋玄通は、幽冥にて、無量壽經の、其佛本願力、聞名欲往生の文を唱て、還活す。此文亦破地獄の文と云へり。此れ等の義に依て、事持のものは劣りて、巡禮宿の如き生を感じ、理持のものは、瓊樓に到るとの證には備へがたし。大乘の觀法、または、首題の名字等を聞くは、結縁なり。事持の口稱は、本願の生因なり。必不_レ可_レ混雜。

談曰、かやうの校量は、經論に多くあることなり。

辨曰、古へに曰、自無生見、不能識其道深淺。

談曰、善導大師の發願經、辨曰、兼而無知の男女は、發願經と云ふよしを聞きしが、さては老漢も經と覺へられしよな。偕々文盲な人かな。奇特に同發善大

師、往生奄亂國とはかゝれなんだ。尤四帖の疏は、聖僧の指授もあれば、一如經法宣ひしが、是れは禮讚の發願文なり。是も定て胸中の一物、淨家を嘲哂するの筆語と見ゆ。向天之唾瀆自面。

談曰、さて此の談義、他宗にむかふて説べからず。等辨曰、凡そ説法談義は、忝くも佛化にかはりて、四輩を教導すれば、衆を擇ぶことなく、鳴鐘擊鼓登壇し。大衆に向て正法を宣説すべし。然るに淨土宗に同じからざるは勿論のこと。老漢の祖師なる天台四明も終に唱へ玉ふ南無阿彌陀佛の稱名を、即心念佛、約心觀佛なりと妄立し。淨土も彌陀も我心なりと云ことを、しづのをだまき、くりかへしく、愚夫愚婦の心の内に、思ひ思ふ憶度の分別を、圓妙不思議の即心念佛なりと、教えらるゝ妄談義なるが故。さてこそ人を簡擇してきかしむれば、公直の正理に非ず。臆説の作りごとに紛れなし。此妄談を禪宗に聞せなば、台家に説心耶、不如孔丘、阿々大笑すべし。

談曰、淨土宗は、信受せぬばかりにてはなく、いきどをりを起し、誹謗して、罪を得べき。等辨曰、見思具足の凡夫、上來の無理なる惡口を見聞して、誰かいきどをりを、生ぜざるまじきや。本と此の談義は、人情を以ていはるゝ故。更に爲法の意に非ず。故に如此辭を出して、喧嘩を好むの辨なり。若し憤りを恐るゝが實にして、人情にをつることを悲まば、なんぞ如斯の談義を印行するや。但し淨土坊主は、皆生盲ともはるゝや。先に言ふ、心口各異とは是れなり。

談曰、事の念佛をも、隨喜讚歎すべし。辨曰、是れは彼の巡禮宿のこと乎。近比殊勝千般。

談曰、談義本と云ば、童への玩ぶ魚の名に似ていとをか。辨曰、童への玩ぶ小魚の如く、ダンギボト云ても可ならん乎。此の書を見る人、掉頭こと細魚の游泳するがごとくなればなり。台宗の學生は點頭せらるゝこと乎未審。梵室偶談曰、歸元性無二方便有多門、然則參禪也念佛也止觀也皆方便也。既謂之門

安得是同。若知全性起修全修即性。則三皆一致。安得是異。故真修行人。止貴就路還家。何必說同說異。增益戲論矣。嗟哉老漢妄談貽醜千載之下。獅子身蟲之罪皆不得而辭。可懼可慎可慨可悲。

余未嘗親見此師。安有毫髮私情。苟浴吉水之流。爲免箱口之識。且塞近之需。不得默止。勉對彼書。試辨此義焉耳。謹白安樂門下諸上人。庶幾如斯之書。以止登于梓。何則。未離我執凡夫。閱之豈不忿懣乎。只恐十字街頭。謗譏聲喧。實是大德之瑕疵也。嗟呼。曠因曠緣。自他犯重。況文時也。五百歲。闔諍堅固懸記。最可懼也。更再論之義。則昇者開聖淨二門之諍。自非慈氏下生。誰敢判決乎。降者爲惡。口罵辱之卑辭。寧非智者所慎耶。徒費紙墨。無有益於法門。余不肯再交毫鋒矣。仰冀理持。事持。不二圓融。隨機施化。寶蓮臺上執手。俱發一莞。

而已矣。

時享保十三年歲次戊申季穰下澣日

南紀苒玉降阜桑門 殊意擬謹書

即心念佛談義本辨惑編終

洛東知恩院門前

澤田吉左衛門 壽梓

(編者云。本書中二字下者。原本割註)

即心念佛談義本辨偽

一日有人。一卷の書を携へ來て之を與ふ。其題號を見るに。即心念佛安心決定談義本とあればさても。ながくとして。をかしき題號かなと思ふて。披き見るに。四明尊者の妙宗鈔によれども。四明所説の即心念佛には非ず。たゞ他宗の忿恨を發動するのみならず。また自家の祖判に違戻すれば。笑止千萬なること。此書なからましかばと思はるゝなり。或人のいはく。他宗を貶斥することは。はや往々に辨駁する人多しと聞。家祖に違戻することは。世人曾て之を知らず。台徒の中にも知ずして。隨喜讚歎する人少からず。良に悲むべし。此を辨すること。今の世に當つて。師を捨て誰ぞや。爲法爲人なれば。速かに辨せよと。之を請すること頻りなれば。速かに辨せよと。之を請すること頻りなれば。已ことを得ず。僞觀の大綱を辨するなり。これ山僧が。人我を聘するに非ず。宗意の濫する

ことを恐れてなり。

談曰。故に淨土も。彌陀も。即ち我心なりと知て念佛申して。往生を求るが。即心念佛なり。此をよく心得るより外に。即心念佛と云法門はなし。此即心念佛の義。根本は佛の説せ玉へる。觀無量壽佛經より出たり。それによつて。即心念佛と云名を立て。専ら弘め玉へるは。大唐宋の代の天台宗。第十七代の祖師。四明尊者なり。因て尊者妙宗鈔序に。適時之巧。非我所能。願共有情。即心念佛との玉へり。此意は。時々宜しきに順つて。色々の法を説き。それ々の機に適て。さまざまの法門を授くることは。佛や大菩薩ならでは。ならざることなるゆへ。四明尊者は。只法界の衆生と共に。即心念佛の一道を。勤めんとの御願ひなり。

辨曰。此談義は。大に妙宗の文意に背たる妄談なり。まづ四明尊者適時之巧等と序せられたるは。孤山等の師は。十六觀を並に事觀と見て。一心三觀を以て。

三諦の妙理を觀する。理觀とは云れず。上の文に。良以惣物情深。適時智巧。故多談事相。少示觀門といへる此なり。故此に至て。適時之巧。非我所能等との玉へるは。彼孤山等。深妙の理觀にたえぬ。下凡の縁種を露さんが爲。且く時の機の宜きに適ふて。多く事相の觀を以て示さるゝを適時之巧との玉へるものなり。かくの如くに見てこそ。序の文の上下。よく照應すれ。爾らば此は。別して觀經に明せる。觀法の一色のみを釋する上にて。の玉へることなれば。全く以て談義本の如く。時々の宜きに順つて。色々の法門を説くことには非ず。而るを總して佛や大菩薩のそれ〴〵の機に適ふて。さまざまの法門を授ることと見られたるは。さし當る序の文意をさへ。とくと知れねは。後に明せる妙觀法を。理の觀念やら。事の口稱やら。何ともしれぬ。模稜の手の權なる。即心念佛を談し出さるゝは。其筈なり。即心念佛と云名を立て。弘め玉へるは。なる程四明尊者なるが。其四明の立玉ふ

即心念佛とは。約心觀佛と云と。同じことなるが故。念とは觀念の念にして。

虎溪境觀要門には。即心觀佛。亦名約心觀佛といへり。

前に圓解を開て。三諦の理を明かにし。而して後不可思議の一心三觀を以て。彌陀の身相を。唯心に約して。三諦法界と。絶對に觀する。圓妙の觀佛を名け玉ふて。南無阿彌陀佛と。念佛申すことには非ず。其相天台四明の疏鈔。明かなること赫日の如くなれば。有眼の人。誰か見ざらんや。而るを談義本は。四明の即心念佛との玉ふ念佛を。誤て口稱の念佛のことなりと思ひなし。それからして。淨土も彌陀も。即ち我心なりと知て。念佛申して。往生を求るが。即心念佛なりと。口にて申す念佛にて云るゝは。明かに四明所立の即心念佛には非ず。談義本の僞作なること顯然なり。況や淨土も彌陀も。我心なりと知てと。云るゝ所の知とは。且く與へて云に。これ開解の分齊にし

て。未だ修行の妙觀とは云れず。次に其行相を。念佛申してと云るゝは。たゞ南無阿彌陀佛と申すことなれば。此が何として。四明所立の。約心觀佛や。即心念佛の妙觀法になるや不審なり。せめて南無阿彌陀佛と念佛申すを。一心三觀を以て。三諦法界とか。空寂無相とか觀するならば。四明の即心念佛に。似たりとも云べけれども。それにてさへ。口稱を境とすれば。四明の佛身を境として觀する。即心念佛とは同じからず。況や唯心法界とも。三觀三諦とも云ずして。たゞ念佛申してと。ばかりいふ行相は。大に四明の妙觀法に違背せり。さて此をよく心得るより外に。即心念佛と云法門はなしと云るゝは。亦大に非なり。南無阿彌陀佛念佛申す外に。四明尊者は。不思議の一心三觀を以て。彌陀の身相を。三諦法界と。觀念する妙觀法を。約心觀佛とも。即心念佛とも名て。弘め玉ふが故に。此明かに口にて念佛申す外に。佛の身相を觀念するに付て。即心念佛といふ。甚深微妙の法門これ

あるに非ずや。かくの如く。明かにこれあることは。をしかくして云ず。無知の輩を誑らかし。此外に即心念佛と云法門はなしと。決定して云るゝは。甚だ正直ならぬことなり。もし四明の如く。佛の身相を。一心三觀にて。唯心三諦と。絶對に觀することは。今時の下根は。及び難し。故に今私に。口稱の念佛にて。淨土も佛も。我心を離れずと知て。念佛申すを。即心念佛と名を立て。勸るなりと云るゝならば。それは四明と別段に適時の巧みを能して。私に拵へて云るゝが故。一往は。ともかくもなれども。今の談義は。その簡別の斷りを一言も云ず。即心念佛と云名を立て。専ら弘め玉ふは。四明尊者なりといひ置て。而して口にて申す念佛を。即心念佛なりと。重々談せらるゝが故。談せらるゝ所が。全く四明所立の。即心念佛なりと。紛らかして聞ゆるなり。況や此外に。即心念佛と云法門はなしと云るれば。四明の即心念佛も。云るゝ外には。これなく。口にて念佛申すことと。いよゝ紛れ

て見ゆるなり。因て今紫の朱を奪ふことを歎て。四明の所立と異にして。談義本の偽作なることを辨するなり。さて上に即心念佛を。亦約心觀佛とも云と云れたるが。四明何れの處にか。三諦三觀とも云す。唯心法界とも觀せずして。南無阿彌陀佛と念佛申すを。約心觀佛。即心念佛なりと。示し玉ふ文あるや。其文を明かに出さるべし。此方より問もせぬ。妄料簡は出さるゝとも。其明文を出すことは。決してなるまじきなり。又四明尊者は。只法界の衆生と共に。即心念佛の一道を。勤めんとの御願ひなりと云るゝに由て見れば。四明尊者は。總じてたゞ理觀の一道ばかりを。有情と共に勤めて。事相の口稱念佛は。衆生と共に勤め玉はざる様に聞ゆるなり。然れどももと天台の意。事理の二行を。雙へ立るが故。全く事相の口稱を捨るには非ず。然るに四明の。願共有情。即心念佛と序せられたるは。孤山等の多く事相を談するに簡び。別して圓妙の理觀を明す。此觀經の上にて。の玉

へるなり。此觀經を序するには。かくの如くの玉へども。心妙觀を明さず。無量壽經や。阿彌陀經等に依ては。事相口稱の念佛を。自の爲にも。他の爲にも。勤め玉へるなり。四明の結念佛會疏を披き見るに。明州延慶院。念佛淨社。當社普結僧俗男女一萬人。畢世稱念阿彌陀佛。發菩提心。求生淨土。乃至每日稱念佛名一千聲。或入社弟子傾逝者。各念佛一千聲。爲彼懺罪。資其願行。令生淨土。至建會日。令社衆念佛。薦其往生。云云。此疏の文をよく見られよ。三諦三觀とも云す。即心約心の名もなく。たゞ南無阿彌陀佛と。佛名を稱念すること。一千遍勤る人を。一萬人勤め募りて。淨社に入玉へり。まさに知べし。此萬人の僧俗男女は。何ぞたゞ圓解開發の類のみならんや。其中には。一文不通の尼入道も。三觀即心の名も知ぬ。愚夫愚婦も多かるべし。因て即心の理觀のこと。一句も云す。たゞ事相口稱の念佛を。勤め玉へり。又云。若欲生彼。但當稱彼佛號。修彼佛慈。必爲彼

佛本願攝取。捨此報身。定生彼國。具如經說。實匪臆談。云云。此もまた即心唯心の理觀のことは。一言も云す。たゞ事相本願の念佛の。一道ばかりを。慇懃に勤め玉へり。また但當稱彼佛號といへる。但の字をよく見られよ。即心の理觀を修せざれども。たゞ口稱念佛の。一道ばかりにて。定て彼土に往生すと。勤め玉ふ文義。最も明白なり。復次に具如經說といへる經說とは。三部經の中には何れそや。次上に必爲彼佛本願攝取。定生彼國とあるが故に。四十八願を説玉ふ。無量壽經なること必定なり。爾らば四明尊者も。即心念佛の旨を明さぬ。無量壽經の本願の説に依て。たゞ本願口稱の念佛を。無智の男女も簡ばす。普く萬人に勤め玉へるなり。

賀山にて。勝蓮社を結し。普く僧俗男女を勧めて。念佛せしむるは。此四明の舊式によるが故なり。これ新法なることに非ず。また他宗の義を取用るにも非ず。而るに蓮社事相の念佛を勧るを

見て。天台宗になりたる甲斐なく。可笑ことをする様に思ふ人は。即ち天台中興の祖師なる四明尊者を笑ふと云ものなり。天台宗と云るゝ人の。四明尊者の勤めを笑ふことは。あるまじきことならずや。

かくの如く。四明尊者。事相の念佛をも。弘め玉ふこと明白なるに。此を知らずして。たゞ即心念佛の一道を。勤め玉ふと云るゝは。甚た當らぬことなり。もし妙宗の序に。願共有情。即心念佛と。の玉ふによつて。四明はたゞ理觀の一道ばかりを弘め玉ふと。強て云れば。淨社の疏に。但當稱佛號とあるによつては。四明尊者は。たゞ事相念佛の。一道ばかりを勤め玉ふと云べきや。左様に云ては。事相理觀。雙へて弘め玉ふ。四明の祖意には。大に背くなり。又宋朝の慈雲大師は。四明の同學にして。學行兼備の名師なるが。深く淨土の往生を願ひ。示人念佛方法と題して。一篇の文を作り。念佛申す法式を示し玉へり。其文を略

して出すに。言念佛者。或專緣三十二相。繫心得定。開目閉目。常得見佛。或但稱名號。執持不散。亦於現身。而得見佛。此間現見。多是稱佛名號爲上。如懷感法師。一向稱阿彌陀佛名號。而得三昧現前見佛。故今普示稱佛之法。必須制心不散亂。念々相續。繫緣名號。口中聲々。喚阿彌陀佛。以心緣歷。字々分明。使心口相繫。若恐心散。須高聲疾喚。心則易定。三昧易成。今時多見世人稱佛。都不精專。散心緩聲。遂致現世成功者少。臨終感應事稀。故今特示此法。切勸。凡念佛時。一心不亂。高聲唱佛。聲々相續。不久成功といへり。此念佛の方法を見るに。まづ念佛を示すとして。佛の三十二相を觀念すると。佛の名號を稱念するとの二種を出し。其中には。稱佛名號爲上と云て。佛の名號を稱念する方法を。普く示し玉へり。其方法は。即心とも唯心とも云ず。又三觀三諦の沙汰もなく。たゞ心をして。散亂せしめず。聲々阿彌陀佛の名を喚て。念々相續し。もし心散亂することあり

らは。高聲に念佛し。佛名を口疾に喚て念すれば。心も則ち定り易く。三昧も成就し易し。凡そ念佛せん時は。一心不亂にして。高聲に佛の名號を唱れば。久しからずして。往生までを待す。現身に佛を見三昧發得の功用を。成就する趣きを。急切に勧め玉へるなり。爾らば台宗の名師なる。慈雲大師も。理觀の一道ばかりに非ず。普く諸人に。念佛の方法を示すとして。延慶院の淨社の如くに。たゞ事相の。稱名念佛を示し。なを高聲念佛までを勧め玉へば。談義本の如くに。たゞ理觀の一道ばかりを。専ら勸るは。反て天台の宗意に非ること明かなり。又此文中。念佛と云に。觀念と稱念との。二途を分ち玉ふに由て見れば。四明の弘め玉ふ即心念佛は。佛の身相を觀念するなり。談義本は。佛の名號を稱念する上にて云るゝが故。四明の所立と各別なること。此に於てまた明かに見つべし。又慈雲大師。晨朝十念法を示して云。毎日清晨。服飾已後。面西正立。合掌連聲稱阿彌陀佛。盡一氣爲一

念。如是十氣。名爲十念。云云次に發願回向の文あり。略して之を出すに。我今正念。稱如來名。經十念頃。爲菩提道。求生淨土。乃至願此十念。得入如來大誓海中。承佛慈力。衆罪消滅。淨因增長。若臨欲命終。自知時至。身不病苦。心無貪戀。心不倒散。如入禪定。佛及聖衆。手持金臺。來迎接我。如一念頃。生極樂國。華開見佛。即聞佛乘。頓開佛慧。廣度衆生。滿菩提願と云り。此願文も。即心唯心の名もなく。三觀三諦の言もなく。たゞ事相口稱の念佛にて。衆罪も消滅し。一念の頃に。極樂に往生して。即ち一佛乘の悟りを開。廣く一切衆生を濟度し。無上菩提を満足せんとの發願なれば。實にあり難きことなるが故。誰人も信受奉行すべきこと。天台宗にても。尊重すまじき法に非ず。因て慈雲大師も。念佛の方法を示すのみならず。又此晨朝十念法を立て但事の稱名念佛を。重々勧め玉へるは。談義本のたゞ理觀の一道計りと云るゝとは。大に相違することなれば。此慈雲大師に依ん

や。また談義本に依んや。天台の末學。請此二つの者。を擇へ。又第七座の末に於て。天台宗ならば。即心念佛を。自の爲にも。他の爲にも。専らとせいでは。天台宗になりたる甲斐は。なきなりと談せられたり。此通りならば。四明尊者や。慈雲大師も。即心念佛ばかりを専らとはせず。事相本願の。口稱念佛をも。兼て勧め玉ふ程に。四明慈雲も。また天台宗になり玉ふ甲斐は。なきなりと斥けられんや。頗る不審なり。もし四明慈雲は。天台宗になり玉ふ甲斐なく。たゞ談義本のみ。天台宗になられし甲斐ありて。天台宗の嫡々と。自負して居らるゝならば。天台宗にて綱格なる。内外境觀の分ちにさへ暗くして。重々山外に似たることをいひ。なを此度の様に不埒なる談義をして。左様に自負せらるゝは。近比不覺悟なることなる程に。早速に改悔して。日比の安心を仕直して然るべきなり。四明慈雲の意。上の如くなるのみならず。更に天台智者の教を見るに。心觀爲宗の。修心妙觀のとある

は。別して此觀經の觀法を釋し玉ふが故なり。總じては。事理の二行。もと經說に出るが故。天台宗祖も。經說に依て。事理の二行。一つも闕ことなく。雙へて弘め玉へり。理觀を明し玉ふは觀經疏等の如し。事相本願の念佛は。十疑論の中に。又阿彌陀佛。別有大悲四十八願。攝引衆生^一といひ。又阿彌陀經。大無量壽經等に十方恒沙諸佛。舒其舌相。證成一切衆生。念阿彌陀佛。乘佛大悲本願力故。決定得生極樂世界^二といひ。釋迦大師。一代說法。處々聖教。唯勸衆生專心。偏念阿彌陀佛。求生西方極樂世界^三といへり。此等の文。即心唯心の理觀は一句も云ず。たゞ事相本願の念佛のみを勸め玉ふこと。宛かも四明の淨社。慈雲の^四方法と一轍にして。歷々分明なれば。末學誰か異議せんや。かくの如く。宗祖の教に。事理の二途。一つも闕ことなきが故。天台の宗教は。上々根の智者達も。其教に依て觀を起し。下々根の尼入道も。其勸めを受けて佛を稱すれば。漏す底の衆生なく。普諸根機を攝得

す。嗚呼天台の宗教。盛んに富るかな。爭土之教。至于天台。其說大備と。古人の稱歎せるは。正しく此か爲なり。而るに談義本は。かゝる祖教に違背して。四明尊者は。只即心念佛の。一道を勤め玉ふといひ。事の念佛申すも。即心念佛を離れずと見るなど。たゞ理の一邊のみを云るゝは。天台の宗教を。最も高上に云んとて。反て尼入道も。愚夫愚婦も。並に漏すことなき宗教の廣大なることを。曾て知れねば。これぞ天台宗になられし。甲斐はなきなりと。謂つべきなり。もし剛然として。天台宗は即心念佛を専らとし。たゞ理觀の一道ばかりを勤むと云れば。天台宗には理觀を明す觀經ばかりを用て。即心を明さず。無量壽經や。阿彌陀經等は。大分水を加る乳なるが故に。用ひぬ經なりと云れんや。もし左様に云れば。天台祖師の十疑論等に。無量壽經も阿彌陀經も。往々に引用ひ玉ふは。何とか云んや。此會通を。紛かさずして。分明にせらるべし。況や愚癡無智の輩が。即心の。三觀のと

いひ。十萬億土を隔てたる。西方の彌陀を。我心の彌陀なりなど、云ことを聞ば。一切合點がゆかねば。まして行することはならず。又即心ならぬは。大分水を加る乳の。極樂の順禮やど位ならでは。えをるまじなど、云るゝを聞ては。今まで勤めし。事の念佛は。あり難くなき様になりて。信心を動轉し。即心もならず。事相も決定せねば。邯鄲の歩みの如くになりて。進退に利益を失ひ。又智慧利根の人が。此意を忘れずして。よく覺え。思ひ思ふ様な談義を聞ては。さてさてわけもなき。理觀なりと打捨て。鳳凰の腐鼠を顧みざるが如くなるべければ。此人にも利益なし。爾らば此度の談義は。愚癡無智の輩にも。智慧利根の人に。利益なきことなれば。下愚も上智も。漏すことななく。普く攝得する。天台の宗意とは。全く云れぬ談義なるかな。又古へ覺超僧都。慧心の僧都に問ての玉はく。所行の念佛は。これ事を行すとせんやこれ理を行すとせんや。慧心の僧都。答へての玉はく。こゝ

ろ萬境にさへざる。此を以て。我たゞ稱名を行するなり。往生の業には。稱名もともたれり。これによりて。一生中の念佛。其數を勘へたるに。二十俱遍なりと。書れし。繪詞傳に出たり。然れば則ち。本邦にては。道俗の尊敬する。慧心の僧都も。我たゞ稱名を行するなりと云て。たゞ事の口稱を専らとして。即心念佛を専らとはし玉はざる程に。談義本の如くならば。慧心の僧都も。天台宗になり玉ふ甲斐は。なきなりと云れんや。又乳に大分水を加えられたりと云れんや。又極樂の順禮やど位ならでは。えをられまじと云れんや。重々不審千萬なり。慧心の僧都を。左様に云れては。有智の台徒は。合點せぬことなるべし。況や慧心の僧都は。安樂院の先祖師に非ずや。それを左様に脚下にいひ落されては。逆路伽耶陀此名弟子破師論と云ものにはならざるや。さて、信仰にもなき談義なり。傳へ聞法然上人も。慧心の所行を追慕して。慧心の先徳の。往生要集を披くに。往生之業。念佛爲本といひ。又かの

人の妙行業記の文にも。往生之業。念佛爲先といへり。然則ち源空は。大唐の善導和尚の教へに隨ひ。本朝の慧心の先徳の勧めに任せて。稱名念佛の勤め。長日六萬遍なり等との玉へり。爾らば法然上人の長日六萬遍の稱名念佛も。根本慧心の勧めに任すとあるからは。いよく慧心は。理觀の一道を専らとせず。事相の稱名を勤め玉ふと云こと炳然なり。又西教寺の開山なる。眞盛上人の別傳を見るに。文明十五年。晦跡黒谷青龍寺。專閱大藏。決志西邁。課佛號日別六萬聲。曾無廢缺。十七年六月。詣台山淨土院阿彌陀堂。祈大菩提心三七日。夢一老比丘授慧心往生要集曰。當將此書。要自利他。乃至巡歷江勢越賀之間。以專弘彌陀洪名爲己任。臨終遺誡云。汝等當寡欲清淨。專勤念佛。乃端坐合掌。稱名數百遍。寂然而化といへり。此傳に任せて見れば。眞盛上人も亦理觀を専らとせず。たゞ口稱事相の念佛を。長日六萬遍勤め玉ひ。なを叡山の淨土院にて。夢中の告を蒙り。慧

心の先徳の。往生要集に依て。自の爲にも。他の爲にも。臨終の遺誡までも。稱名念佛を専ら勤めよと勧め玉へり。因て本山に於ては。不斷念佛の道場を設け。即心の旨を明さぬ。無量壽經の本願の數に準じて。至る處に。四十八夜の念佛會を開き玉ふは。皆これ本願口稱の事の念佛にして。理觀の即心念佛には非ず。傳の中を。始終遍く尋るに。即心唯心の觀は。一處も見えず。三諦三觀の行は。一句もなければ。眞盛上人の勤め玉ふは。決して事相本願の口稱念佛なること明かなり。もし談義本の如く。即心の旨を云ぬ念佛は。大分水を加えたる乳にして。極樂の順禮やど位ならでは。えをるまじ。事の念佛ばかりにて。往生したる人は。悟りかねて。ぐづゝき。即心念佛の人の。早く悟るを見ては。けなりく思ふことならば。眞盛上人も。即心約心の理觀の念佛には非ず。たゞ事の口稱念佛を。自の爲にも。他の爲にも。勤め玉ふ程に。眞盛上人を始めとして。それより今に至るまでの。其宗旨を受

る所の。幾千萬億の僧俗男女は。大分水を加えたる乳の如くなる念佛にて。たとひ往生しても。皆々極樂の順禮やど位ならでは。えをらず。悟りかねて。ぐづゝき。早く悟る人を見て。けなりく思ふて居られ。たゞ僞作の即心念佛信仰の。清堂のみが。千萬億の僧俗男女にも勝れ。開山祖師の。眞盛上人よりも。勝たる往生をして。眞盛上人や。其流をくむ。僧俗男女の。悟りかねてぐづゝきを見て。哀れなることと思ふて。居らるゝと云れんや。さてい信仰し難き談義なり。左様に云れては。眞盛上人を祖師と仰ぐ。天台律宗の僧俗男女は。全く以て受取まじきことなり。此に知ぬ。談義本の。理觀の一道を専らとせらるゝは。天台四明。慈雲大師。慧心僧都等の教行に。違背すること明白なれば。無智無眼の輩は。頂戴奉持し。讚歎弘通すとも。有智有眼の人は。誰か之を信受せんや。又先年撰せられし。台宗綱要には。事持と云は。餘念を起さず。心を彌陀の名號にかけて。南無阿彌陀佛と唱るなり。此

邊は。善導法然の勧めと。かはることなしと云れたり。此云分の通りなれば。善導法然とかはることなき。事相本願の念も。なる程天台宗に立ることなるに。此度は胸中に一物ある故か。何と思れし故にや。それを全く云ず。たゞ理觀の一道ばかりを談して。即心を云ぬ。但の事相の念佛は。佛説の乳に。大分水を加ふの。極樂の順禮やど位ならでは。えをるまじなど云て。他宗の人の忿恨を發し。自宗の祖の教行に背かるゝは。これ笑止なることならずや。談曰。其根本は。佛の説玉へる。觀經より出たりと云は。是心作佛。是心是佛と説せ玉へる文なり。乃至本來佛と。めんくの心とは。同一體にして。少しも相かはらぬものなれば。是心是佛と説玉ふ。我心と佛と。相かはらずと思ふて。佛を思ひ佛の名を唱れば。我が即ち阿彌陀如來の如くの。結構なる佛になるゆへに。是心作佛と説せ玉へり。辨曰。即心念佛の根本は。佛の説玉へる。觀經より出

たりとは。なる程云るゝ通りなれども。今其解了せらるゝ所は。大に經説に背けり。此は十六觀の第八。像觀を明し玉ふ下の經文なり。今其經文を出すに。上に於て。是心作佛。是心是佛の觀體を明し已て。次に正しく觀法を示すとして。是故應當一心繫念。諦觀彼佛。多陀阿伽陀。阿羅伽。三藐三佛陀。想彼佛者。先當想像。閉目開目。見一寶像。如閻浮檀金色。坐彼華上と。のべ玉へり。此經文には。佛の寶像の。蓮華の上に坐し玉ふを。諦かに觀想することを明して。佛を思ひ。佛の名を唱ると云ことは一言もなし。根本の經文。何れの處にか。佛の名を唱ると云言あるや。其文を出さるべし。たとひ氷りの底より。猛火は出さるるとも。此處の經にて。佛の名を唱ると云文を出すことは。決定してなるまじきなり。爾らば經文には。決定して一言もこれなきことを。經文にあることの様に上手に紛らかして云るゝは。亦これ無知の輩を。誑らかさるゝなり。此下の經文に。若不與修多羅合

者。名爲妄想と説。妙宗鈔には。全非像觀禪定。故名妄想と釋し玉へば。此に準するに。四明の佛の色像を觀する。即心念佛は。修多羅の文に。諦觀彼佛といひ。先當想像等といへるに。よく符合すれば。これ正觀なり。最も珍敬すべし。佛の名を唱ると云ことは。第八像觀の經文に。一言もなく。修多羅の文と。全く合せざることなれば。名て妄想とすべきなり。妄想顛倒の即心念佛。誰か之を奉行せんや。此經文を釋し玉ふ。天台四明の疏鈔を見るにも。佛を思ひ。佛の名を唱ると云ことは。一句もなし。妙宗鈔には。今於一念。妙觀。是。能離性過。即是而作。故全性成修。則泯一切自然之性。即作而是。故全修即性。則泯一切因緣之性。若其然者。何思不絶。何議不忘。既以作是。絶乎思議。復以作是。顯於三觀。乃至故知作是一心修者。乃不思議三觀といひ。上に引。一心繫念。諦觀彼佛の經文を牒して。即一心三觀也と釋し。又般舟三昧經の。心有想則癡。無想則泥洹等の文を引玉へり。此祖

判を見るに。根本作是の觀法は。不可思議の一心三觀を以て。佛の色像を。唯心にして。三諦法界と觀して。而も能所の相もなく。作是一心にして。思を絶し。議を忘れ。憶想分別を。離るゝ所の妙觀法なり。談義本の如く。作是一心に觀すとも。唯心三諦と觀すとも云すして。たゞ愚夫愚婦の心の内に。佛のことを。賤のをだまきくりかへし。思ひ思ふて。思議を絶せず。南無阿彌陀佛と。佛の名を唱ると云ことは。根本像觀を明す。修多羅の文と合せず。四明の解釋とも合せざる。妄想の即心念佛なること決定なり。もし經文や四明の如く。佛像を境とし。作是一心に觀するとは。末世の愚癡無智は。とても。なり難し。それ故に。今は佛の名を唱る上にて。我心を離れずと知たり。覺えたりして。念佛申すを。私に即心念佛と名を付て。勤めしむるは。のちゝ經文や。四明の様なる。眞の即心念佛の妙觀を修行する時の。因縁となるなど。談せらるゝならば。それは適時の巧みにて。經

文や四明と。各別に立て。勸化の方便とせらるゝが故。且く其通りなれども。左様に簡別する斷りは。七座の談義の始終に一言も云ず。即心念佛の義は。根本觀經より出たり。其名を立て。弘め玉ふは。四明尊者なりと。いひ置ながら。而も觀經や四明とは違ふて。段々口にて。佛の名を唱へて。念佛申すことを出し。重々不埒なる觀法を云るゝが故。獅子の皮を蒙りて。野干の鳴をなすが如くなれば。人我にてはなけれど。も。さりとは。信仰し難き談義なり。初に觀經や四明といひながら。而も觀經四明と違ふたことを。偽り作りて云るゝは。偽作の即心念佛ならずや。修多羅の文や。四明の釋に見えぬことを妄りに憶度分別して云れば。亦これ妄料簡の即心念佛なり。

有問曰。妙宗鈔に。故知作是一心修者。乃不思議三觀。十六觀之總體。一經之妙宗。文出此中。義徧初後と云て。作是の妙觀を。明し玉ふ文は。第八像觀の中に出たれども。其義は初後の十五觀

にも。徧く通じて用る妙觀なりと。示し玉ふが故。作是の觀法は。必ずしも第八の像觀に。限るものには非ず。爾らば今も義を以て例して。佛を思ひ。佛の名を唱る上にて。作是の觀を談するに。何の過かこれ有んや。答。此妙宗は。談義者のにげ口に。云れんと思ふ文なれば。よくこそ出されたれ。上の辨に。像觀の經文を出して云は。作是の説は。正しく第八像觀の中に出たるが故。別して其根本の經文に依て云ことなり。西方の依正を觀する十六觀は。同じ觀經の中に出て。一類の觀なるが故。義を以ていへば。初後の十五觀に通せずと云には非ず。因て四明尊者。文出此中。義徧初後と。其斷りをの玉へり。かくの如く。義徧初後と。斷りをの玉ふが故。文にはなければ。義によつて。十六觀を修するに。皆作是の妙觀を。用る旨を釋し玉ふは。よく明かに聞ゆることなり。妙宗の文。十六の依正を觀するには。

徧く通すと云ことなれども。佛の名を口にて唱る。念佛申しの上にて。徧く通すと云ことには非ず。もし談義本も。作是の文は。第八の像觀に出て。不思議の三觀にて。佛身を觀することなれども。左様に觀する事は。今時の愚輩は。なかなか難し。故に佛の名を唱へて。念佛申す上にて。作是のことを。思ひ思ふ様に勸るなりと。その斷りをいひ置てから。云るゝならば。それはともかくもなれども。上にも云通り。左様の斷りは。七座の談義の始終に。一言も云す。初座の談義に。即心念佛と云名を立て。専ら弘め玉ふは。四明尊者なり。其根本は。觀經の。是心作佛。是心是佛と。説せ玉へる文なりと。いひ置て。而して後に。我心と佛と。相かはらずと思て。佛を思ひ。佛の名を唱るなどゝ云るゝが故。云るゝ所が。即ち觀經に出たる。作是の妙觀。即ち四明の名を立て弘め玉ふ。即心念佛なりと。紛らかして聞ゆる

なり。因て上の辨に。別して根本と云るゝ所の。像觀の文。四明の釋によつて。重々難破することなり。四明祖師の。義徧初後と斷りを云て。十六觀に徧く通せしめ玉ふが如くにはせず。何とて。一言の斷りをも云ずして紛らかしたること。を談じて。無知の輩を誑らかさるゝや。況や像觀の作是一心に修して。思を絶し議を忘るゝ。不思議の一心三觀に義例して。佛と我心と。同一體にして。相かはらずと思て。思議分別を絶せず。佛を思ひ。佛の名を唱るを。作是の妙觀なりと云るは。玉に瓦を例する様な義例なれば。いかにしても信伏して。受取ことはならぬなり。

談曰。極樂國土も。我心を離れず。阿彌陀佛。觀音勢至。清淨大海衆も。我心を離れずと知て。往生の願を起し。念佛申すが。即心念佛なり。即心念佛の義。此外にはなきことなり。かく云分は。むづかしき入くみにてもなし。合點し難きこともなければ。いか

なる人も。合點ゆくべきことなり。只此意を忘れずして。念佛申すにつけて。此意を思ひ。此意を思ふて。念佛申すが。即心念佛なり。

辨曰。此趣きも。天台四明の。の玉はぬ偽説にして。有がたからぬ談義なり。まづ即心念佛と云は。約心觀佛と云とこれ同じく。前に三諦の理を。明かに解して。而して後に。佛の身相を。所觀の境とし。唯心法界と觀する妙觀法なり。因て妙宗鈔に。大乘行人。知我心。具諸佛性。託境修觀。佛相乃彰といへり。文の中の知とは。これ開解。託境修觀とは。これ用觀。佛相乃彰とは。これ所顯の法なり。爾らば今。極樂も彌陀も。我心を離れずと知てと云るゝ知とは。前にも云通り。たいこれ開解の分齊にして。

此且く與へていふ。いかなる人も。忘れずして。覺えて知ことなれば。實は圓妙の開解には非ず。未だ此理を照す觀行に非ず。次に念佛申すと云るゝが。正しく行相なり。其念佛申す境に託して。三觀を

以て觀すとも。唯心法界と照すとも云すして。たゞ口にて南無阿彌陀佛と。念佛申すを。約心觀佛と同じ所の。即心念佛なりと云るゝは。天台四明の釋に。全く見えぬ妄料簡なり。況や結して。即心念佛の義。此外にはなきことなりと。詞を放つて。談せられたるが。たゞ南無阿彌陀佛と。念佛申す外に。なる程四明尊者。明かに佛の身相を。一心三觀を以て。絶待に觀念することを。重々明し玉ふが故。此外になきことなりと。放言せらるゝは。無知の輩を誑らかす。臆裏の妄談なり。か様の妄談なるが故。かく云分は。むづかしき入くみにてもなし。合點し難きこともなければ。いかなる人も。合點ゆくべきなりと。云るゝが道理なり。いかなる人もと云るゝからは。尼入道も。愚夫愚婦も。合點し易き。南無阿彌陀佛と。念佛申す即心念佛なれば。全く四明の名を立て弘め玉ふとは。異なることなり。されば釋迦彌陀等の如き。究竟の佛智なる。一心三觀を以て。遙かに遠き西方の彌陀を。唯心

にして。三諦法界と。作是一心に觀する眞の即心念佛は。此を圓かに解知することさへ甚だ難し。況之を觀じ照すこと何ぞ易からんや。恐くは天下に廣き台徒の中にも。文字上の知解はありとも。明かに此心觀の圓解を開發して。念々性に稱ふて。絶待に觀する人は。まことに稀なるへし。容岳にては。此邦の四明と。尊重渴仰する。老比丘にて居ながらも。此念佛のこ。拙僧も勤め得たりとは。思はれねば。いかでか。人々をして。深く信得せしむることを得んやと云るゝが。これ眞實語なるべし。かの清堂の。吾さへとくと。會得せぬといへるは其筈なり。爾らはいかなる人も。難きことなく。合點ゆく様なる。即心念佛は。決して四明の弘め玉ふ所に非ず。黄金に似せたる。眞鍮の如き。偽作の即心念佛なれば。眼ある人は受取まじ。次第に段々色がさめて。千歳の後までも。醜名を殘されんは。笑止なることなり。さて此意を忘れずして。念佛申すにつけて。此意を思ひ。此意を思ふて。念佛

申すが。即心念佛なりと談せらるゝも亦非なり。此は上に即心念佛の念とは。おもふなりと。いひ置て。下に節々思ふゝと云るゝなり。其思ふと云るゝは。未だ桶の底のぬけぬ。悠々の愚輩の。能思所思の相も忘れず。胸中にもやつく。周遍法界や。我心を離れぬ。唯心の緣影を認て。憶度し思慮する分齊なり。他宗にても。澄潭不許蒼龍蟠など云に。未だ桶の底がぬけぬ故。大分水がたまりて。周遍法界や。三諦唯心の蒼龍が多く蟠り。第二の月も。やどりたるを。天台宗の即心念佛にして。受取ことは全くなるまじきなり。因て合點し難きこともなければ。いかなる人も。合點ゆくべきなりと。心易げに云るゝなり。然るに四明の名を立て。弘め玉へる即心念佛の念の字は。なる程おもふとは訓ずれども。此は約心觀佛の。觀の字と同じことにして。不思議の一心三觀なれば。おもはずしておもふ。無念の觀念なり。かの悠々の愚輩の。能所の

相を忘れずして。思慮する念とは同じからず。此無念の觀念の相を。四明妙宗に。徳既不縱不橫。諦乃絶思絶議。此是佛之所諦。今以此諦。而爲所觀。諦既即一而三。觀豈前後而照故依妙諦。以立觀門。即於一心。而修三觀。此觀觀法。能所雙絶。況無量壽佛。本修此觀。成就三身。法報泯然。眞應融即。非玆妙觀。寧顯妙身。といひ。又稱性而觀。絶待而照ともいへり。四明の弘め玉ふ眞の即心念佛は。かくの如く。思ふ心も。議る詞も亡絶し。妙諦これ一に即して而三。妙觀また前後ならず。一心に即して三觀を修す。終日妙境に對して。よく觀すれども。而も能所の相を雙へて絶し。世に稱ふて絶待に照すなり。かゝる圓頓の妙觀なればこそ。無量壽佛の妙身もよく顯はれ。三世の罪もよく滅し。因となることも亦強く。淨土の莊嚴も殊勝なれ。今四明の妙宗に依て。即心念佛談義本と題せらるゝからは。かくの如き四明所立の即心念佛の甚深微妙なる心妙觀の旨を。専ら談して勸めらるゝ

等なるに。左様にはなく。四明の弘め玉ふより外に。我心を離れずと知て後の行を。此意を忘れず。思ひ思ふて。南無阿彌陀佛と。念佛申すを。即心念佛なりといひ。いかなる人も。合點ゆくべしなど、談せらるゝは。謂つべし。縣額勝州。惑亂行者ものなりと。又初座の談義に。即心念佛を。理持とも云なりといはる。此甚た非なり。此は從來四明の即心念佛と。理持との不同を。知れぬ故なり。四明の即心念佛は。十六觀の第八像觀の文に依て。彌陀の身相を。作是一心に觀することなり。理持と云は。阿彌陀經の。執持名號の文に由て。口にて彌陀の名號を唱へて。執持する上にて。三諦の妙理を觀することにして。觀門各別なることなるに。觀經より出る。四明の即心念佛を云として。阿彌陀經より出たる。理持の念佛申すことを。重々談して紛らかさるゝは。此乃ち即心念佛を稱念とせらるゝ偽作の根本。大なる錯りなり。況や天台宗の理持とは。念佛するの。三諦法界と觀し。空寂無相

と觀するを云ことなるに。談義本は然らずして。我心を離れずと。知たるばかりにて。此をくりかへし。思ひ思ふて。念佛申すを。理持なりと云るれば。甚だ非なることなり。されば天台大師。理の一心種名を釋すとして。理一心者。達此心自他共無因。不可得。無心無念。空慧相應。此乃無一無心といへり。かくの如く。念々に申す所の稱名を。四句を離れて。空寂無相なりと觀達する空慧相應して。一もなく。心もなきこそ。理の一心稱名にして。眞理持と云ものなれ。妙立和尙。此理の一心を。心をば。たゞ名のみぞと。しらすの。亂れぬもまた。くりかへすなりと詠せられしは。談義本の。しづの。をだまき。くりかへす勸めとは違ふて。よく其意を得られしなり。爾らば周遍法界や。唯心三諦の緣影を。くりかへし。忘れず思ふ様なは。偽作なること昭然顯著なり。他宗の人。かゝる偽作を聞ば。日比深妙なること聞及びし。天台宗の即心念佛は。さても。淺々しきこと。しづのをだまき。く

りかへしたる在様は。千代野が。桶の底の。ぬけたるには。遙かに及ばぬことと。笑ふべきなり。爾らば此談義。他宗に向て。説べからすと云るゝは。なる程尤千萬なり。いよく左様に。禁制せらるゝが然るべし。他宗の中にも。禪宗などには。聞せても害あるまじと云れしが。此は大に尤ならず。此云分より見れば。禪宗の旨を。少しも合點せられぬと聞えたり。此度の様に。此意を忘れず。思ひ思ふて。しづのをだまき。くりかへす。即心念佛の談義を。少しにても。心ある禪宗が。聞たるならば。別して腹を捧て笑ふべければ。此天台宗の耻辱なることにして。大に害あることなる程に。禪宗には。いよく聞すことを禁制にし。たゞ家裏の小僧共を對衆にして。密かに談せらるるが。宜しかるべし。嗚呼公道ならぬ談義。天台四明等の。事相理觀。雙へ談じて。普く諸根機を攝得するとは。大に異なることなれば。其邪談なること。明かに知ぬべし。又旁觀記には。此理を悟りて後。後の字眼をつ

く。念々に此理を照して。念佛申すをば。天台宗の理持の念佛と云といへり。此記はなる程よく聞えたり。此に由て見るに。此度我心を離れずと知て。念佛申すと。云るゝ所の知とは。旁觀記の。此理を悟りてと云と同じくして。たゞ妙解の分齊なり。その知て後の行を。旁觀記の如く。念々に此理を照して。念佛申すと云す。此度はたゞ念佛申すとばかりなれば。此は理持とも。即心念佛とも云れず。妙解らしき詞は。少しあれども。其行は觀照なき。たゞこれ事相の念佛なり。因ていかなる人も。合點ゆくべきなりと。心易く云るゝなり。かくの如きは。四明の弘め玉ふ。前に妙解を明に開て。而して後に境に託して。唯心法界と。念々に觀し照す。即心念佛とも名け難く。また天台宗の理持ともいひ難きなり。又台宗綱要に。理持と云は。前の事持の上に。念佛申吾心も。本來三諦法界なり。念する所の佛も。唱る所の名號も。一々皆三諦法界なりと云所を。深く了達して。理を照して念佛申

念佛申すに付て理を照すを。理持と名るなりといへり。此云分も亦聞えたり。三諦なりと云所を。深く了達してと云は。これ妙解にして。理を照して念佛申すと云より下が。正しく妙行なり。かくの如く云てこそ。理持なるべけれ。此度の様に。我心を離れずと知てと。知解するばかりにて。其行は綱要の如くに。理を照して念佛申。念佛申すに付て。理を照すとは云す。たゞ念佛申すとばかり云るゝは。さてく信受し難き理持なるかな。

有問云。先年撰せられし旁觀記や。台宗綱要の理持は。よく聞えて。此度の理持が聞えぬならば。談義者の學問は。先年より反てさがりたりと云んや。答。學問のさがりたるか。老耄せられたる故か。但しは胸中に一物ある故か。我は知す。何れにしても。此度のは不出來なり。

談曰。三諦の彌陀を念するは。即ち一心三觀なり。此理を知て。此理を照すは。上々の人なり。此理を

知ねども。此理は離れぬものなれば。愚癡無智の人の申す念佛も。一心三觀の即心念佛と云に。相違なきなり。此則即心念佛の人よりは。事の念佛申すも。即心念佛を離れずと見れども。事の念佛申す方よりは。左様にはえ云ぬなり。

辨曰。此談義中に。此理を知て。此理を照すと云るゝ此理を知とは。たゞこれ妙解の分齊此理を照すと云が。正しく行相なり。爾らば前に我心を離れずと知てと。云るゝ所の知とは。開解の分齊にして。未だ此理を照す。觀行には非すと云こと。此處にてもよく見ゆるなり。又此に此理を照すは。上々の人なりといひ。前にも。南無阿彌陀佛と申す處に。一心三觀があきらかなり。此は上々の即心念佛者なりといひ。後には此安心に

此安心とは。上に云る。口にて念佛申す上の安心なり。四明の觀佛とは同じからず。

淺きあり。深きあり暗きあり。明かなるあると云るゝ

より見れば。口にて唱る所の彌陀を三諦法界なりと妙理を照すは。深く明かなる。上々の人なり。三諦の理の明かならぬ人は。此理を一心三觀にて。觀じ照すことはならず。それゆへ。たゞ我心を離れずと云ことを知覺えて忘れず。思ひ思ふて。念佛申すが。淺く暗き。下根の人なりと云意にして。前にいかなる人も。合點ゆくべしと云て。愚癡無智をも。簡び除られぬは。此下根の人のことと見へたり。此は上下根共に。口にて南無阿彌陀佛と。佛の名を唱る上にて云るゝが故。四明の。佛の身相に託し。思議を忘れて觀念する。眞の即心念佛とは。異なるなり。況や口にて念佛申す上にて。上下根の人や。淺深明暗の品を分つ即心念佛は。根本の觀經にも曾てなく。天台大師の疏にも終に見えず。その名を立て弘め玉ふ。四明の妙宗鈔の中にも。全くこれなきことなれば。此も亦談義本の妄料簡なること必定なり。最前には。根本は觀經より出たり。名を立て専ら弘め玉ふは。四明尊者なりとい

ひながら。而もか様に。觀經にも四明にもなき。妄料簡を出さるゝは。譬へば看板には。すさまじき虎を畫き出して。而も虎にはあらぬ。猫を見せるが如し。無知の小兒は。誑らかさるゝとも。有識の人は。全く合點せぬことなり。さて即心念佛の人よりは。事の念佛申すも。即心念佛を離れずと見れども。事の念佛の申し方よりは。左様には。え云ぬなりとは。此も四明の弘め玉ふが如き。圓妙の理觀を修する人より見るならば。なる程左様に事の念佛申すも。即心念佛を離れずと見るべし。さりながら。談義本の如く。いかなる人も。合點し易き所の。思ひ思ふて。念佛申す様な即心念佛の人よりは。なかく左様に見ることは。なるまじきなり。又此談義の通りなれば。此度は事の念佛申すも。即心念佛を離れずと見る。理觀の人のことばかりを云て。左様にはえ云ぬ事の念佛申すのこと。全く云れねば。事理の二行を具足する。天台宗の意に背き。十疑論や。延慶院の淨社の如き。但事本願

の念佛を、捨らるゝと云になるなり。具さには、後に至て片輪車と破するが如し。

談曰。即心念佛は、事の念佛より遙に勝れて功德利益、廣大無邊なり。前にも云し通り、先三世のつみとがを滅することが廣大なり。乃至して又、同じ念佛にて、同じ淨土に生ずれども、即心念佛の人は、淨土の依報正報を、感見し奉ることが、殊の外勝れて、微妙不思議、結構至極なり。因て四明尊者は、如諸經說、凡小善行、廻向求生、縱依大乘、仍是散善、故感安養、淨相猶劣、若今頓教、心觀妙宗、所見淨相、永異他部と釋し玉へり。云云

辨曰。四明の名を立て、弘め玉ふ即心念佛は、究竟の佛智を悟りて用る。妙觀法なれば、事相の行の及ぶ所に非ず。なる程其功德利益、廣大無邊にして、三世の罪もよく滅し、淨土の莊嚴も勝るゝなり。然れども此度云るゝ様な、偽作の即心念佛は、それ程功德無邊なりとは云べからず。引るゝ所の四明の釋は、皆これ心

妙觀の功德利益の、廣大無邊なることを、の玉へる文にして、全く、以て、思ふたり、覺えたりする。即心念佛の利益のことに非ず。若今頓教、心觀妙宗、といへる。心觀妙宗とは、いかなるものと思はるゝや。四明尊者、心觀即是一心三觀といひ、大矣哉一心三觀之妙宗也と稱歎し、又以此覺心、觀於依正、能所即絶、待對斯忘、妙觀之宗自茲而立と示し玉へば、思を絶し、議を忘るゝ、不可思議の一心三觀を以て、西方の依正を、所觀の境とし、唯心法界と、絶待に觀念するを、心觀の妙宗といへるものなり。談義本の如く、能所を忘れず、待對を絶せずして、覺えたり、思ひ思ふて、念佛申す、偽作の即心念佛のことに非るなり。而るに西方の依正を、觀念する心妙觀の、功德無邊なることを明す。四明の解釋を重々引て、偽作妄想の、佛の名を唱る。即心念佛の證據とせらるゝは、甚だ不都合なること。嗚呼證龜成鼈、此之謂也。此事は談義本にも、覺束なく思はるゝと見えて、兼て伏疑を遮せ

られたれども、大に不埒なることなり。初座の談義に、但し即心念佛の意を、能く合點したる人は、左様の功德もあるべし。吾等底の、即心念佛の意の、合點のゆかぬものは

第二座の談に、合點し難きこともなければ、いかなる人も合點ゆくべきなりと云るれば、即心念佛の、合點のゆかぬと云人は、あるまじきことなるに、今我等底の、合點のゆかぬ者と云るゝは、いか様なる者にて、合點ゆかぬや、其者を承りたし。又我等底の合點のゆかぬ者とは、いかなる人もと云るゝ所の、人の内には、入ぬ者なりや、その入ぬわけ、明かに承りたし、口の揃はぬ談義にて聞わけ難きなり。

何とて左様の功德あるべきやと云、疑あるべきことなれども、合點のゆかぬことも、度々聞ば、後には合點ゆくものなり。退屈すべからずと云れたり、此伏疑は、上に於て、即心念佛の觀念は、重罪を滅する、大力

用あることを云に付て、心作心是と觀念する。即心念佛の意を、能く合點したる人は、左様の大功德もあるべけれども、吾等底の、愚癡無智の、合點ゆかぬ者は、何とて左様の功德あるべきやと云疑なれば、此を會通するからは、愚癡無智の合點ゆかぬも、なる程左様の功德があるとか、いやゝなしか、はつきと、會通せられでは、叶はぬ處なるに、愚癡無智の、合點ゆかぬ者も、なる程左様功德があるとはいかにしても、人目があれば云れず、又功德なしと云ては、三諦の理の明かならぬ人の、覺たり思ふたりするも、功德利益、廣大無邊なる様に、談せらるゝ指合となるが故、進退維谷り、此に於て、口比名を得られし、紛らの上手を出し、合點のゆかぬことも、度々聞ば後には合點ゆくものなり。退屈すべからずと、紛らかして、しまはるゝは、これ不埒なることならずや、もし我等底は、なかゝ合點ゆくまじきことゝ、合點の有無を疑ふならば、今此會通にても、埒があけども、吾等底の、合點

のゆかぬものは。何とて左様の功德あるべきやと。功德の有無を疑ふに。功德があるとも。なしともえ云ず。たゞ合點のゆかぬことも。度々聞は。後には合點ゆくものなり。退屈すべからずとばかり云て。警策して。しまはるゝは。さてく不埒千萬なることなり。かゝる不埒を云て。はつきと。會通のならぬと云は。三諦の理の。明かならぬ人の。覺えたり。思ふたりする分齊は。眞の即心念佛には非ずして。元來四明の如くなる。廣大無邊の功德なきが故なりと云こと。自顯れたるなり。かくの如く。はつきと。會通はならず。やうやう得手の紛らを出して。當分の難を遁れながら。此にも懲ずして。又第六座の談義に。即心念佛の功德利益を云として。四明の即心念佛に。廣大無邊の功德あると云文どもを。偷に取來て。覺えたり思ふたりする。愚癡無智の念佛申しの功德の様に。紛らかして憍らるゝは。狐が虎の威をかつて。百獸に憍慢するが如く。又隣りの藏にある。結構なる寶どもを。數へたて

て。我物の様にいひ。知ぬ人を誑らかすが如し。さてさて正直ならぬこと共なり。左様に愚癡無智の覺えたり思ふたりして。念佛申すに。四明の如く。廣大無邊の功德があるならば。何とて最前伏疑を會するに。なる程功德があると。はつきと會通せずして。餘處ごとを云て。紛らかざるゝや。か様に談義の腰がすはらず。紛らかしの出るは。もと四明の弘め玉ふ。眞の即心念佛には非ず。偽作妄料簡の故なること明かに知るなり。

即心念佛の申し様の事と。標する下の談曰。即心念佛の行者も。手前を能し。腰をすゆるを。本とすべし。其手前。腰のすへやうは。とかく佛道修行は。六道の中にては。人道最上なれば。人間の心になり。人間の心を失なわぬが。念佛申しの手前。腰のすゑやうなり。乃至人の心と云は。體能義讓。即人道心と釋して。仁義禮智の心が。人の心なり。孟子の四端。云云

辨曰。まづ此即心念佛の申し様とある。標題を見れば。見るとはや。四明の即心念佛にはあらぬと云ことが。よく知るなり。何となれば。四明の名を立て。弘め玉ふのならば。即心念佛の觀じ様とか。觀念し様とか云では。叶はぬことなるに。即心念佛の申し様とある。申すとは口にて南無阿彌陀佛と申すことなれば。四明の佛身を觀念する。眞の即心念佛にはあらぬ。偽作なりと云事の。よく顯はるゝ標題なり。心を付て見るべし。さて即心念佛の行者の。腰のすへ様と云るれば。なにぞ甚深に殊勝なることにてあらんと思ふに。一向左はなく。たゞ人の心を失はぬが。即心念佛の行者の。腰のすへ様とは。さてく信さめたる談義なり。人の心を失はず。惻隱羞惡。辭讓是非の心の。あるべきことは。儒者も。佛者も。小乗の學者も。大乘の行者も。下職人百姓に至るまで。並に同じことなれば。今別して天台宗の即心念佛の行者と。高上に標し出す。その腰のすへ様に。人の心を失はぬといふ分に

ては。近比不足にして。殘念千萬なり。なをよく思案し。腰をすへ直されて可なり。か様の合點なるが故。此度の談義も。腰がすはらず。理觀やら。口稱やら。ふらゝとしたる在様なり。かゝる在様なる談義にて。即心念佛の。安心決定すべきこととは。さらく思はれぬなり。

談曰。三諦の理の明らかならぬ人にて。とかく我心が法界なれば。西方の彌陀は。我心の内の彌陀なり。我は彌陀の心の内の衆生なりと思ふて。念佛するがよきなり。此念佛の功積らば次第に三諦の理が明らかになるべし。此分は。學問せぬ人も。なるほど覺へ易きこと。心得易きことなれば。天台宗の念佛申しは。必ず此意にて申すべし。即心念佛の安心決定。此外にはなきことなり。

辨曰。今圓人の即心念佛を談ずるとして。三諦の理の明かならぬ人の。西方の彌陀は。我心の内の彌陀なり等と思ふて。念佛申すがよきなり。此念佛の功積らば。

次第に三諦の理が。明かになるべし。即心念佛の安心決定。此外にはなきことなりとは。天台宗の全く云まじき妄談なり。開解定境用觀の次第は。天台の綱格。進道の要宗なるが故。止觀には。今依妙解。以立正行との玉ひ。讀教記には。開妙解於定境之前用妙觀於定境之後。荆溪義例。十不二門。大概同然。皆先開解。而後立行也といひ。妙宗鈔にも。今修圓觀。必先解知能生因緣及所生法。皆不思議。方於此境。觀空假中。と云て。圓觀を修するには。必ず先に妙解を開て。三諦不思議の理を。明かに知解し。而して後に。所觀の境を定め。此に於て方に境に託して。即空假中の妙觀を用ることなり。爾らば未だ合點もゆかず。圓解も開けず。三諦の理も明かならぬ人の。心觀の妙宗なる。即心念佛の妙行を修すると云ことは。あるまじきなり。智目行足。到清涼池と釋して。三諦の理を明かに解する智慧は。目の如く。妙觀の修行は。足に譬へ玉ふが故に。今云るゝ所の。三諦の理の明かならぬ

とは。智慧の目なき人なれば。此人の即心念佛は。目くら修行と云ものなれば。旭師の嫌へる。瞎鍊盲修にして。甚だ天台四明等の說に背けることなり。況や此念佛の功積らば。三諦の理が。明かになるべしと云るは。顛倒したる解行なり。即心念佛の妙觀を。未だ用ひぬ前には。三諦の理が明かならず。即心念佛の修行の功を積て後に。始めて妙解が開けて。三諦の理が明かになると云ては。即心念佛の妙行を前に用ひ。三諦の理を明かに解する妙解を。後に開くと云ものになれば。天台宗の綱格なる。開解定境用觀の次第に背く。顛倒の邪說なり。か様の邪說を云るゝからは。從來内外境觀の分ちをも知ずして。十義書。妙宗等の祖判に背き。重々山外に似たることを云るゝが其筈なり。今かくの如く。わけもなきこと共を。いひつけ。即心念佛の安心決定。此外にはなきことなりと。結成せられたるは。さてもゝと。言語を絶することなり。況や四明尊者は。不忘非妙觀と示し。何思不

絶。何議不忘と。釋し玉ふが故に。此度の如く。三諦理明かならぬ人の。西方の彌陀は。我心の内の彌陀なり等と云ことを。ひたもの功を積て思ふたり。學問せぬ人の。隨分忘れぬ様にして覺えたり。か様のものと合點し。心得たりする分齊は。三諦や唯心の。緣影を認たる。憶度思慮と云ものなれば。四明の弘め玉ふ。即心念佛の妙觀には非ず。かく緣影を認て。憶度する念佛の功積らば。其功の積るほど。三諦の妙理は。明かなる段にてはなく。いよゝ冥きより。冥き闇路に入べきなり。妙宗鈔に。冥圓說者。初心即用佛智照境。故能信解諸法實相。乃至若離心緣能所等相。名爲實相。介爾有相。即爲魔事。故別教已下。至六道法。皆有能所心緣等相。魔能說之。悉名魔事。乃至以此覺心。觀於依正。能所即絕。待對斯忘。妙觀之宗。自茲而立といへり。此鈔文をよく見られよ。圓頓の行人は。初心始行より諸法實相を信解すれば。三乘の聖智に超過し。究竟の佛の智慧を用て。名字の相も。心緣の

相も。能所言說の相をも。ことごとく離れて。所觀の境を。待對を忘れ。能所絶して。觀し照す妙觀を用るなり。
復楊文公書。若今圓に論せば。不離而離。初心能離佛之所離。以一心三觀即佛智故との玉へるも。亦此意なり。初心は爾らず。後心に至て方に離ると云は。權教の意なり。圓頓は初後不二にして。後心の佛智を。初心始行より用るが故。用る所の觀智に。能所心緣等の相は。全くなきことなり。因て妙宗鈔に。圓人始終能用上品寂光理。而爲觀體との玉へり。
もし介爾も。能所心緣。名字等の相あるは。全く佛智の照す實相には非ず。悉く魔事と名くと示し玉へば。今圓人の即心念佛を云として。三諦の理の明かならず。未だ圓解の開けぬ人の。西方の彌陀を。我心の内の彌陀なりと。其名相を認て思ふたり。學問せぬ人の功を積てくりかへし。忘れぬ様に覺えたりすると云

は。大に心縁の相もあり。能思所思。能覺所覺有て。能所絶せず。待對忘れざれば。四明所説の即心念佛の妙觀には非ず。即ちこれ魔事を行すと云ものなり。此魔事の即心念佛が。近來出たる故に。大勢の僧俗男女が誑らかされて。日此の安心を損害し。極樂往生を。しそこなひ。生死の魔民となる様に見ゆるは。さてく歎かしきことなり。魔事の即心念佛の流行する處は。諸人用心すべし。又即心念佛の安心決定。此外には。なきことなりと云るれども。三諦の理の明かならぬ人の。思ふたり。覺えたりする。念佛申しの外に。なる程四明は。思を絶し。議を忘れ。能所四縁の相をも忘れて。佛の身相を。絶待に觀する。即心念佛を立玉へり。而るに今の談義は。四明と異にして。たゞ縁影を認て。覺えたり。思ふたりして。口にて念佛申すをさし出し。即心念佛の安心決定。此外になきことなりと云るは。譬へば京商人の。田舎ものに對して。戀相なる新町物を。あてがひ。此はこれ極上なり。此外に

極上はなきことなりと。誑らかすが如し。家裏の小僧を。欺誑するの談義。有識の受取ぬことなり。談曰。末世の要行は。即心念佛なる事。總じて先。往生極樂を求めて。念佛を務むる人は。佛教の大意をよくく知たるにてなければ。安心決定せぬなり。

辨曰。即心念佛安心決定談義本と題して。即心念佛の安心決定を専ら勸めらるゝ談義なるに。其安心決することは。佛教の大意をよくく知たるにてなければ。決定せぬとは。さてくむづかしきこと。此を末世の要行とは。いひ難きなり。よく思ふて見られよ。佛教の大意を知と云は。大底に知ことさへ。無智の輩は。なかくなり難きこと。況やよくく知と云ことは。尋常の人の及ぶ所に非ず。五濁の障り重く。衆生の根鈍なる末世にて。佛教の大意をよくく知たる人は。百千人の中にも稀なるべければ。其餘の知ぬ人は。皆々安心が決定せぬからは。往生も亦決定すまじ

きなり。左様に佛教の大意を。よくく知ねば。安心が決定せず。往生もならぬ。即心念佛ならば。末世の難行とこそ云べけれ。何ぞ之を末世の要行と云るや。四明の妙宗鈔の中にも。佛教の大意を。よくく知たるにてなければ。安心決定せぬと云ことは。曾てこれなきことなり。但し四明の鈔に。左様にの玉へる明文あるや。出さるべし。いか程出したく思はるゝとも。明文なきことなれば。此も亦例の妄料簡なること必定なり。又第二座の談義にむづかしき入くみにてもなし。合點し難きこともなければ。いかなる人も合點ゆくべきなりと云れしが。尼道も。愚夫愚婦をも簡ふことなく。いかなる人もと云るからは。尼入道も愚夫愚婦も佛教の大意を。よくく知て安心決定すると云ことなりや。不審なり。證據より證人なる程に。即今世俗の人々に。かた端より問て見られよ。佛教の大意を。よくく知て。合點したる人は。千萬人の中にも稀なるべし。爾らば即心念佛の安心決定

を勸るとて。いかなる人も合點ゆくべしと云るは。世間の現量に相違して。無智の輩を誑らかす妄談なれば。全く受取難きことなり。但しいかなる人も。合點ゆくべきなりと云れしは。即心念佛の安心を。決定さする談義にてはなしや。如何。即心念佛の安心を。よくく知たるにてなければ。決定せぬとなれば。いかなる人も。佛教の大意を。よくく知て。安心決定すると云ては。現量に相違するを。いか會通せられんや。其會通を分明に承りたし。

談曰。事理の二行は。鳥の兩の翼。車の兩の輪の如くにて。一つもかけては。ならぬものなり。此譬能思ふべし。吾宗の即心念佛は。事に即して理を照し。理に即して事を修するゆへ。鳥の兩翼。車の兩輪の如くにて。自由自在なることなり。末世の愚癡無智。此修行はなるまじきことといへども。左様にてはなし。女にも。男にも。貴にも。賤にも。智慧聰

明なる生れつきの人を、し。能教へ能習ひたらば、なるまじきことにてなし。云云

辨曰。事理の二行を。鳥の兩翼。車の兩輪に譬へられしは。なる程其通り。これ吾宗の意なり。大凡台宗に立る所の念佛に二途あり。一には即心唯心の沙汰なく。たゞ事相本願の口稱念佛。此は十疑論。及び延慶院の淨社等の如し。二には三觀を以て唯心三諦と觀する。理觀の念佛。此は觀經疏鈔等に明す所の如し。かくの如く台宗に事相理觀を雙べ立て。一つも闕ことなきは。正しくこれ鳥の兩翼。車の兩輪と云ものなり。此外に口稱の念佛するの的を。空寂無相と觀じ。或は三諦法界と觀じて事に即して理を觀する人あり。此は事理融即する。理觀の人の念佛にして。理持と云ものなれば。十疑論等にいへる。但事口稱の念佛とは異なるなり。

先年書れし驗非に。實相の觀解に住して。専ら名號を唱る人は。理持の人なり。既に理持なれば。

事の念佛の機にあらず。何とて事の念佛に此機を攝せんやと云れたり。此云分によるに。事に即して理を觀するは。理持の一邊にして。事の念佛の攝に非ること決定せり。

談義本の云分にては。たゞ理觀の一道ばかりを云て。十疑論や。延慶院の淨社の如き。事相の一邊を全く云れねば。兩翼が忽ち一翼となり。兩輪がまた片輪となれば。云るゝが如く。自由自在にはあるべからず。さて末世の愚癡無智。此修行なるまじきことといへども。左様にてはなし。女にも。男にも。貴にも。賤にも。智慧聰明なる生つきを、し。能教へ能習ひたらば。なるまじきことにてなし等と云るゝは。甚だ聞えぬことなり。まづさし當りて疑はしきは。第二座の談義には。むづかしき入くみにてなし。合點し難きこともなければ。いかなる人も。合點ゆくべきことなりと。心易げに云れしが。今になりては。いかなる人もとは。全く云す。智慧聰明なる生れつきの人と。別し

て智慧聰明箇ひ出し。また其智慧聰明ばかりにてはなく。其上に能教へ能習ひたらば。なるまじきことにてなしと云て。直になるとは云す。なるまじきことにてなしと。まだなを未決に云るゝは。ことの外むづかしくして。愚癡無智は。なかゝなりがたく聞えて。前にいかなる人もと云しとは。大に相違するは。何ごとぞや。況や此初に。末世の愚癡無智。此修行はなるまじきことといへども。左様にてはなしとあれば。愚癡無智の。なる程よく修行のなることを。分明に云れては。ならぬ處なるに。その愚癡無智のことは。一言も云す。反て智慧聰明なる生つきの人。なるまじきことにてなしと云て。智慧聰明の人にて。またゝ上手に紛らかざるゝは。何としたる誑らかしぞや。愚癡無智の修行のなることを。一言もえ云れぬからは。末世の愚癡無智。此修行のならぬことは。なる程左様なりと云ものなるに。上に左様にてはなしと云れしは。大なる相違に非ずや。か様に相違とも出るは。根本

談義本の腰が。よくすはらぬ故なり。かゝる談義を聞ん人は。前後の談が相違する程に。恐くは安心決定はせず。談義の座ごとに。安心が迷亂すべきなり。さてその智慧聰明なる人には。法華の龍女や。觀經の章提希。六祖大師や。石鞏禪師。橘皇后。千代野を出されたり。龍女や章提希は。云さらなり。六祖石鞏は。問生の人にして。末世には得難く。橘皇后千代野も。各見識ありて。なみゝの俗女には非ず。か様の人は。千萬人の中にも。まことに少かるべし。而るを智慧聰明なる生れつきの人をほしと云るゝは。何れの處にてか。左様にをほく澤山に。六祖や千代野が如き。智慧聰明なる人を見られたるや。不審なり。特に此は。第五に末世の要行は即心念佛なることと。標する下の談義なるが。五濁の障り重く衆生の根鈍なる末世にて。龍女や。六祖の如く。智慧聰明なる人は。たとひありとも。萬々稀なること。況や智慧聰明なる人ありとも。其聰明なる人に。能教ゆる様な。大器量の師は。猶

以て稀なることなり。か様に稀なる師弟が。たま〜相逢て。能教へ能習はねば。なるまじき即心念佛。ことに佛教の大意を。よく〜知たるにてなければ。其安心が決定せぬことならば。ことの外むづかしく。甚だ合點し難きことなるが故に。此を障り重く根鈍なる。末世の要行とは。さら〜云れぬなり。左様にむづかしく智慧聰明なる人を簡ひ。理觀の一道ばかり云れては。天台の宗教は。今時末世の。愚癡無智の衆生をして。生死を出すの利益は。一向なしと。他宗より難破せば。何とか答へられんや。もと天台四明の祖意に背きたる談義なるが故。か様に種々の過失が出るなり。天台の宗教は。別しては法華經によれども。總じて一代の經説を用ゆれば。其廣博なること。大海の如くにして。理觀事相闕ことなく。智慧聰明なる上々根の人も。其教へを受るに不足なく。理觀を修して。三徳の妙果を證し。愚癡無智なる下々根の人も。其勸めによりて信を起し。佛名を唱へて。九品の蓮臺

に坐す。かくの如く天台の宗教は。普く萬機を利益することなるに。談義本は智慧聰明なる人を簡ひ取て。一道ばかりを勸め。即心念佛を専らとせいで。天台宗になりたる甲斐はなきなりと云て。反て天台の事理具足する兩輪を。忽ち片輪車となし。末世の愚癡無智を運び載て。生死の火宅を出すことのならぬ様にせらるゝは。大に歎息するに堪たること。これ今辨せざることを得ざる所以なり。況や其名は即心念佛と云るれども。其行は四明の如くに。唯心とも。三諦とも觀することなく。たゞ南無阿彌陀佛と念佛申す事なれば。理觀とも事相ともしれぬ。偽作の即心念佛。全く信仰し難き談義本なり。猶此外にも。聞えぬこと共多ければ。辨すべけれども。右大綱の入わけさへ顯はるれば。其餘は例知すべきことと思ふが故に。之を略するものなり。此度辨する所を。談義者が見られたりとも。止訛に見立たる所の。十種の持病ある人なれば。速かに改悔するの心は發らず。反て持病が強く發

即心念佛談義本辨偽 終

て。十方もなきことを云れんと思へども。此方の意は。病人を相手にして。強て諍論せんとは非ず。今度談義本が出て以後。都鄙の道俗幾千萬人。從來の安心を動轉して。信疑の岐に迷ひ。又天台の宗教の。利益普からぬ様になるは。實に歎かしきこと。更に有信の輩の爲法爲人として懇請すれば。やむことを得ずして之を筆記す。此辨に依て。眞偽の分ちを。明かに解得し。眞正に安心決定せんこと。これ予が伏して希ふ所なり。享保十三年戊申季秋下旬慶義瑞法明律院の丈室に於て書す。

享保十三戊申年臘月吉旦

京師 書林

八木八郎兵衛 梓刻
小河久兵衛

(編者云。本書中二字下者。原本割註)

即心念佛安心決定談義本或問

或人の云。客歲秋の初。談義本。彫刻已に成て。四遠に流布すること。去歲の内。已に三千部に垂とす。或は詩を作て讚歎し。或は和歌を詠じて解を呈す。安心決定し。往生疑ひなしと。悦人多。盛なりと謂べし。然に淨土家の僧は。大に憤りて。高座にて辨難し。書を作て破斥す。天台宗も。法明和尚は。書を著て大に貶斥し玉ふ。初學の輩は。是非分難。往往に岐に泣。老和尚。願は。不辭苦勞。一一辨斥して。諸人をして。彌往生の要業を決定せしめ玉へ。余が云く。談義本に付ては。色々の取沙汰を傳聞。淨土家の難は。小僧共に讀せて聽。法明の難破も。同前に聽たり。合點よき淨土宗は。憤りはせまじ。法明の不合點は。今に初めぬことなり。何も辨じ易ことどもなれども。逐一に辨せば。長くなりて。讀人倦べし。たゞ其の肝要を舉て問れよ。問を承て。一一に之を答ん。

或人間。合點よき淨土宗は。憤りはせまじと云は。何としたることにて云や。答。去淨土宗の所化の云。談義本は。淨土宗を難せん爲の。書にてはなし。加様にいひたる分にて。淨土家がいたむことにもなく。苦勞に思ふことにもなしと云ことは。作者も合點なり。作者の當處は。天台宗にてありながら。事の念佛計を弘めて。淨土宗のやうなる人に。當たるものなりと云と。傳聞。此僧は。さても賢僧かな。渡なみの淨土宗の。得云まじきことを云なり。なるほど淨土宗に當らん爲の。書にてはなし。淨土宗。何ぞ必憤らんや。淨土宗の中に。加様に賢ことを云人あれば。淨土宗の中より。即心念佛申人の。出來まじきものにてはなしと。悦なり。然に談義本。又必しも法明上人に。當らんとて。書たるにてはなし。我宗の念佛を弘めて。諸人の勝因を。たゞ起さんが爲なり。其そば杖が。彼人に當たりと見たり。それほどにはあるまじきことなるに。天台宗になりたる。甲斐はなきなりと云を。殊

の外憤りて。譯もなきことどもを。澤山に云る。笑止千萬。序に云なり。去一向宗。去處にて。同宗の俗人に出あひ。物語の序に。近比出たる談義本は。安心決定の爲と云ども。自力のこと計を述て。他力のこととは曾て云す。わけの立ぬ書なりと云。獨の俗漢。乍通じて云。それは。其元の不合點と思はる。吾一向宗や。淨土宗の談義本ならば。他力の事を云はひでは。叶はぬことなり。然に彼書は。天台宗の念佛の安心を。示せるなり。天台宗の念佛は。自力に他力を兼たり。一向。淨土とは違へり。吾宗の安心にあわぬとて。彼書をわけもなしと難するは。無理なりと云ば。一向の僧。驚ける色ありと語。とかく。書を見たの。書を見ぬのと云にはよらず。かしこき人が。かしこきことを。云ものなり。

天台宗の心は。自力に他力を兼たるなれども。自力も他力も。局執すれば過なり。局執せねば。自力も他力も。相兼たるも。皆勝益ありと談す。淨

土家には。沙汰せぬことなり。此旨骨目抄の驗非に記置けり。

或問。去俗人。念佛同行の人に語て云るは。我ら如の者。最初から。天台大師などの。申させ玉ふ様なる。即心念佛を。勤めんと云やうに。心得るゆへ。即心念佛の安心が。決定せぬなり。只先面々相應の。即心念佛を勤んと。思がよき筈なり。その即心念佛と云は。別のことはなし。談義本にこれある通。吾等が妄心が。即偏法界の體なれば。淨土も。彌陀も。吾一心を不離と信じて。ひたと左様に思て。念佛申が。即心念佛なりと云。此云分。尤なりや。答。なるほど尤なり。即心念佛の安心に淺あり。深あり。暗あり。明なるありと。書置し處に。相かなひたる云分なり。吾書置し處は又。藕益の。上上根人終不能踰其闕。下下根人亦可以臻其闕と。云るにかなへり。藕益の心。上上根の人も。即心念佛の間の内を出ず。下下根の人も。即心念佛の間の内に入るゝとなり。まことに。唯心の彌

陀と云ことを。信ずることは。下下根の人も。なることなり。然に。法明上人は。下下根の人は。即心念佛ならぬことと云る。俗人の見解よりは。劣たることなり。されば。荆溪尊者。道中天眞。而謝俗子とて。出家の歴々が。俗人の見解に不及との玉へり。法明上人は。天眞獨秀とは。云れねども。出家の身にて。俗人の見解に劣られたり。六祖大師曰。下下人有上上智。上上人有沒意智と。下下の人とても。即心念佛なるまじきものにてはなきなり。尤打ても。たゞひても。動がぬやうなる。至愚至暗の人も。なるほど多かるべけれど。左様の人は。事の念佛の安心とても。とくと得合點は。せまじきなり。

或問。談義本と云は。言ばいやしと難する人あり。又談義本の中。かなづかひあしきことありと。難する人あり。此こと如何。答。なるほど此等は。去田舎の僧申こされたることなり。其返書略して之を出さん。一其元御案内のことに候へども。道理は御合點參

べしと存。申入候。此方牡丹に。山姥と名付置候花御座候。初心なる牡丹すきは。常格に泥んで。此花は。重ねがうすひの。形儀がわるひの。花びらにしわがあるのと難し申候。功者なる人は。山姥と云ふ名を合點して。大輪にて。色よく。實。蕊よきゆへ。一體の上花とほめ申候。重ねがうすひ。形儀がわるひ。しわがあると申人には。拙禱は。それゆへ。山姥なりと申候。此譬よく御合點なさるべく候。諸事に通じ。初心。功者の位。分ること。知申候。一談義本。理にとがはなければども。言ばいやしとのこと。これは。佛意に叶はぬ論なり。依義不依語は。佛敎の正意にてはござなく候や。さて又舌で物をあじをふ。をの假名は。わなるべしとのこと。成程尤。其筈なり。あじのじも誤りなり。あちなり。然ども。本かなづかひには。色々様々のむづかしきことあり。本かなの譯。御存候は。こればかり。御とがめはあるまじきことに候。談義本の中には。加様のこと。大分これあるべきことなり。拙僧

の合點は。談義本と名付るより。片假名書にて候ゆへ。かなづかひの吟味。曾て仕す候。且又。昔の人の云るは。明魏法師は。既にかなもじづかひをやぶりて。イ。井。ヲ。オ。エ。エの類皆ひとつに書べしと云りと。今度の談義本は。明魏法師風の。猶じだらくなるものと。思召候へば。埒明申候。又善導の發願經。順俗すぎて聞とのこと。總じて本文章には。俗語を用ず。詩には。俗語あり。定ることなり。語録は。儒者のも。佛者のも。皆俗語を嫌はず。就中禪錄は。俗語だらけなり。然ば。談義本。片假名書にて。俗語だらけなれば。俗語のとがめは。鈍なることなり。發願經のこと。經の字には。通別あり。通じては。經。律。論。皆經と云なり。世間には。茶經あり。碁經あり。發願文を。經と名付るが。何ぞ必ずしも俗ならん。經の字は。佛語とばかり心得は。初心なることなり。

或問。世間に沙汰するは。旁觀記の時は。法然上人を。殊の外讚歎し。此度は以の外推し下すは前後相違と

云。此難。如何が通せらるべきや。答。世間の人が。多は學問が難。人の書たるものを。得と明めぬゆへ。云ことなり。旁觀記と。談義本と。相替ことは。なきなり。此度も善導法然の勤めの事の念佛は。大慈大悲より。末世の劣機に逗せんが爲。段々と念佛を。ひきく説なし玉へりと云り。此程明に大に讚歎したること。はなきに。推下とは。何として云や。善導。法然は。佛風の働と云に非や。旁觀記は。一枚起請を談ずる。邪説を辨じて。上人の本位を。顯せるなり。談義本は。事の念佛より。理の念佛の勝たることを談ずるなり。それを法然上人を。推下と云様に心得るは。筋道の分ぬ。變き云分なり。法華經の意。三乗の法は。本一佛乘より分別し玉へり。其三乗が。皆一佛乘に歸すと。説玉ひたれば。小乗と一乗とは。一體無二なり。然ども。佛小機の爲に。小乗を説玉ふ。其當分を沙汰するときは。同法華經に。小乗をば。塵芥を除。除糞之器に。譬玉へり。此をよく。心得られよ。事持。理持。本一體な

れども。理持を嫌て。事持計を勤る人は。除糞之器に。譬ても。苦かるまじきなり。此れわる口に非ず。法華經の意を述るなり。但念佛の法門は。小乘にてはなきゆへ。變相なる除糞之器とは。云べからず。上々の棕欄等。蒔繪の塵取位なるべし。即心念佛の。七寶の大車とは。同日の論に非ざることなり。

或問云。事の念佛計にて。往生したるは。宿習なきゆへ。悟かねて。ぐづぐづべし。其人が。即心念佛の人の。早悟を見ては。けなりく思べしと。書たるは。龍舒居士の。大阿彌陀經に依りたりや。答云。大阿彌陀經は。見ざるなり。或人の云く。大阿彌陀經云。佛言。十方無央數世界。諸天人民。比丘僧。比丘尼。優婆塞。優婆夷。往生阿彌陀佛刹者。群衆大會於七寶池中。人人各坐一大蓮華之上。自陳前世所持經戒。所作善法。所從來生本末。其所好法。及所得淺深。與智慧多寡。從上次下。轉相言之。其人若不豫作諸善。不明經理。於此應對。自然促迫。其心慚悔。悔亦無

及。但慷慨發憤。慕及等夷と。余笑て云。之を見ずして書當たるは。結句手柄にて候。

或問。法明和尚の辨偽は。吾等底の。至極初心なる者は。能聞たることと思はる。但し聞ぬことにて候や。若聞ぬことならば。一一返答して。初學の疑網を裂玉へ。答。法明の學問。邪解邪觀なること。往年より。委細に辨することなり。近年は。學問あがりたるかと。思へども一圓あがらず。相かわらぬ。邪解ともなり。心底は。段々とわるくなりたるやうに思ふ。總じて。彼人は。もの覺えよくて。因縁物語を。澤山に覺られたる計にて。肝要のことは。知れぬことが多。精細の議論は分ず。明ならず。深妙の道理は。曾て知れず。見識は曾てなきなり。末にて一一指示さん。老極。草臥甚しきゆへ。往年の如。委細に破斥することはなるまじ。彼要を取。略して之を破さん。何程破しても。彼人は。心服せられまじきこと。知たれども。先師の教觀の正旨。漸々に行はれて。台家の學問。漸々に盛なるに。

彼人。台宗にて先師の弟子と。思はれながら。色々の邪解異説を。云述て。教觀の正旨を亂し。初學を惑さるゝゆへ。法の爲。人の爲。口業を惜まず。書付さす。辨僞に云。其題號を見るに。即心念佛安心決定談義本とあれば。さてもながくとして。をかきし題號かなと。ながくとして。可笑しきとあれば。此方の序に。談義本の名いとをかきしとあり。田舎の僧の。談義本。ことばいやしと云るとは。ちがひて。ながき題號が。をかしと云ことなり。ながきがをかしくば。大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經。此の題號は。此方の題號より。九字ながき程に。定て呵呵大笑せらるべし。さて又。大方廣曼殊室利童眞菩薩華嚴本教讚闍曼德迦忿怒王眞言阿毘遮嚩迦儀軌品。此は。三十三字の長銘なるほどに。猶以て腹をかへらるべし。加様の題號甚多。それを笑れば。謗法の罪過彌天ならん。

辨僞二十七紙。此方の云分。談義本の序の中のことなれば。こゝに出す。に云。此念佛のこと。

拙僧も。勤め得たりとは思れねば。いかでか。人人をして。深く信得せしむることを得んやと云るゝが。これ眞實語なるべし。かの清堂の。吾さへ得と會得せぬと。いへるは。其筈なり。爾ば。いかなる人も。難き事なく。合點ゆく様なる。即心念佛は。決して。四明の弘め玉ふ所に非ず。此云分。彼人計にてはなし。世上にても。此ことを難する人ありと聞。變き學問者は何方も同ことと。見へたり。此は。佛教の大綱。儒者の大筋を。曾て知ぬ人の云分なり。珍からず。佛學廣と云ども。解行の二つの外にはなし。儒者には。知行と云なり。解に依て行を起し。行を以て解を相續すれば。解行は一徹なれども。又解と行とは。大にわかる所あり。行は。段々之有ゆへ。勤め得たりと云こと。なるものにてはなし。

事の念佛者にても。自勤め得たりと云人は。末代には有兼べし。若しあらば。愚癡の至りか。増上慢かならん。

解は。頓にも極るものなる故。餘り人に譲るものにてはなき也。それゆへ。談義本の序に。此念佛のこと。拙僧も勤得たりと思す。此念佛の安心は。暗からぬやうに思と。書たり。孔子の曰。十室之邑。必有忠信如丘者焉。不如丘之好學也と。至極の小里にも。孔子の如く。忠信なる人は。必之有ん。孔子の如。學問を好む人はあるまじと。の玉ふなり。此即忠信は。行なり。徳なり。それゆへ。孔子卑下口を。の玉ふ。學問は。知解の方なれば。譲りはせいで。自慢口の様なることをの玉へるなり。然ば。拙僧が序に云處は。能儒佛の大筋を。心得たる者なりと。讚歎にも預べき所を。結句破斥を。加らるゝは。顛倒せることなり。又法明の書やうは。念佛の勤の行と。安心の解の方とを。一向わかたぬ。文旨なる云分なり。安心起行。解行。教行は。佛教の肝要なることなるに。曾て知れねば。前に肝要なることは。知れずと書たるが。先づ加様のことなり。辨僞に此談義は大に妙宗の文意に背たる妄談なり○

四明の妙觀法に違背せり。此二紙餘の辨に。はやさまくの不合點。妄辨。妄料簡。手のわるき轉計。わけの聞へぬ書様。自分の指合になることどもまで。之有。此一段を委細に破さば。此段計を破しても。彼人の曾てものゝ合點ゆかず。文旨なること。顯るべし。先妙宗の序の。適時之巧○即心念佛とあるを。引たるをば。彼文の講釋の様に覺て。文の上下の照應のこを以て。難せらる。ものゝ合點の。曾てゆかぬことなり。總じて。禪家には。經論などの。一句一言を取出して。本則として。工夫し。拈提することあり。一章一篇の。講釋とは違へり。儒者は又。古書の一句一言を切出して題とし。文を著すことあり。經義などの體なり。此又。一章一段の。連綿せる講釋には非。我今。妙宗の序の文を取出して。一會の談義の題目とするなり。妙宗の序。一篇の講釋には非ざるなり。なにとて。一篇の講釋の様に取成て。上下の文の照應を以て。難せらるゝや。筋の違たることにて。妄辨なるに非や。

其上。前後照應の云分が。甚譯もなきことなり。孤山等の。多事相の觀を示さるゝを。適時之巧との玉へるものなりとのこと。甚譯もなき云分なり。劣機の爲に。淺觀を示計を。巧と云べきやうはなきなり。惣物と云言も。一人一機を憐を。云ことにてはなし。物我と反對に用るときは。我外はみな物なれば。惣物と云は甚廣。巧と云は。巧拙と反對に用れば。人のしにくがることを。見事に能くするを巧と云なり。劣機に對して。淺法を示す計は。今時の人もなることなり。四明何ぞ非我所能との玉ふべきや。

四明。我能する所に非ずとの玉ふは。孤山杯は。佛菩薩風をしたるものなり。われは。それはならぬと仰せらるゝなり。此乃四明の心は。孤山などは。能く機を鑑る佛菩薩風が。なると見へて。下凡の縁種を露さるゝと。仰らるゝ心なり。

然ば物を感と云言も。智巧なと云言も。皆廣ことなるゆへ。拙僧は。佛や大菩薩のことなりと云なり。かく

申てこそ。上下の文意が。能相契ことなれ。又安樂行品の疏の心や。金鐘論の心にも。相契ことなれ。其上。四明約心觀佛とも。の玉はず。即心觀佛とも。の玉はず。即心念佛との玉へる心。彼人など。夢にも知れずと見たり。觀佛と云は。事觀でも。理觀でも。觀念にかざりて狭。念佛と云は。口稱にも通じ。觀念にも通じて。廣こと。淨土家にも。天台家にも。能人の知たる事なり。狭き觀念の言を出さず。廣き念佛の言を用玉へるは。譯あることなり。願共有情とて。法界の諸有情と共に。願玉ふゆへ。觀念にも通じ。口稱にも通じたる言を出して。上根も。下根も共に往生の勝業を。成せしめんが爲なり。余は。其中の即心稱名念佛の方を取て。今時の台徒の劣機に。淨業を勸るなり。談義本の始終是なり。さて即心念佛との玉はねば。かなはぬ譯あり。觀佛にては。妙宗の中にも。もるゝ所あり。止觀の般舟三昧の行相が。すまぬなり。又念佛會の疏の心にも背くなり。又境觀要門にも。背處あり。末にて出べし。それゆ

へ。狭き觀佛の言を用す。通じたる念佛の言を。出玉へり。彼人の夢にも知れぬ事なり。尤念佛會の疏は勿論。止觀も。妙宗も。見らるべけれど。心觀道の上になき人なれば。視而不見なり。可憐。妙宗に。もるゝ所ありと云は。下品下生の十念は。口稱なり。それを。四明料簡して。此人は。乘急戒緩の人なるゆへ。曾て修する觀佛三昧。一心三觀の定心が發して。十念成就して。往生すと。の玉へり。具なる文。鈔下四十番より書き出すに及ず。此即一心三觀の定心に住して。稱名するゆへ。談義本に云る。即心念佛に非して何ぞや。觀佛と云ば。下品下生の十念が漏るゆへ。念佛と云て。此機までも。收玉へり。止觀の般舟三昧の行相が。すますと云は。妙宗鈔に。若此觀門。及般舟三昧。託彼安養依正之境。用微妙觀。專就彌陀。顯眞佛體。雖託彼境。須知依正。同居一心とありて。觀經と。般舟三昧とは。同一ことなり。然に般舟三昧は。輔行に。一自心三昧所見佛。二西方從因感果佛。今具含二義。共

爲一境とて。兩佛を境として。一心三觀を修すれども。其内には。口稱もあり。因て止觀に。九十日口常唱阿彌陀佛名無休息。九十日心常念阿彌陀佛無休息。或唱念俱運。或先念後唱。或先唱後念。唱念相繼。無休息時とありて。九十日口に名號を稱るなり。般舟の稱名は。兩種の佛を。心に念じて。其名號を唱るゆへ。彌陀を所觀の境にして。能念所念。能稱所稱。皆三諦法界と照なり。此豈吾所謂即心念佛に非ずや。談義本の始終。皆此心なり。佛身を境として。三觀を修する人。其行法の内に唱る所の念佛に。三諦三觀の觀を忘べき様はなき事なり。若し忘と云ば。圓解の開けたる人。九十日の間。善導。法然風の事の念佛を申と云べしや。若然と云ば。荆溪。四行莫非皆緣實相と釋し。天台大師。方法各異。理觀則同と示し玉ふに。大に違背するなり。殊に荆溪尊者は。常行觀佛三十二相等と釋して。口稱念佛を等じ。四明は般舟の三觀。歷念佛事と云て。心念。口稱に通ずる。念佛の言を用玉た

り。分明なるに非や。加様の譯。夢にも知れぬゆへ。何やらしれぬ念佛と誘ふ。我を誘には非。天台。荆溪。四明杯を誘らるゝなり。可怖可怖。念佛會の疏の心に背と云は。彼人も云るゝ通。彼は萬人講の稱名念佛なり。然に彼疏に云。原夫一念本融。諸法無礙。遇熏既異。感報成差。是以順性而修。則顯諸佛淨土。隨情而作。則循五趣苦輪。○若欲生彼。但當稱彼佛號。修彼佛慈と。此明に。即心念佛を示玉へり。因て起頭に。一念本融。諸法無礙との玉ふは。妙宗所謂。法界圓融。不思議體。作我一念之心。亦復舉體作生。作佛。作依。作正。作根。作境。一心。一塵。至一極微。無非法界全體而作と云る心なり。即心念佛の根本なり。又順性而修。則顯諸佛淨土とあるは。妙宗に所謂。據乎心性。觀彼依正。可彰。託彼依正。觀於心性。心性易發とある心なり。觀經の約心觀佛の心を。稱名念佛。萬人講の疏に述玉へるは。談義本に所謂。即心念佛を示玉ふに非や。又但當稱彼佛號。修

彼佛慈と。佛慈とは。觀經に所謂。以觀佛身故。亦見

復見。又見と云す。亦見とある。亦の字味べし。天台は。即見と釋し玉へり。亦と即と。文字は替ども。畢竟同一ことになるゆへなり。味ある文字なれば。註するなり。

佛心。佛心者。大慈悲是とあるなり。此大慈悲を。天台は。生緣。法緣。無緣の三種を以て。釋し玉へり。四明は。既三種慈。體是三諦と釋せられたり。然ば。三諦の慈を修して。彼佛號を唱るは。談義本に所謂。即心念佛に非して。何ぞや。

彼佛。彼佛と云。彼の字に。心をつくすべし。想を西方に送て。彼佛を念じ。彼佛の名號を稱し。三諦法界の理を照すが。即心念佛なり。

如此稱名念佛に付て。一心三觀を修る方までも收めん爲。四明。約心觀佛と云す。即心念佛との玉へり。分明なる事を。自分にえ合點せられざるゆへ。人の云こと

までも疑て。謗法の罪を造らるゝなり。念佛會の疏の跋を書たる青山樓居士は。俗人なれども。文學ありて。賢ゆへ。能四明の心を知て云。四明法智大老。起天台大教於既墜之後。使人見性成佛。猶且以此化人。是知此深法門。爲不可廢明矣と云り。四明の即心念佛を。達磨の直指人心。見性成佛と同一ことと思ひ。且又此を以て。萬人を化すと云り。奇特なることなり。俗人は。能四明の心を知ども。彼人は。台宗ながら。出家ながら。四明の書を見ても。四明の心を知ぬなり。あさましきことなり。

若然ば。達磨の禪意と。天台の教意とは。同一ことなりや。若同と云は。先師の平生の所談と。違べしと云難あらん。此譯は。予二師禪論に記置り。二師は妙立藕益なり。

萬人講のことは。猶又末にて云べし。分註に。虎溪境觀要門には。即心觀佛。亦名約心觀佛と云りと。此は自分の指合になることを云れたり。先年。數年の

間の往復に。境觀要門を。自分の證據に引たることはなし。今こゝに引れば。指合が出来るなり。彼人の立義は。約心觀佛は。一途の内觀。内觀と云は。妙境妙觀なりと云る。然に御信仰の境觀要門には。觀之一字。是能觀の觀。心佛二字。是所觀境とありて。心佛の二字は。妄境なりと云に。灼然として相違す。今時は。初心の學者と云へども。彼の人の立義を。曾て受取らず。最負偏頗の人は。各別。不可思議一心三觀を以て末々多。是分明なる轉計なり。墮負なり。彼人先年は。一觀にして三觀なる。不思議の三觀と。唯一心の三觀とを。各別といわる。之に依て。先年此方より。止觀の第五の。中論所說不可思議一心三觀の文を引て。難じたり。それに心服せられたりと見て。終に云れぬ。不可思議の一心三觀と云言を。出されたり。予今年七十八に成て。甚老耄したれども。加様のことは。仕馴たることゆへ。ちよつと聞ても。ちよつと見ても。明に氣が付なり。此は老耄せぬと云様なる口ぶり。見る人

笑玉ふな。談義本の偽作なること顯然なり。彼人の書るゝことは。加様のことにて。殊の外見にくく。骨が折るなり。思案すれば。推量がなれども。言の上とは違へり。辨偽と云題號。何としたる義理ぞと。不審に思ふに。序に偽觀の大綱を辨すと書れたり。偽觀と云文字は。見馴ぬ文字ゆへ。此でも辨偽の題號。合點ゆかず。この偽作の二字を見ては。なをく不審なり。末に至りて。初て辨偽の題號が。推察せられたり。今この。談義本の偽作なること顯然なりと云言は。談義本。其偽作なることと。聞るなり。偽作の二字は。あり來れる文字にて。佛の名を借て作れるを。偽經と云ひ。其外の人の名を借て作れるを。偽書の。偽作には非。別人の書る。偽作なりと。聞るなり。加様の譯もなきことを書るゝは。文義の譯。曾て合點せられぬゆへなり。然ばいか様に書て。然べきや。彼人の偽作と書れば。せめてなるべし。談義本のと云ば。偽作

の二字が。書物へかゝるゆへ。紛るゝなり。彼人と云は。偽作の二字が。人にかゝるゆへ。せめてものことになるなり。入ぬことを云様に。思入あるべけれども。初學の學問の爲に書き記すなり。況や淨土も彌陀も。妙觀法に違背せり。此段書様のわるき事もあれども略して云ず。口稱ばかりを境とすと云ことは。此方の心に非ざること。前にて知たれば。略す。辨偽に云。此をよく心得より外に。偽作なることを辨するなり。此段。譯もなき合點。無理妄難なり。此方は。此をよく心得と云しを。合點せず。めつたにわるく。文旨に心得て。難せらるゝなり。此方の。淨土も。彌陀も。即ち我心なりと知て。念佛申て。往生を求が。即心念佛なりと云。その心は。如何なるものと。思るゝや。心の性は。三諦法界にてはなしや。三諦法界を知て。念佛申が。即心念佛に非して。何ぞや。若吾言を云たらぬと難せば。四明尊者の言にも難あり。妙宗に。而觀依正不離心性。故曰心觀と。の玉へり。一心

三諦のことを云すして。不離心性。故曰心觀と計りの玉ふは。大に非なりと。云べしや。妙宗の前後に。三諦三觀のこと。多ありと云れば。吾談義本にも。一心が三諦なりと云ことは。いかほどもあることなり。總じて。彼人は。言句計に取付て。得意忘言することは。曾てならぬなり。それゆへ。人の得意らしき言をば。一圓合點せず。結句難せらるゝなり。談義本の補助記に。中論因緣所生法。一句道盡無剩語の頌を出せり。此心などは。彼人は。一圓合點せず。因緣所生法と云所に。どこに三諦がある。どこに三觀がある。因緣所生法の次にこそ。三諦の名は出たれと。云ねばかなわぬなり。ちと道理の合點のいた人は。大に笑べきことなり。さて彼人は。彌陀の身相を。三諦法界と觀するが。約心觀佛。即心念佛なり。口に申念佛の外なりと。云るゝは。妄分別の至なり。旭師は。執持名號に付て。事持。理持を立られたり。其理持は。正しく即心念佛なり。天台は。普門品の一心稱名を。事理の一心

を以て。釋し玉へり。其理の一心は。即心念觀音なり。申唱る外のことにてはなし。なにとて申外に。即心念佛ありと云るゝや。談義本に。證據出處を明に出して置ども。得合點せずして。妄難をせらる。四明と別段に。私に拵てと云るゝこと。無理非道なる難なり。此方は。四明の即心念佛の言を。觀念と計は心得ず。一定の通。念佛の言は。心念。口稱に通するゆへ。口稱の邊を取て。一會の談義となすなり。委しく前に云しが。如し。自分に念佛の言の。心念口稱に通することを。打忘て。紛らかすと云るゝなり。それは彼人の紛れ分別なり。此方に預ぬことなり。談義本の偽作なることを辨するなり。わけの聞ぬ書やうを又出さる。辨偽にさて上に。即心念佛を○決してなるまじきなり。此段は。なにとしたるわけもなきことを云るゝや。諦觀を云ず。觀せずして。南無阿彌陀佛と念佛申を。即心念佛と云ことは。此方には曾て云ず。それは誰の立義なるや。此方に云ぬことゆへ。其明文を出す

ことは、申さるゝ通り、決してならぬなり。談義本に、亦約心念佛

念佛の念の字。談義本に、觀とあるは、筆誤なり。今改めて念の字に作。即心とも云。約心とも云ことは、境觀要門の如。觀の字。筆誤なることは、旁觀記。台宗綱要にて、知ることなり。彼の兩書に、觀佛にも、事理あり。稱名にも、事理あることを、記置ばなり。

とも云。亦理持とも云なりと擧て置て。やがてつひひて。即心念佛は、唯心法界を知て、念佛申を。即心念佛と云なりと云すがたを。具さに記せり。然に次下に云ることをば。かまわず。上に標し擧たる分計を取て。難せらるゝは、百題自在坊風の難なり。可笑可憐。辨偽に又四明尊者は○大にそむくなり。此三紙計。又妄辨。妄論。文旨揃なり。大意は前に辨せし處にて。知たれども。又そこゝを破斥すべし。吾云通なれば。四明は事の念佛は。勸玉はぬやうに聞れども。天

台の心。事理の二行を立がゆへに。事の念佛を捨には非と云るゝは。相符極成の過なり。此方に。事の念佛を捨と云ことは。曾て云ぬなり。談義本に。持名念佛に付ても。理持の念佛。事持の念佛。其品分たりと書り。見られざるか。其少次に。吾天台宗の貴む所と云は。事の念佛。理の念佛あれども。吾宗の正意は。理持即心と云ことなり。なにと見て。わけもなきことを云かけらるゝや。此觀經の上にての玉へるなり。此は。前に辨する所にて知たれば。略す。心妙觀を明さぬ○勸玉へるなり。此云分開ぬことなれども。略す。自の爲にも他の爲にもとのこと。四明の。自利の爲の。事持口稱の念佛。あるまじきことなり。若ありといは。圓解を御失念成さるゝか。四明の結念佛會疏のこと。此に付ての云分は。文旨千萬なることなり。即心の理觀のことは。一句も云ず。たゞ事相口稱の念佛を。勸玉へりと云るゝは。顛倒迷妄の至なり。明に。即心念佛を勸玉へるなり。其義は。前に云る

が如。能ものを。思て見られよ。天台教觀中興の師が。萬人會を結で。年々念佛會を行玉ふに。教觀の心を忘玉ひて。すむものなりや。教行録の頓て下にある。放生文を見るに。四明尊者は。水族飛禽の魚鳥にさへ。一體三寶。甚深妙法を授玉ひて。即汝心性。不遠而復汝等應當深信此理。而歸向之と。の玉へり。穢跡金剛威神力にて。魚鳥も妙法を聞得べし。魚鳥にさへ。即心三諦理を。説かけ玉ふ四明が。信心ある萬人念佛中に。即心三諦理を。説し玉ふまじき様は。決してなきことなり。大津。坂本の行翁行婆。學問はせまじけれども。生付賢人は。多るべし。天台の念佛會に預て。即心念佛の妙理を聽聞はせず。法然流の。事の念佛計を聽聞するは。本意なきことなり。四明の時分の魚鳥にだも。しかざるにて。殘多ことなり。さて疏の文の。若欲生彼。但當稱彼佛號。修佛慈と云文を引て。理觀のことは。一言も云ずと云るゝは。なにとしたることぞや。盲たる人は。目の前にある物も。

見へぬゆへ。なしと云なり。明に之有理觀を。なしと云るゝは。學問の目の。曾て是へぬなり。前に云し通。修彼佛慈とは。佛の三慈悲にて。三諦法界なり。三諦法界は。諸佛の所證。衆生の本源なり。何とて。理觀のこと。一句もなしと云るゝや。修彼佛慈と云が。三諦を修することにてなくば。修彼佛慈と云は。何ごとを云るや。其相。明に述べられよ。修彼の修の字は。疏の初に之有。順性而修の修の字にて。一念本融の三諦を。修觀することなり。上下の文相照して。佛名を唱て。三觀を修する相。明なれば。吾所謂。即心念佛に非し。何ぞや。但の字を能見られよ○彼土に往生す。彼人。文字學問。一向不埒なること。昔より今に同ことなり。此云分にては。但の字が。顛倒なり。當但とあるべきことなり。尤加様の言。當の字の上にあることあれども。今彼人の見様にては。顛倒なり。譯文などしたる人は。初心なる人も。合點の行ことなり。去ども。今但の字が上にある譯は。初心なる人は。ちとす

みにくかるべきか。初心の人の思惟の爲なれば。其譯云す。

加様に云を。文字に精き人が。見たらば。それほどのことにてはなきにと。笑べけれども。

復次に具如經說○必定なり。此はめつたなる料簡なり。具如經說と云は。慥に觀經なり。皆觀經の文なればなり。彼佛本願と云言に因て。無量壽經と云るれども。觀經にも。本法藏比丘。願力所成とあり。又然彼如來。宿願力故と云文あり。本願とどこが違や。攝取の言は。無量壽經の。念佛往生第十八の願には。結句なきなり。彼經の攝取の言は。行や。法のことを云て。攝取衆生の言にてはなきなり。觀經の大慈悲是のついきには。以無緣慈。攝諸衆生とあり。ちと上には。念佛衆生。攝取不捨とあり。捨此報身等の言は。觀經に。捨身他世等とあり。又稱彼佛號の言は。觀經の下品上生。下品下生にあり。此程明に。觀經の文なるに。無量壽經を指と云るゝは。妄料簡に非や。賀山にて

○大に背なり。此段。前にて聞たれども。又處々難するなり。四明の舊式に依て。蓮社を結。他宗の義を用るに非と云るれども。四明の舊式は。前に云通。明なる即心念佛の勸なり。彼人は。毎度の談義に。法然流の事の念佛を。讚歎稱揚せらると。度々聞し人が語るなり。依るゝ所と。勸らるゝ處とか。水火氷炭。大に替れり。四明の疏の文の前書に。發菩提心の言。兩處にまで見たり。四明の正旨なり。法然上人は。菩提心を。雜行とし。菩提心は抑念佛の玉へり。大に違るに非や。菩提心の相を。念佛會の疏の。一紙前にのせたる。授菩薩戒儀の文に云。現前諸人。今日既已得戒。當須發起度生之心。○今依圓教無作四諦。以發道心。此道心者。即與十力諸佛。及一切衆生之心。等無有異。故華嚴云。如心佛亦爾。如佛衆生然。心佛及衆生。是三無差別。若知此心即是佛心。亦即衆生之心。則事理不二。生佛一如。三諦天然。微妙寂絕。依此發心。是名真正。違茲立願。願不名普。故天台云。發心

僻越。萬行徒施是也との玉へり。四明の念佛會に依れば。發菩提心を。勸られひでは。かなわぬなり。四明發菩提心を。勸らるれば。申念佛が。自即心念佛になるなり。復楊文公玉ふ書に。一心三觀を明畢。立一切行。以此觀導達之との玉へり。まことに。授戒にも。放生し玉ふにも。念佛講中にも。皆一心三觀を。勸玉ふは說所の如く行ひ玉ふなり。三觀を以。一切の行を導との玉ふは。天台大師。導師菩薩を釋し玉ふ。疏の文の心なり。曰。三觀妙智。導一切行とあり。因て慈雲。指要鈔の序に。四明傳教導師禮公と書たるは。此心もあるべきか。四明に依と云ながら。四明の本意に昧して。事の念佛計。弘らるゝは。誠に天台宗になりたる甲斐はなきなり。尤四明も。事の念佛を。勸玉ふこともあるべし。

融心解に云。儻有一機未能圓照。且隨事相。歷境而觀と。觀想既爾。持名亦然らん。

先師も。平生自行化他。即心念佛なれども。至極愚癡

の輩には。事の念佛を。勸られたり。拙衲など。只今も。至極愚癡無智の人には。事の念佛を勸るなり。四明。先師。皆隨他意の心にて。本意には非。止ことを得られざればなり。さて彼人は。四明平生の思召入や。先師の思入を。合點せられぬゆへ。いらぬ骨折をし。わけもなきことどもを。云るゝなり。四明與崇矩法師書に。吾於餘事不能挂心。只慮教觀。無人而墜との玉へり。四教三觀の外のことば。四明は。心に掛玉はぬとあれば。教觀の沙汰に及ぬ。愚癡無智の事の念佛のことなどをば。少も思召ことにてはなし。一心三觀の妙宗を。弘る人無ことを。殊の外なげき思召たり。感涙を浮ることなり。先師の歌に。しめをきし。いはねをほゆる。ねざめにも。のりをぞをしむ。我しなばととと。讀たり。

先師の歌は。拙衲が詩文ぐらひのことなるべければ。歌の功者なる衆が。見たまはば。うすすり歌より。あらしき歌なりと。笑わるべけれども。思

ひ入ば。殊勝なるべし。此様なる歌を。歌と思ひて。取用るか。此體にては。佛教のことも。さぞあらかるべしと。思玉ふべきかと恐て。云なり。

此又。尼入道の事の念佛のことなれば。京にも。田舎にも。野にも。山にも。充滿て行ることなれば。をしみ玉ふべき様は。なきことなり。性具性惡。即心念佛の妙法を。弘る人無ことを。深くをしみなげかれたるなり。彼人。台宗にて。先師の弟子と思。戒をも受。ゆがみなりに講釋などもする程の人が。四明。先師の思入を。曾て知す。念佛會を結で。行翁行婆に。法然流の念佛を勸るを。結構なることに思。因縁物語計に。心を留らるゝは。天台宗になりたる甲斐はなきにてはなしや。彼人は。何程云ても。合點せられまじ。智慧あり。志ある人は。能合點せらるべし。四明尊者。即心念佛の一道を勸玉ふ心は。慈雲の放生慈濟法門にも。見へたり。曰。淨名雖云不觀人根。不應說法。法華則云。但以大乘。而爲解說。令得一切種智。涅槃。唯

以一藥。偏治衆病。金光明爲魚。說甚深十二因緣。而得記別。調達地獄受決。龍女畜生成佛。豈是權小之力乎と。具に斷に及す。初學能く合點し玉へ。辨偽に又宋朝の慈雲大師○此二のものを擇。此三紙計。慈雲の心を。曾て知られぬ云分なり。慈雲の示し。事の念佛には非と云にてはなけれども。譯ある事なり。先示人念佛方法と云。題號に大に不審あることなれども。彼人などは。曾て氣が付ぬと見へたり。佛菩薩より。列祖の言句。聖默然。聖說法。人に示にあらぬことはなきなり。孔子。吾無行而不與二三子者と。宋儒注して曰。聖人作止語默。無非教也とあれは。世教すらかくの如。況佛法をや。況又方法と云が。人の示にてあるまじき様はなし。然にわきに見當ぬ。示人の二人を加玉ふは。何ごとぞや。此を心得べき様は。總じて一切に亘る教なれば。示人の二字を。加ことはいらぬなり。別して。一類一縁

文句二十五に。別爲一縁。作如此說とある。一縁

の意なり。

の爲に。示玉ふ方法なれば。示人の二字を加玉ふなり。慈雲の本意には非るなり。慈雲の本意は。即心念佛なり。又慈雲の心からは。事の念佛の方法が。即直に即心念佛の方法になるなり。かくの如云は。私の料簡に非。行願二門の中に。明に見たり。上に一心法界。心具心造の圓理を談じて。下に。如此則方了。迴神憶利。實生乎自己心中。孕質九蓮。豈逃乎剎那際内。○信此圓談。則事無不達。事が即理なること。知たり昧斯至理。則觸類皆迷。故華嚴經云。心如工畫師。造種種五陰。一切世間中。無不從心造。如心佛亦爾。如佛衆生然。心佛及衆生。是三無差別と。の玉へり。即心念佛の心分明なり。然に下に至て。問。如上所明。妙理圓極。爲世人盡須觀行。然始生耶。答。此不然也。今但直決疑情。令知淨土百寶莊嚴。九品因果。並在衆生介爾心中。理性具足。方得今日往生事用。隨願自然。是則旁羅十方。不離當念。往來法界。正協唯心。免信

常流。執此非彼と云問答は。事の念佛にても。往生すと云問答なり。談義本に。淨土宗の事の念佛も。往生せぬにはあらず。此方よりは。事の念佛も。即心念佛を離れずと知るゆへに。事の念佛をも。眞實心に申人を見。隨喜讚歎すべしと。書置るは。此心なり。初學能思明らめられよ。如是なれば。慈雲の心は。事の念佛が。本意にてはなし。又慈雲の心よりは。事の念佛が。即理の念佛になるなり。加様の譯。彼人は。曾て知れず。四明。慈雲。念佛とさへの玉へば。事の念佛のことと計り思はる。あさましき。見解なり。

辨偽に又第七座末○然べきなり。此段。前に辨する處にて。聞たり。兎角。彼人は。四明の念佛會の疏を。事の念佛と見誤。慈雲の本意を。曾て知られぬ故に。云るゝことが。皆大に非なり。又四明。慈雲が。彼人の如。愚夫愚婦を集て。事の念佛計を。弘玉は。成程天台宗の祖師とは。曾て云れぬことなり。四明。慈雲の連枝は。天台教觀中興の祖師なるゆへ。機に逗し。時

に應じて、事の念佛を説示さるゝ事ありとも。それは。兩師の至極緒餘土直猶曰座垢糞なり。内外境觀の分にさへ暗して重々山外に似たることをいひ。此は。無慚愧の至なり。わるき分別なり。様子を知らぬ人に聞せんとのことなるべけれども。様子を能く知たる人は。大に見かざるべし。先年往復最後に。二千酬を著て。二百難を一一委細に。會通しふせて。其上に。二百難の時まで。墮負して。得口を開れぬことを。九十餘條まで。指付て見せたれども。一言も會通を。得出されずして。此度。加様のことを云る。慚愧を知る心は。微塵もなし。笑止千萬。

辨偽に四明慈雲の意。談義なるかな。此三紙計。餘り替たる事はなし。其内。心觀爲宗の。修心妙觀のとあるは。別して此觀經の觀法を。釋し玉ふが故なりとのこと。心觀爲宗は。なるほど觀經のことなれども。心觀の二字。修心妙觀の四字は。通したる言なり。今家の一心三觀は。源仁王。瓔珞。中論。智論に出て。慧

文。南岳。天台と相承し來り玉へり。何ぞたゞ觀經計に付てのことならん。可笑云分かな。事理の二行。本經説に出とのこと。此は。總じて一切の事理の二行を指か。念佛の事理の二行か。念佛の事理ならば。四明は。其理持の一筋を。自行化他にせんと。願玉へるに非や。天台の口稱念佛も。止觀の般舟三昧に出玉へるは。皆緣實相。理觀則同の。即心念佛なること。前に出る通なり。さて十疑論のこと。兎角。彼人は。文句計に取つひて。心を得ぬ學問なり。十疑論の通は。念佛の事の方を。述玉へるものなり。それを。圓人か修すれば。即即心念佛になるなり。彼論の第二。諸法無生の疑の答は。見れぬか。談義本の第四座の。往生無生の心に非や。談義本。能く十疑論の心に契たるに。十疑論を貴で。其心を述たる談義本を。破るゝは。法には依ずして。人計を論せらるゝゆへ。佛の教に背きたる妄料簡なり。嗚呼。天台の宗教盛に富るかな。淨土之教。至于天台。其説大に備と古人の稱歎せるは。正

しく此が爲なり。此又。自在坊風のこと。官僧の小僧衆の。論議法門風のことなり。淨土指歸を書出して。見せたらば。心熟し面赤かるべし。彼書に云。歴代諸師。著述淨土傳。記淨業之文。無非祖聖遺語。淺深工拙。片言隻字。同歸於善。天台智者大師。悟法華三昧。説己心所行。曰一心三觀。直示一心。當處即空。全體即假。亦空亦有。非空非有。不可湊泊。不容擬議。心路絕處。即名爲佛。故淨土之教。至于天台。其説大備。昭昭猶揭日月。而耀太虛也。これを見られよ。歴代の諸師の淨土の教は。工拙あり。天台計が。一心三觀を以。淨土の法を修するゆへ。淨土之教。至于天台。其説大備と云なり。尼入道をも。もらさぬゆへ。其説大備と云にては。曾てなきなり。尼入道も。愚夫愚婦も。並に漏すことなき。宗教の廣大なることを。至極愚癡無智の尼入道は。もれても。少もかまわざるなり。滋賀のあたりにて。大綱を引を。舊く見られざるか。聞れざるか。鯉鮒。網に留るをこそ取。だんぎ

ぼうなどの。にげていぬるは。少もかまわぬなり。去ども世間に。談義ぼう賣と云ものあれば。漏るを取人もあるなり。其人は獨身の。その日すぎの。あさましきしよざいなり。彼人念佛會の勸は。談義ぼう賣の様なることなり。佛教を魚を取に喩るは。勿體なき様なれども。天台大師は。敷入教網。亘法界海。懼其有漏と。釋し玉へり。荆溪は。華嚴經を引て。張佛教網。亘法界海。漚天人魚。置涅槃岸との玉へり。辨偽に又古へ覺超僧都慧心の○と云こと炳然なり。此段も。餘り辨すべき事はなし。其内。慧心の僧都のことは。末にて云べし。繪詞傳のことは。受取れぬことなり。總じて。彼傳は。先頃少々讀て聞たるに。笑止なること多。法然上人の道德を。顯さんとして。書たる傳なるが。結句法然上人の。威光のさがることどもがあるなり。彼時分の。叡山の學問は。殊の外衰へて。譯もなかりしことどもなり。淨土宗の眼ある人。學問の能き人が。刪定せられたらば。然べし。根本慧心の勸

に任すとのこと。稱名念佛。慧心の初て立玉ふにてはなきに。此は。法然上人。いなことをの玉へるなり。辨偽に又西教寺の開山○信受せんや。此段。相違せることどもなり。先真盛上人は。中興開山にてこそあれ。西教寺の開山は。慈慧大師なり。真盛上人のことは。色々のことども。之有なり。余が著はせる西教寺中興開山真盛上人傳論草堂雜錄第三に載に。記すが如。真盛上人の念佛は。隨他意の邊にて。至極愚癡の輩には。事の念佛を。勸玉ふ事あるべし。上人の本意。自行の勤は。決定して。即心念佛なるべし。因て傳論末に。上人既宗智者。博涉羣籍。則豈不欲念佛據於心性。持律依於佛制乎と。いへり

真盛の戒律のことは。彼時分のことなれば。餘り如法にはなきなるべし。今又思に。淨土院にて。傳教大師の夢の告を蒙。慧心の往生要集にて。自利利他すべしとのことなれば。上人の勤。即心念佛なること。決定なるべし。其故は。先

傳教大師が。日本の即心念佛申の。元祖なり。されば。止觀業の人に。四種三昧を。修練せよと。定玉ふからは。御自分にも。四種三昧を。行玉ひたるなるべし。其常行三昧は。九十日。口常唱阿彌陀佛名るなり。法相の權執を。破し玉ふにも。南無阿彌陀佛と。の玉へり。この大師の念佛。豈即心にあらざらんや。其故は。大師は。自既に一心三觀。傳於一言と。の玉へり。唐陸淳は。總萬法於一心。了衆塗於三觀と。歎じたり。如實知自心を以因とする密教を傳へ玉ひ。直指人心の達磨の一派は。本朝にては。行表に傳。大唐にては。脩然に傳へ玉へり。此大師。唱玉ふ所の念佛。即心念佛に非してなになるべきや。慈覺大師は又。密教の大宗師にて。引聲の念佛を。傳來し玉へり。禪宗は。蕭慶中に傳玉へり。御臨終には。移慈容房。念阿彌陀佛。令諸門人同唱玉へり。此兩大師の念佛。皆即心念佛なること明なり。古の大師達は。今時の人の。一心三觀。直指人心などの。名目を覺たる計なるとは。大に違て。

平生明なることなれば。稱益所謂。將平日觀心得力處。融入持經念佛の人にして。任運自然に融入し玉ふなり。慈慧大師の念佛は。猶以て明らかに即心念佛なり。因て御辭世の頌に云。身在病床。心在如。世無遺恨。室無儲。既知此界因緣盡。但念西方不念餘と。入滅なさるゝ程の。重き御病氣なれども。現前の一。念。修惡全性惡。妄即眞と達し玉ふ觀念を。忘れ玉はざるゆへ。心在如と。の玉へり。此觀念に住して。西方彌陀を念じて。入滅し玉へり。依て釋書には。正月三日。唱彌陀而滅とあり。檀那の先徳の作かと云。大師傳には。口念彌陀。心觀實相とあり。南禪寺の景芭の撰せる。大師の傳には。口唱彌陀。心觀實相とあり。即心念佛なること。明かなるに非ずや。慧心の先徳は。慈慧大師四人の上足の中の。第一なり。弘玉ふ所の念佛。慈慧大師と同じく。即心念佛なること。決定なり。

其外。本朝の大師達。皆即心念佛を。修し玉ふな

るべし。

然れば。往生要集に。事の邊を述べ玉ふ事は。他宗と同じことなれども。觀想。稱名の本意は。理觀。理持なること。文にも明かに見へたり。されば。彼集の中に。法然上人の。殊の外きらひなる菩提心を。勸め玉へり。其菩提心に。緣事。緣理あり。緣理の發心を。勝れたりとし玉へり。第二の三十九紙 又有相の廻向。無相の廻向の中には。無相の廻向を。勝れたりとし玉へり。三十九紙 大て往生の要業は。法然上人の意と。格別に違ひて。大菩提心。護三業。深信至誠念佛。隨願決定生極樂と。の玉ひ。又往生之業。念佛爲本。其念佛心。必須如理。故具深信至誠常念三事と。の玉へり。深心と云は。今家の意は深し。四明は。起信論の正念眞如を以て。釋し玉へり。如此理觀。理持を。貴み玉へる往生要集を。事の念佛を。正意とするやうに。心得るは。妄料簡の至なり。上に云所の如なれば。真盛上人は。傳教。慈覺。慈慧。慧心の御心を能く知て。即心念佛

を。弘め玉ひしこと決定なるべし。特に慈慧大師は。彼寺の開山なり。豈彼大師の心に。順せざらんや。眞盛上人が。眞盛上人でなくば。それは格別のことなり。今時の眞盛派の人の。即心念佛を。得弘めぬは。彼人の先師の弟子と思て。居ながら。先師一生の心要たる。即心念佛を。得弘められぬたぐひなるべし。天台律宗。此は。世間人の云ことなれども。彼人などの。云べき言にてはなし。無識なることを。云はるゝなり。輕きことの様なれども。大に譯あることなり。初學の爲書記したけれども。長くなるゆへ略す。辨僞に又先年〇笑止なることならずや。此段の云分。他宗も云よし聞たり。譯もなき難なり。余平生。彼人の學問は勿論。總じて世間の學問が。多くは甚疊くて。氣の毒なりと嘆は。加様のことにても。知たることなり。台宗綱要

此書は。先年去る御方に代て。書たれば。拙衲が作に非ずとも。云れぬなり。

に云所は。事持の勤め様が。善導法然と。かわらぬと云なり。そののみならず。十萬億土の外に。實に極樂あり。彌陀の本願ゆへ。念佛すれば。必ず往生すと云。事の邊は。淨土家と相替すと。度々初學の爲に。談せしことなり。さて綱要には。理持事持の勝劣を。今度の様に云しことは。曾てなきなり。又四明の御願を。述たることも。曾てなきなり。事持の勤め様計を。述たるを以て。今の談義本を難せらるゝは。聞ぬことなり。今の談義本は。四明の御言に依れり。四明既に觀想には。事觀あり。持名には。事持あり。理持あることを。能く知り玉ひて。吾は其中の理觀。理持の一筋を。弘めんとの御願なり。

それゆへ。前に云し通。觀佛の局りたる言を用ず。念佛の通じたる言を。出し玉へるなり。問。下の鈔の即心念佛の言も。通じたる言なりや。答。なるほど然。故以心佛同體。名心是佛。觀生彼果。名心作佛。とあるは。疏の文を釋するなり。それ

ゆへ。觀生彼果と云は。疏の文の觀佛の言を。受たるゆへ。觀と云なり。意在即心念佛。及令慕果修因。故有此釋と。此三句は。疏の文の意を示すなり。それ故。意在と云。及令と云なり。文を釋するにてはなく。文の意を示す故。觀佛と云す。念佛と云。廣言を出玉へり。慕果修因と云も。廣言なり。下にある句が廣ゆへ。上にある即心念佛も。廣言なること。決定なり。初學能く曉られよ。

其理持即心念佛の趣を。行翁行婆までに。合點させん爲の。談義本なり。然ば。事持の一通を。述たる計の綱要を以て。四明の言に依れる。今の談義本を難するは。無理なる難なり。疊き論なり。さて事持に付ては。其勤めやうは。善導。法然と。相替ねども。台家の事持と云に付ては。又替る處あり。扱又。台家の事持と。即心念佛の至て淺きと。不同あることなり。人のまがひやすきことなれば。末にて記すべし。

辨僞に即心念佛の根本は〇即心念佛なり。此段も。前に辨せし處にて聞へたれども。又ちと難するなり。何の處にか。佛の名を唱るとあるやとのこと。下品上生。下品下生。二處に慥にあるを。無とは。何として云るゝや。根本の經文には。無と云れば。根本にあることとは。末に通じ。一處にあることは。諸處に通ずること。定れることなり。本にあることは。末に通せず。一處にあることは。諸處に通せずと。思はるゝは。文盲千萬なることなり。觀佛と云が。根本一處に限たることならば。天台はなにとして。此經心觀爲宗と。の玉ふや。像觀の下計にて。此段は心觀爲宗と。の玉ふべきことなり。左はなくて。此經との玉ふは。始終が皆心觀なるゆへなり。それゆへ。四明は。下品下生の人も。心觀に住して。稱名すと定め玉へり。水の中より火を出すとのこと。左様の神通妙用は。此方にはなけれども。即心念佛の明文は。妙宗鈔。止觀の常行三昧。四明の念佛會の疏。先づ三處まで出したたり。此にて

堪忍せられよ。此下の經文にと云より。妄想の即心念佛なる事。決定なりと云までの一紙計。入もせぬこと。人の能く知りたることを。長々と云る。彼人のわるきくせなり。其内に聞へぬ言もあれども。略して難せず。經文や。四明の如と云より。且く其通なれどもに至るまでの云分は。觀佛は。愚癡無智なりにくし。理持の念佛は。なりやすしと云心なり。理持の念佛も。傳教。慈覺。慈慧。慧心。四明。慈雲などの如。深く明かに勤ることは。甚難きことなり。暗くとも淺くとも。即心念佛を申ことは。志によりて。なるまじきものには非すと云。談義本の心なり。これほど簡別したるを。始終に一言も云ずとは。なにとして云るゝや。無理妄難なり。

辨偽に有問云○受取ことはならぬなり。此一段の分注。彼人の。生付の云分とは。云ながら。譯もなき云様。少し天台學問をしたる人は。大に笑ふべきことどもなり。此段を見て。得笑わぬ人には。委く云たりと

も。得合點せぬこともあるべけれども。止ことを得ず。繼増云なり。心作心是の文は。談義者のにげ口に云れんと思。文なればとのこと。譯もなき。思様なり。此文は。談義本の第一座に出して。即心念佛の根本幢に押立て云ることなり。何とて。にげ口に云べしと云るや。いらぬ言とがめの様なれども。譯もなきことを云て。無智人を。誑かざるゝゆへ。難するなり。義偏初後と云ふ斷りを云ぬを。答めらるゝは。何ぞとぞや。妙宗鈔を。度々講釋し。境觀要門を。度々講釋したり。兩書を。見たり。聞たりしたる人は。斷を待ぬ事なり。四明。虎溪の。能斷りて置玉ひたる上に。何の斷りを云ことが。入ものなりや。さて又。四明は。斷りをの玉ふが。天台大師は。何とて。何の斷りもなく。最初に。此經心觀爲宗との玉ふや。兎角。彼人は。文句に計取付て。心を得ることの。曾てならぬ學問。文旨なることなり。淨土境觀要門は。境觀要門なるゆへ。心作心是の觀法を。專に述たる書なるが。其書の分注

に。入道場の法を示て云。初入道場。當存想三寶。心生懇惻。默發願云。我與法界衆生。諸佛菩薩。性體不二。但我與衆生在迷。諸佛菩薩已悟。我今普爲法界衆生。求生安養淨土。入是道場。誦誦經文。稱念佛號とあり。心作心是。義遍初後義を示して。道場に入て。佛號を稱念する人が。心作心是の觀を。忘るべきやうはなきことなり。特に我と衆生と。諸佛菩薩と。性體不二なりと思て。佛名を稱すとあり。即心念佛。彼書にも明かなり。初學能く思玉へ。念佛申の上にも。徧通すと云には非ずとのこと。然らば。何として。四明は。下品下生。一心三觀の定心が發して。稱名すと。釋し玉ふや。具に前に云が如。佛と我心と。相替すと思は。思議分別。絶せずとのこと。前々より。觀道のこととは。一向不埒なること。それゆへ加様のことを云るゝなり。末にて具に云べし。

辨偽に此趣も天台四明の○笑止なることなり。此段の云分。兎角觀道のこと。一向不合點ゆへ。云るゝ

ことなり。其内初めより實に稀なるべしと云までの云分は。委く云に及ばず。一句道盡無剩語と。云やうの。得意の氣味を。合點したる人は。大に笑べき云分なり。此心の合點の行ぬ人は。彼人の如。得合點せまじければ。云ぬなり。その内たゞ南無阿彌陀佛と念佛○重々明し玉ふがゆへにとのこと。持名と觀佛とを。一にして云はる。それでは外にある筈なり。此方に此外に無と云は。なにほど深き持名にても。彌陀の依正我心を離すと知る外にはなし。我心は三諦法界なるゆへなり。叡岳にてはと云より下は。前に出して。辨じたることなり。

辨偽にさて此意を忘すして○行者者なりと。此二紙の云分。さてもく。驚き入たることどもかな。少し教觀の譯を。知たる人が。見たらば。腹をかゝゆべきことどもなり。觀道の譯。曾て知られぬゆへ。云ることが。不埒不詰。狐付や。醉狂人の云やうなる。ことどもなり。いまだ桶の底のぬけぬ。悠々の愚輩との

こと。此は、何を指て。底がぬけぬと云るゝや。解を指すか。證を指すか。證ならば。愚輩の段ではなし。四明。天台。南岳なども。まだ得と。桶の底がぬけぬなり。解を指て云れば。解には。段々

禪家にも。大悟一十八徧。小悟不計其數と。云ことあり。中峯和尚は。余特信解耳との玉へり。あるゆへに。淺き解は。行翁行婆の上にも。あるまじきものに非ず。解に付ても。工夫提撕して。合點すると。書を見たり。講釋を聞たりして。解し得るとの違ひは。あるべし。

藕益の云る。境の上に練得ると。看書時解し得との。氣味なり。

千代野などは。工夫して會得せる人なり。賢き行翁行婆は。談義本を見ても。唯心淨土の桶の底のぬけまじきものにもなきなり。彼人は。自分の愚癡を定規にして。人にあるまじと。思ふゝなり。大に四明の心に背けり。融心解に云。又問曰。觀法若然。誰堪修證。如

其不修。何由生彼。是則往生路絶。徒仰當機。於今何益。答曰。人之根性。皆由宿熏。成熟不時。對至能發。己尙難測。他安可評。須信能修。不專佛世。仍知昧旨。豈猶今人。韋提請宣。本爲來世。佛知有益。故使流通。爾自放逸不修。勿罔能修之者。とありて。我身も。人の身も。因緣宿熏。知ぬことなれば。即心念佛なるべからずと。我身を見かざるべからず。又往生要集^二の云。問。凡夫不堪勤修。何處發弘願耶。答。設不堪勤修。猶須發悲願。其益無量。如前後明^三とあり。四明と同じ様なる。思召入なり。二師は。兎角なり。にくきことなりとも。隨分勤めよとの教なり。彼人は。なりににくきことはをいて。法然流計を。勤めよと云る。天台宗の心入にてはなし。天台宗になられたる。甲斐はなきにてはなしや。さて能思所思の相も忘れずとのこと。此又不埒なる云分なり。證位を云へば。四明。天台も。忘れ玉はぬなり。解の方より云ば。談義本を見たる行翁行婆は。能思も法界。所思も法界

と忘るべし。胸中にもやつく。周徧法界とのこと。此は何ごとぞや。談義本を。曾て見ぬ人の云やうなることなり。談義本には。我等が心は。身の内にあるやうに。思はるれども。身の内にあるやうに。思はるゝものは。縁影と云ものにて。本の心には非ず。本の心は。色もなく。形もなく。周徧法界とて。どこがかぎり。どこがはてと云こともなく。いつ始る。いつ終ると云こともなきものなるゆへと。書置けり。此を見ては。少し賢き人は。胸中にもやつく周徧法界とは。曾て思まじ。唯心の縁影のこと。此言は聞へまじと。疑者もあれども。聞へはするなり。徧計執。亦依圓成而起など云意を。合點すれば。彼人の言も。聞ゆる方あるなり。去ども。彼人の合點の行ことにてなければ。たゞ言のみあつて。其實議なきなるべし。然に此縁影を忘るゝことは。天台。四明もならぬなり。唯識論の中に。加行位の相を云として。現前立少物。謂是唯識性。と。加様の唯識家のことも。彼人。殊の外不案内な

るほどに。曾て合點は行まじ。他宗にても〇なるまじきなり。此分注。前に云所にて知れたれば。辨するに及ばず。不思して思。無念觀念なりとのこと。此又分れぬ心より。云るゝことなり。證位を指して云ば。愚輩計にてはなし。天台。四明も。ならぬなり。教より云。理より論すれば。愚輩の念佛も。無念の念なり。尼入道が。合點してこそ。無念の念なるべけれど。云るべきか。合點させん爲の。談義本なり。生れ付き賢き人は。淺きか深きか。合點すべきことなり。兎角彼人は。一心三觀は。佛智なるゆへに。初心より。絶待の妙觀を修すと云。一通計を覺て。住前觀智。皆名爲情^{光明玄記}上^{百十八}と云。一通を。夢にも知られぬゆへ。譯の聞へぬことを。云るゝなり。右の二筋の融會は。一家の學者の。能く明めずして。叶ぬことなれども。彼人は。曾て知られず。知られたらば。云るべけれども。知られぬ故。云れぬなり。吾昔初學の爲に。問。四明云。初心能離佛之所離。以一心三觀。即佛智故。又云。住

前觀智。皆名爲情。初住已上。證理名智。初心觀智。若實是情。何名佛智。若又佛智。因何爲情。二語相反。云何融會と云て。自此答を作置り。草堂雜錄の四載さて又。彼人は。緣影のこと。少し聞きはつりたる計にて。云るれども。得と得合點せられぬなり。緣影のことは。藕益専ら唱へ玉ひて。大に學者の爲になることなり。因て先師に。拙訳度々尋聞けり。五度や。七度と云ことはなきなり。それゆへ。人の緣影のことを。談ずるを聞ては。其是非明かに知るなり。書き付け置けこともあるほどに。末に出すことも。あるべし。四明妙宗鈔にと云より。莊嚴も殊勝なれと云まで。知れたること。出すに及ばぬことなり。初心より。絶待の妙觀を修すと云。一通なり。初住已上より見れば。情の一心三觀にて。緣影を離れぬことなり。又絶待の妙觀と云は。初住已上に限ることなり。されども。六即六絶なるゆへ。情の上にも。絶待の觀と云ること。理即までも。通するなり。然ば。行翁行婆の上にも。無念の

念佛と云こと。云れぬことにはなきなり。止觀の第三十九の若爾絶待。乃是聖境。初心無分と疑て。今以六即望之。初心無所失。聖境無所濫と。釋せられたり。此譯明め置かすして。叶ぬことなり。今四明のと云より。未までの云分は。四明の即心念佛との玉ふを。觀佛と計心得られたる。妄料簡の云分なり。辨偽に又初座の談義に〇明かに知べし。此二紙半計。又聞へぬことどもなり。前にも云し通。四明の即心念佛と云廣き言を。觀念と計心得られたる。大なる誤。大なる無理なり。持名の即心念佛なる證據。前に段々出したり。阿彌陀經より出たる。理持の念佛のこと。此自言相違なり。前には。無量壽經や。阿彌陀經等に依ては。事相口稱の念佛を。自の爲にも。他の爲にも。勤め勸め玉へるといはれたり。今は。阿彌陀經より出たる。理持の念佛申すことをといはる。豈分明なる。自言相違に非ずや。又無理なり。經には。但執持名號と計ありて。必理持とも見へぬを。理持と極めら

るは。無理なり。事持理持を釋するは。藕益の料簡にてこそあれ。此即天台の普門品の疏より。見出されたることなり。天台宗の理持とは。念佛するの的を。三諦法界と觀すとのこと。的の字の顯す所。能念の心を觀すと。云る義なり。甚無理なり。天台理持の釋文を。出さるれども。一心を釋する所計を出して。稱名を釋する下を。出されぬは。又自在坊風なり。稱名の下には。能稱所稱。皆不可得とあり。何但能念の心計を。觀せんや。

談義本は。三諦とも。無相空寂とも云す。我心を離すと知ると計あるゆへに。理持とは。云れずと云るは。又談義本を見ぬ様なる。云様なり。我心が。即無相空寂なり。三諦法界なりと云こと。前後に明かに書き置けるに非ずや。何とて。得と見ずして。妄難をせらるゝや。妙立和尚歌を出して。此理の一心と云ること。又そこつの至なり。此歌の前書に。如何なるか。理の一心不亂と問れ侍りてとあり。事持。理持と。事

の一心不亂。理の一心不亂とは。藕益の心。違あること。先師能く合點のことなり。今の歌は。理の一心不亂なるゆへ。心をばと。讀玉へり。理持とは違へり。麤き云分かな。爾ば周徧法界やと云より。末の云分。教觀のこと曾て知られぬ譯。前に云通にて知れたれば。重て難せず。緣影のことは。末にて書きともあるべし。

辨偽に又旁觀記には〇云難きなり。此段。前の云分に相違したる。譯もなきことを云る。旁觀記の如。念々に此理を照して。念佛申すとは云す。此度は。只念佛申すとばかりなればと。云るは。大なる自言相違なり。彼人前に。此方の云分を擧て。云るは。此意を忘れずして。念佛申につけて。此意を思ひ。此意を思ふて。念佛申すが即心念佛なりと。談せらるると。云れたり。此云分が。念々に照にてなくて。何と云べきや。又此方の云。賤のをだまきの言を。擧られたり。賤のをだまきは。たゞ一返にて。くりかへさぬ。ものなりや。

談義本。旁觀記の心と。相替ぬを。相違と云るゝは。無理妄難なり。

辨偽に又台宗綱要に○理持なるかな。此段。前と同氣味にて。無理なり。此度の様に。我心を離れずと知てと。知解するばかりにてと。云るゝは。不合點なり。我心の體は。何と思ふゝや。三諦法界にてはなしや。何ぞ台宗綱要と。相替べきや。然に意は替らねども。云様の譯は替るなり。總じて。世間の文章や詩に。色々の體あり。色々の格あることなり。初心なる人は。其文章。其文章の。體を知らず。其詩其詩の。格を知らず。格を取違。體を混濫して。功者なる人に。笑はるゝこと多。物の本の註の體あり。講釋の體あり。談義の體あること。知れたることなり。台宗綱要は。常途の假名書の體なり。談義本は。談義の體なり。綱要は。學者の爲にする書様なり。談義本は。即心念佛の深妙なる法門を。何とぞ行翁行婆にも。合點させたとしと思て。書付るゆへ談義の風なり。此故に。綱要と談義本

と。義理は同一ことにて。云様は替ることなり。此譯知らず。文旨なる難をせらるゝなり。但尼入道の。得と合點せぬ。即心念佛。餘益なしと云。疑あるべきかなれども。同居の淨土よりも。方便の淨土は勝れ。方便の淨土よりも。實報淨土は勝れたること。學問したる人でなければ。合點の行ぬことなるに。淨土宗や。一向宗は。凡夫の泥足にて。實報淨土へ。ふみこむことは。彌陀の本願故なりと云ば。尼入道。殊外有難がりて。感涙をこぼすなり。即心念佛と云は。本性の彌陀。唯心の淨土なれば。往生すること慥にして。微塵も疑なし。佛になることも。殊の外早くて。少しもぐづゝかぬ。結構至極なる念佛と云を。天台宗の尼入道が聞ひては。大に難有がるべきことなり。今まで聞馴れぬことなれば。當分は。左ほどには思まじきか。後々聞きなれたらば。淨土一向の實報淨土より。猶難有思べし。

辨偽に有問云○不出來なり。此分注。道理に係ぬこ

となれば。辨せぬなり。

辨偽に此談義の中に○見ゆるなり。此段。十方もなきことを。云るゝなり。我心を離れずと知るは。開解なるが。知て申念佛は。三諦にてはなしや。三諦を照すは。三觀にてはなしや。何とて。觀行に非すと云るゝや。談義本に引ける補助記の二紙。旭師の所持之佛名○無非一心三觀と。此心を露計なりとも知らるれば。こゝのやうなる。十方も無き妄難は。せられぬ筈なり。辨偽に又此に此理を○全く合點せぬことなり。此段又。此方心を。得合點せず。十方も無ことを。云るゝなり。南無阿彌陀佛と申所に。一心三觀があきらかなり。此は。上々の即心念佛なりと云と。此も。此方の心を。得合點せず。胡椒丸吞にして。云るゝことなり。念佛の所に。一心三觀明かなりと云ことは。深旨なることゆへ。補助記に。竹菴の頌を引置けり。加様の譯夢にも合點せられぬゆへ。云るゝ妄難なり。台家の人。能く合點したる人が多ければ。其譯今云ぬなり。

四明の觀佛とは。同じからすと。此は。何ごとぞや。理持と觀佛とは。同じからぬ筈なり。我心を離れずと知り覺へて。念佛申が。淺く暗き下根の人なりと云意とのこと。此又。此方の心を合點せられぬ。云分なり。藕益は。上上根人。終不能踰其闕。下下根人。亦可以臻其闕と。の玉へり。我心を離れずと知るは。下下根より。上上根に通することなり。さて此は。大切なることなるほどに。初學能く聞き玉へ。我心を離れずと云を。淺きことと計心得るは。彼人などの如。言句計を覺へて。心を得合點せぬ人の。云ことなり。其故。談義本の中に。阿彌陀經の要解を引て。其に付て。弟子の成時の評を引けり。學者須從者裏死盡儻心。不可草草と。尤なること。人のうわばしりする處なれば。警策したるなりと云り。十萬億土も。我心を離れずと云を。天台學者は。目馴耳馴たることゆへ。別の事もなひことと思ゆへ。成時。計校卜度の儻心を死して。深く合點せよと。の玉へり。唐人ほどありて。きめ所を。

きめたるなり。誠に心中の縁影は。心に非ず。妄心でも。本心は。無相空寂にして。豎に究め。横に徧したるゆへ。十萬億土も。我心を離すと云。一言の所には。無始以來の。大迷暗を。頓に破することなり。彼人。輕々しく思ふは。文盲ゆへなり。巴郡居士。非眼劉道開が楞嚴の貫攝に。阿難の。心は身の中にありと。計せらるゝを。佛破。汝言覺了能知之心。住在身内。無有是處との玉ふを。歎じて云。只此一破。有縁者。即當驚悟絶倒。非佛妙典。何常聞於他書有說。心不在身中者乎。奇哉。真獅子吼也と云り。俗士なれども。唐人なるゆへに。よく氣を付たり。如此なれば。我心を離すと云一言が。初より終りに至て。甚深微妙の道理なり。四明の佛の身相に託し云云。此又。理持と觀佛とを。混じて云るゝ妄難なり。根本の觀經にも曾てなくと。此又。言句に計り取付きたる妄分別なり。心作心是の義は。觀佛にも通じ。持名にも通じ。理即より。分證。究竟に通することなり。持名に通ず

ることは。前に談せるが如。六即到通ずるは。止觀に。圓觀諸法。皆云六即到と云り。心作心是。豈六即到の心なからんや。譯もなき。天台宗の料簡かな。加様の義は。禪宗にも云ことなり。中峯和尚云。只如僧問馬祖。如何是佛。祖云。即心是佛。此箇公案。雖不曾參禪者。亦皆領會得過。及乎叩其極致。則久參宿學。亦少有不錯會者。即心是佛。是心是佛此同。初心より後心に通すること。禪者も亦云所なり。兎角彼人。觀道のことは。一向目が見へぬなり。中峯の語を。能く見られよ。如何なる人も。合點の行ことが。如何なる人も。深く明かには。合點得せぬものなり。彼人。如何なる人も合點の行く念佛は。四明の即心念佛には。あるべからずと。度々云るゝは。物の合點の行ぬ心から。云るゝことなり。

辨偽に又此談義通○破するが如し。此段。勿體なきことを。云るゝになるなり。談義本の如は。事理の二行を具足する。天台宗の心に背くとのこと。此難は。拙訳は指し置て。四明を難せらるべきことなり。天台家の心は。事理の二行あるに。何とて四明。即心念佛の理觀理持計を。願ひ玉ふやと。破せらるべきことなり。勿體なきことになると云は。此なり。十疑論。念佛會の疏は。彼人の大なる見誤なること。前に辨するが如し。

く思ふゝと見へてと云より下三紙計。譯もなき云分なり。兎角。人の云ことを。得合點せずして。人が紛らかすと云るゝは。彼人などの。自願る心曾て無きゆへ。めつたに躰き心根が。あらわるゝなり。彼人など。一切經論に於て。一文一句も。紛れたることはなし。能くあきらめたりと。思ふゝや。若左様に思れば。大増上慢ならん。能心中をさがして。見られよ。一切經論に。紛れたることも多く。得合點せられぬことも。甚多かるべし。然ば。諸佛菩薩は。紛らが上手にて。能く紛らかし玉ふや。諸佛菩薩。紛らかし玉ふにはあらぬども。此方の智慧が甚暗くて。紛れたり。合點の行ぬことがあるなり。拙訳が紛らかすにはあらず。彼人などの。我でに紛れらるゝなり。いか様なる者に。合難ゆかぬや。其者を承りたしと。此は。尋ねらるゝにも及ばぬこと。初座の談義の時の伏疑を。述るゆへ。即心念佛の談義を。まだとくと聞かぬ人にて候。又彼人の如。即心念佛の談義を聞ても。こゝろ觀

道に無きゆへ。聽而不聞人にて候。又我等底の合點のゆかぬ者とは。いかなる人もと云るゝ所の。人の内には。入ぬものなりやと。此談義を聞かぬ人なれば。内にてはなし。此談義を聞けば。成程内に入ものにて候。かくの如く能く分ても。我合點の行ぬまゝに。又紛らかすと。云るべし。合點のゆかぬことも。度々聞けば。後には合點ゆくものなり等と云を。疑はるゝ何ごとぞや。合點が行ぬと云を受て。合點すれば。疑人の云通。能く合點したる人は。成程左様の功德もあるなりと。云心なり。能く見へたることを。何とて紛らかすと。云るゝや。兎角。談義本は。即心念佛を。合點せんが爲なるゆへ。能く合點せよと云ことを。專に勸るなり。合點すれば。廣大の功德あるゆへなり。又合點せひでも。即心念佛の名を聞ても。大功德あるべしと。涅槃の四依品を引て。談義本に書置き。況や即心念佛の安心。淺くとも暗くとも。決定せば。決定往生疑なく。功德深く難有かるべしと。書置けり。加

様の處を見ても。得合點せず。譯もなきことを。長々しく云る。

辨偽にまづ此即心念佛の申様○思れぬなり。此段。又相替らず。譯もなきことなり。先其内。初より心を付て見るべしまでの云分は。前に云し通。念佛の言は。觀佛と違て。心觀にも。口稱にも。通ずることを。知られぬか。忘れられたるか。それ故の妄難なること前にも云し通なり。さて即心念佛の行者の。腰のすへ様と云より下の云分。さても。驚き入たる難さかな。少し儒學したる人が。見たらば。大に胡盧すべし。四端の心あるべきことは。下百姓に至るまで。同じことと云る。其は。生れ付て。持たる邊のことなり。四端の擴充する心のある人は。歴々にさへ。ありかぬることなり。況や末々をや。若下々まで。四端擴充の心掛あらば。盗人。かたりも少く。親子。兄弟の諍論も甚少なく。男女性別於塗。塗不拾遺様にあるべきに。盜。かたり。親子。兄弟の公事。諍論多。不行儀。不

律儀多きは。四端擴充の心掛。曾て無ゆへなり。四端を生れ付て持たる邊と。擴充の力を用る邊と。大に異なるに。曾て知られぬ故。譯もなきことを云る。一向合點なきゆへ。人の書置きたるを見ても。得合點せられぬなり。談義本には。此心を。推し立て推しひろめ。此念を失なわす。そだて守るが。念佛申の手前。腰のするやうなりと。書置きしは。四端を。をしひろめて。人の心を。そだて守る方を。念比に云たるなり。根本合點なきゆへ。拙術が言が。目に見えぬなり。補助記に引置ける。藕益の。若不從眞儒下手處下手。則學道無基とあるも。根本合點せられぬゆへ。見られても。見へぬと見へたり。誠者。天之道也。思誠者。人之道也なるゆへ。誠を立て。四端ををしひろむるが。儒者の極めて肝要なることなり。佛者より云ば。五常と五戒とは。古より同じ意と云なり。五戒は。金光明の文句にこれある通。大小乗の根本なり。五戒と同じ意なる。四端の心を失ぬを。即心念佛の行者の。腰のす

へ様には。不足なりと云れば。此外には。何を基本とすべきや。

辨偽に今圓人の即心念佛を談する○用心すべし。此四紙計。又譯もなきことどもなり。開解定境用觀等と云るゝこと。此は今にあつては。學者の能く知りたること。云に及ばぬ義を。述らるゝなり。其上。此ことは。先年往復の最初に。此方より初て。云聞せたることなり。されば。問詰録の初に載せたる。脇の人の。二境の辨と云。假字書に云。此は開解立行。定境用觀のわかち。解行殊致緒餘集觀境眞妄論中解行殊致の一篇ありのきみなど。前かどより。分明に合點したるに非ざる故なるべし。開妙解於定境之前。用妙觀於定境之後のわけを。よくしりたる人ならば。此難はあるまじきことなり。何ぞ妙解が一ならば。定境も分るまじと可難やとあり。此度子細らしく云るゝ趣なり。圓解も開けず○あるまじきなり等とのこと。此は觀佛のことを云るゝにして。理持即心念佛ことには非るなり。三諦の理が

明かになるべし。顛倒の邪説なりとのこと。此は理が明かなと云。明の字を合點せられぬ故なり。明かなと云には、段々これあることなる故。談義本を見たる人は、先三諦の理を纒増明めて、念佛申べき故。解行の次第が亂じはせぬなり。亂すと云は、無理妄難なり。從來内外境觀分をも、知らず等とのこと。又無慚愧至極なることを云る。二千酬一一の難。九十餘條の間に、一言も會通を出し示されずして、如此のこを云る。況や四明尊者○入べきなり。此云分。前にも云し通。觀道のこと。曾て合點なきゆへ。一心三觀は、佛智と云。一筋計覺へて、住前は、皆情の一心三觀と云筋を、知られざる故なり。緣影を認て憶度する。念佛の功積らは、冥きやみちに、入べきとのこと。此は緣影の譯を、曾て知られぬ故なり。緣影のことは、前にも云し通。先師に能く聞置きて、度々沙汰せしこと故。其趣を筆記して置る人もあり。今こゝに具に云に及ばず。今一條を出さば、或人書寫山龍象院の問先

師云旭師所々に、緣影を斥、其緣影は、わるきものなりや。師云、不爾なり。執すればわるき故に、斥なり。其故は、緣影を心と認る故に、非心と斥なり。諸佛は、依緣影作佛事。衆生は依緣影、或造地獄業、或造淨土業。爾必わるきものには非るなり。若離緣影、住前の修行は、なるまじきなりと。尼入道の三諦の緣影を斥ば、四明、天台も斥る、處あるべし。此心、禪宗にもあることなり。知解情量は、禪宗の殊の外斥ことなり。然に、大慧禪師の云、從上大智慧之士、莫不皆以知解爲僞侶、以知解爲方便。於知解上、行平等慈。於知解上、作諸佛事。○即此知解、便是解脫之場、便是出生死處と。初學よくこれを思玉へ。妙宗鈔にと云より下の云分、知たること、二筋ある中の一筋計を知られたる分なり。前に段々云しが如し。又即心念佛の安心決定、此外にはなきことなりと。云るれどもと云より下の云分、前に云通、淨土も彌陀も、我心を離れぬと云處を、淺々と心得られたる。一偏の云分

なり。前に辨ずる處にて、知れたることなり。辨僞に即心念佛安心決定○分明に承りたし。此二紙亦無理妄談。初心なる難なり。此方の書置きし、俗語だらけの、假名書さへ。得合點せずして、譯もなきことを云る。されども、初心なる人は、疑人もありと。見へたれば、驚くべきことには、あらぬなり。佛教の大意を、能々知たるにてなければ、決定せぬと云を。疑るゝは、不合點なり。能々といへども、已に教の大意を、能々なれば、深妙の理を、語るにてはなきなり。其教の大意のすがたを、談義本に出して、生死と云ものは、こうしたこと。凡夫と云は、こうしたもの。修行の位は、だん／＼こうしたこと、能く明らめたる人は、皆極樂往生を、求むるなりと書置けり。此は見られぬか。得合點せられぬか。承りたし。さのみ深妙なることにては、なきに非ずや。さて又、教の大意を能々知ると云は、初めて念佛に趣く人を云なり。因て簡別して、淨土宗の人の、念佛を勤むるは、宗旨建立

にて、習來り仕來りたるばかりの事にて、佛教の大意をよく知り、見識あるより、務るにあらざれば、尊に足らずと云り。此初て念佛に趣く人に、簡たるなり。然ば、教の大意を能く知たる人の勸を受けて、尼入道が、念佛を務れば、自大意を知たるに契ふなり。初て念佛に入人の、教の大意を能く知たる相は、先師の上にも、知るゝことなり。行業記に云、和尚、初期生兜率、專持彌勒上生等經、及見天台、四明、偏勸安養、遂決志西邁、萬牛莫挽と云り。和尚從禪入教、閱藏の後、天台家の書を見て、即心念佛を勤玉へり。教の大意を、能く知玉ふ故なり。さて四明の妙宗鈔の中に等とのこと、佛教の大意を、能々知たるにてなければ、安心決定せぬと云ことは、四明復楊大年書を見ても、知ることなり。彼人は、得合點せられまじ。又それは、妙宗鈔にてはなしと云るべきか。左様に云れば、念佛の法門は、妙宗鈔の外は、用ぬことなりや。又第二座の談義と云より末、前に辨せし處にて知る

れば。重て難せず。
 辨偽に事理の二行〇あるべからず。此段。譯もなき
 妄談なり。一には。即心唯心の沙汰なく。たゞ事相本
 願の口稱念佛。此は十疑論。及延慶院の淨社等の如し
 と。成程機に利鈍ある故。觀佛持名相分れ。事理の二
 筋。相分れたるは。勿論なり。然に延慶院の淨社の念
 佛を。事持と云るゝは。四明の心に非ず。彼人の見誤
 なり。前の如。十疑論の心も。亦前の如。二には。三
 觀を以て。唯心三諦と觀する。理觀の念佛。此は觀經
 疏鈔等に明す所の如と。此は。觀佛なり。持名の理
 持には非ず。台宗に事相理觀を雙べ立。一も闕くこ
 となきは。正くこれ鳥の兩翼。車の兩輪と云ものなり
 とのこと。此は。さてく文旨なる僉義かな。事持理
 觀は。二人の修する所なり。云るゝ通なれば。ふたり
 よつて。鳥の兩翼ができ。ふたりよつて。車の兩輪が
 備るなり。一鳥の雙翼。一車の兩輪とは。譬へられず。
 珍敷兩輪かな。珍敷雙翼かな。可笑く。此をこそか

た輪車。かた羽鳥とは。云べけれ。但一家雙翼。一家兩
 輪と云ことか。それなれば。相符極成過なり。此方に
 も。事理二行あることは。本より許し置所なればな
 り。此外に口稱の念佛するの。空寂無相と觀じ。
 或は三諦法界と觀じて。事に即して理を觀する人あ
 り。此は。事理融即する。理觀の人の念佛にして。理持
 と云ものなれば。十疑論等にいへる。但事口稱の念佛
 とは。異なるなりと。此は。成程理持なり。然に彼人
 は。前にも云れ。こゝにも。念佛するのと云るゝ故。理
 持は能念の心計りを觀すと云。合點なり。要解や別行
 疏の意に非ず。兎角彼人は。觀佛に事理あり。事は善
 導等。理は台家等。持名にも亦事理あり。要解に出。別
 行疏に本つきたり。此譯をせず。四明の即心念佛との
 玉ふを。觀佛と計り心得。天台。藕益の理持を念佛の
 心計りを觀すと心得らる。大なる迷妄なり。先年書
 れし〇決定せり。此分注。又無理妄難なり。念佛の機
 を。攝せぬとこそ。云たれ。念佛の事を。攝せぬとは云

ぬなり。談義本の云分にては。たゞ理觀の一道ばか
 りと。此はいなことを云る。談義本の即心念佛は。理
 持にてこそあれ。理觀觀想にてはなきなり。理持を務
 れば。自ら事持は收るなり。四明事の一心。理の一心を
 釋して。事未必理。理必具事と。釋し玉へり。然れば。
 天台宗の即心念佛理持を勤る人は。法然流の事の念
 佛は。自動めてをるなり。法然流の事の念佛は。台家
 の即心念佛の理持を收むることは。ならぬなり。
 辨偽にさて末世の〇迷亂すべきなり。此段。談義本
 の前後の相違を云ひ立らる。此は智慧が昧らき故か。
 又何なりとも無理を云て。難せんと云心入れか。談義
 本を。得合點せられぬか。忘れられたるか。此方の心
 を。曾て知られず。此方に當らぬことなれば。かまわ
 ぬことなり。此方には。此安心に。淺きあり。深きあ
 り等と。了了分明に書き置けり。男女ともに。智慧聰
 明なる生れ付あり等と云は。淺きより深きに引き入
 る方に約して。云ことなり。如何なる人も。合點行べ

し等と云は。深きより淺きに及ぼす方にて。云なり。
 かく云を。賢き人は。早速合點なるべし。彼人は。何程
 云ても。合點せられまじ。因て具に云す。
 辨偽にさて其智慧聰明〇難き談義本なり。此段。彼
 人の無識。妄料簡どもなり。龍女。韋提希。千代野など
 を。出したるに付て。加様の人は。千萬人の中にも少
 しと。云るゝこと。なるほど少きにはあるなり。さ
 れども。古の人ほどにこそなくとも。當今とても。即
 心念佛の行を。立て得るこそ難かるべけれ。即心念佛
 の。安心を決定するほどのことは。昧きか淺きか。な
 るまじきものに非ず。去年より傳へ聞に。談義本を見
 て。安心決定したり。合點したりと云。道俗男女多き
 なり。今時即心念佛行れまじとは。云れぬことなり。
 兎角。見賢思齊が。よきなり。我等はならぬとて。身
 を見限るは。自棄と云て甚だわるき事なり。又甘じて
 爲下根と云て。わるきことなり。左様に多く澤山に。
 六祖や。千代野が如き。智慧聰明なる人を。見られた

るや。不審なりとのこと。此は。文盲なる問なり。内外古今の典籍を見るに。いくたりと云ことなきなり。彼人は。談義本に出せる人計を。知られたりと見へたり。近き比珍敷ことを聞たり。西國に。一日に法華を。五十部宛。讀人ありと云なり。古人にも無き程の。不思議なることなり。世人の愚なる心にては。何とやら疑はしく思べけれども。成程慥かなることにて。其人の弟子法眷どもが。語を聞たるなり。理が不思議なれば。事の上にも不思議なること。有ものなり。末世といへども。如此の人さへあり。況や談義本を見たり。聞たりして。彌陀も淨土も。我心の三諦法界を離すと知て。念佛申こと。ちと智慧ある人ならば。なるべきこと決定なり。一向に愚癡なるは。前に云通り。事の念佛の安心も。埒は明くまじ。能く教る人も稀なるべしとのこと。成程稀にはあるべし。彼人などは。一向にならぬゆへなり。右のわけ故。先師に聞傳へたる。即心念佛の趣きを。書き付て。談義本として。世に

弘むるなり。此談義本を見たらば。假名文字の。讀めるほどの人は。四明や。先師の思入を。合點すべきなり。其談義本を。偽作と云るは。四明や。先師を誹謗せらるゝなり。勿體なきことなり。彼人のいはるゝ。逆路伽耶陀の罪は。かへつて彼人にあることなり。他宗より難破せば。何とか答られんとのこと。此他宗は。先禪宗にてはあるまじ。禪宗は談義ぼうなどの漏るゝを。かまふものにてはなし。網に留る鯉鮒なども。目を掛す。通網金鱗を。目掛る故なり。其外の大乗の宗旨も。彼人の云るゝ様には。難せまじ。彼人の云るゝやうに難するは。淨土宗の中文盲なる人なるべし。事の念佛にても。漏るゝ機あるなり。念佛無間と云宗旨を。何とて漏らさぬことがなるべきや。即心念佛は。法華經の意の念佛なりと云は。彼宗旨の人も漏れまじ。法華經意と云は。一心三觀は。開權妙觀なるがゆへなり。天台宗教は。普く萬機を利益することなるに等とのこと。前にも云通。此は拙訳より。四

明尊者を。難せらるべきことなり。觀想に事理あり。持名に事理あることを。能く知り玉ひたる四明尊者が。願共有情。即心念佛との玉ふは。事理具足の天台の宗意に背くと。難せらるべきことなり。先師も同じ心なり。總じて即心念佛を。拙訳計が勸る様に。思るゝは。大なる思違ひなり。先師臨末のことを。行業記に載せて云。即心念佛。一心三觀。是吾住處。汝等留思於此。且暮遇我也。我死勿憂焉。其夜在彌陀像前。合掌念佛。既畢唱云。中道即法界。法界即止觀。止觀即刹那。刹那者何。南無阿彌陀佛。然則念佛外無止觀。止觀外無念佛。能所情所取。法界智所照と。又近歲每與人言。不問賢愚。悉示修惡即性惡。或疑。不善逗機。相尙曰。四明尙曰。適時之巧。非我所能。願共有情。即心念佛。即心念佛。其要唯在修惡即性惡也。縱不瞭解。庶爲毒鼓之緣矣と。記せり。即心念佛。先師一生の自行化他なり。縱不瞭解。庶爲毒鼓之緣矣と云て。餘り合點の行ぬ者にも。修惡全性惡。即心

念佛を説き示されたり。若し行業記は。其方が私の見立なるべしと云れば。念佛申の作智信女に。自筆を執て書き示されたる文に。以具佛之心。念即心之佛。以即心之佛。熏具佛之心。此謂即心念佛。所言心者。現前一念是也。所言佛者。安養彌陀是也。とあり。具佛。即心とあるは。虎溪の云る由具故即するなり。即と云は。つくこと云こと。離れぬ義なり。然ば十萬億土の彌陀の依正。我心を離れずと知て。念佛申を。即心念佛と云と云を。疑はるゝは。先師を疑はるゝなり。猶又。拙訳官僧たりし時。三觀の智の。相續しがたきことを憂ひて。問しに。其答略に云。若於力未充時。欲續難續之智。莫如持名念佛。修之四威儀中。以彼常色。乃至常識。與吾有緣而易託故。以信而願。願而持念。縱令散心。亦即智故と。答られたり。此乃持名念佛の上にて。一心三觀の智を。相續せよとの。示なり。即心念佛に非ずして何ぞや。右の先師の答は。自筆記せられたる所にて。人の能く知たることな

り。彼人。先師の弟子と思ひ。四明を信仰しながら。四明の御願。先師の思ひ入を。何とぞ弘めんと思ふ心は。少しもなく。世間に多くて。こともかけぬ。法然流の事の念佛を。弘めらるゝは。誠に天台宗になりたる甲斐は。なきにてなくて。何ぞや。笑止千萬なる心根なり。剩へ四明や。先師の思召を。書き付たる談義本を。偽作と云るゝは。何としたる心根ぞや。四明の明かなる文は。譯もなく見誤り。先師の思ひ入は。得と聞き受られぬ故なり。年來法然流を。尼入道に勧められしに。此度談義本が出て。即心念佛が。天台宗の正意と云ことを。人が知る故。從來のことが。面目なさに。妄説妄難を云述らる。人情甚しくて。深く因果を信することのならざる所。あらはるゝなり。さて止訛に見立たる。十種の持病とのこと。此は曾て書き付け置しことある故。今又此に出すなり。彼書を。此方の弟子分の者や。官僧衆が。此方に代りて。返答をせんと云るれども。馬方船頭の喧嘩の様なることを。

仕かくるには。相手にならぬがよし。必ず返答無用と。をしとめたり。彼書に。此方に。十種の持病ありと數へ立たるは。此方には。此は。最負分にて。十種と數へられたるが。過分なり。八萬四千の煩惱。一毫も未だ斷せざる。麤凡夫なれば。持病。十種や二十種にては。あるまじと思ふ。彼人などは。持病が一種もなき様に。思てをらるゝと。見へたり。修行が甚だ精密なる故か。羨まし。修行があらくて。覺られずは。笑止千萬なり。

或人問。天台宗の事持の人と。即心念佛の淺きとの。同異如何か。心得べきや。答。事持の人にて。天台宗なれば。心具心造。唯心の淨土。本性の彌陀と云ことを。聞かねば。天台宗とは。云れず。聞きは聞ひても。即心念佛申されぬ故。善導。法然流と同じこと。念佛計り申を。天台宗の事持の人と云なり。因て藕益は。而猶未達と云て。而猶未聞とは。の玉はざるなり。即心念佛の人は。聞く上に。明かには無けれども。

即心念佛安心決定談義本或問終

享保十四年正月十三日の酉の刻に。書始めさせ。今日二十七日。未の刻に書付させ畢ぬ。老苾芻光謙行年七十八於幻幻菴書付さす。

我心が即彌陀。彌陀が即我心と云ことを。ひたと思が。即心念佛の淺きなり。此心が。段々と聞ひたり。學びたりするほど。深く明かになることなり。此天台宗の。事持と。理持の淺きとの。不同なり。或人問。佛語を信じて。彌陀と我心と。同一體と思ども。念佛申時は。やゝもすれば。彌陀と我と。相隔と思心起る。如何か用心すべきや。答。それは。其方の情と云ものなり。拙訥なども。最初は左様にありき。其後は。何程情で隔ると思ても。其體は本來。同一體と思心に。なるなり。此れ智なり。因て先師は。能所情所取。法界智所照との。玉へり。能く思れよ。

右

享保十四己酉年二月十五日

皇都 書肆

瀬尾源兵衛 壽梓
山本平左衛門

(編者云。本書中二字下者。原本割註)

即心念佛彈妄錄

去りし秋。談義本の辨偽を著したれば。見る人此返答は。なるまじきこと共なりと。いひあへるに。今歲仲春。或問といへる書出たり。此は或人に辨偽を問せて。幻菴主の答へられたるものなり。其答への趣き。果して正直に返答することはならず。さすが黙然たるも。いと念なく念はるゝか。自ら恥を省みず。人の笑ひをも避くることなく。忽ち立義を改張し。妄りに前言を翻轉し。罵辱巖言にて。重重紛らかし。盡くこれ誑他の説なれば。四明尊者。山外の答義を述て。縱事改張。終當乖理。始末全書於妄語。披尋備見於諂心。毀人且容。壞法寧忍との玉へるに。恰かも當れり。已に理路窮ると見えて。改張顯然として。墮負明白なれば。重て辨ずるには。及ばぬことなれども。何とぞ辨せよと。再三勸る人もあり。初學の知ることなく。惑亂せらるゝも。歎しければ。且く大綱の

文義を擧て。其妄言妄義を彈駁すと云ことしかり。于時享保十四年己酉九月下旬。

凡例

一 妙宗鈔に。適時之巧。非我所能等といへるは。談義本の根本。綱格の文なるが。此は理の觀念を明して。口稱の念佛を示す文には非ず。又四明尊者も。理觀の一道を専らとせず。事相本願の念佛を。普く萬人に勸め玉ひ。なを天台。慈雲。慧心。眞盛等の宗師も。なる程事の念佛を。弘通し玉ふと云義。又絶待に照す。即心の妙觀は。覺えたり。思ふたりする様なものには非すと云義さへ。明かに顯るれば。談義本。并に或問の。云云たる妄説は。自ら一時に破廢し。辨偽の能破。よく成立するが故。今はたゞ此根本の文義を辨するなり。

一 菴主。從來人と議論せらるゝに。自義敗壞せんとす

れば。旁論枝説にて。廣く紛らかし。轉計疊言にて。巧みに紛らかざるゝが故。今は随分紛らかされぬ様にと思ふて。枝葉旁義に及ばず。見人之を知ぬべし。

一内外境觀の論。菴主立義は。抄宗十義書に背て。墮負分明なるに。なを慚悔の心なく。此度何か過言せらるゝは。笑止なること。辨斥したきことどもなれども。此は別の所論なれば。且く此に略す。

庵主曰。先抄宗の序の。適時之巧○即心念佛とあるを。引たるをば。彼文の講釋の様に覺へて。文の上下の照應のことを以て。難せらる。ものゝ合點の。曾てゆかぬことなり。總じて。禪家には。經論などの。一句一言を取出して。本則として。工夫し。拈提することあり。一章一篇の。講釋とは違へり。儒者は又。古書の一句を切出して題とし。文を著すこ

とあり。經義などの體あり。此又一章一段の。連綿せる講釋には非ず。我今抄宗の序の文を取出して。一會の談義の題目とするなり。抄宗の序。一篇の講釋には非ざるなり。なにとて。一篇の講釋の様に取

り成して。上下の文の照應を以て。難せらるゝや。筋の違ひたることにて。妄辨なるに非ずや。彈曰。これ例の。紛らかしたる云分なり。今は禪家の本則としたり。儒者の一言一句を切出して。題とするとは。同じからず。談義本の初に。抄宗鈔序に。適時之巧。非我所能願共有情。と即心念佛との玉へりと。正しく鈔文を引き已て。其次に。此意は。時時の宜きに順つて。色色の法を説き。それ〴〵の機に適て。さま〴〵の法門を授ること等と。談せられたり。明かに此意はと云て。上に引く鈔文の意を。解せらるゝは。これ即ち講釋と云ものなり。説文に。講和解也とあれば。此意はと標して。所引の文の意を。和らげ解釋する。これ講釋に非ずして。何ぞや。かくの如く。文の意

を講釋せらるゝからは。其方の後に云るゝ通りに。上下の文意が。相契ふ様に。上下の照應を以て。談せらるゝ筈なるに。全く序文の意にてもなき。佛や大菩薩に約し。色色の法を説。さま〴〵の法門を授ることと云て。曾て上下の文意に。相契はぬことを云るゝが故。辨偽に難せられて。忽ち口を違へ。彼文の講釋に非すと云るゝは。明かなる妄言なり。さて一篇の講釋に非すと云るゝは。誰人か其方談義の上にて。抄宗序の。一篇の始終を。講釋せられしと云者あつて。かく云るゝや。一篇の講釋と云人は。曾てこれなきに。入

ざる斷り。紛らかしたる云分なり。一篇にては。なけれど。も。所引の四句の文の講釋なり。已に四句の文を出し。此意はと標して。講釋せらるゝからは。上下の文義に背て。何と文意がすむべきや。而るを上下の文義に背て。わけもなきことを云るゝ故。辨偽に難破せられて。さすが閉口もならず。彼文の講釋の様に覺えて。文の上下の照應を以て難するは。ものゝ合點のゆ

かぬの。筋の違ひたる妄辨のと云て。誰がいひもせぬ。一篇の二字を加え。禪家の本則や。儒者の經義などにて。上手に紛らかざるゝは。さて〴〵聞えぬこと。笑つべきことなり。上下照應のこと。なを下にて云べし。

菴主曰。其上。前後照應の云分が。甚だ譯も。なきことなり。孤山等の。多く事相の觀を示さるゝを。適時之巧との玉へるものなりとのこと。甚だ譯もなき云分なり。劣機の爲に。淺き觀を示す計を。巧と云べきやうはなきなり。惑物と云ふ言も。一人一機を憐むを。云ことにてはなし。物我と反對に用るときは。我外はみな物なれば。惑物と云は甚だ廣し。巧と云は。巧拙と反對に用れば。人のしにくがることを。見事に能くするを巧と云なり。劣機に對して。淺き法を示す計は。今時の人もなることなり。四明何ぞ非我所能と。の玉ふべきや。

四明。我能くする所に非すと。の玉ふは。孤山杯

は。佛菩薩風をしたるものなり。われは。それは。ならぬと仰せらるゝなり。此乃ち四明の心は。孤山などは。能く機を鑑る佛菩薩風が。なると見へて。下凡の縁種を活さるゝと。仰せらるゝ心なり。

然ば物を惑むと云言も。智巧など云言も。皆廣きことなるゆへ。拙僧は。佛や大菩薩のことなりと云なり。かく申てこそ。上下の文意が。能く相契ふことなれ。又安樂行品の疏の心や。金律論の心にも。相契ふことなれ。

彈曰。此段の云分は。反て甚だ譯もなきこと共なり。まづ劣機の爲に。淺き觀を示す計りを。巧と云べきやうはなきことなりとは。これ此方の意に當らず。なる程。巧と云は。人のしにくがることを。見事に能くするを云が故。孤山等の師。内には心妙觀の旨を解すれども。時機の理觀に堪ざることをよく鑑み。多く事相を談じて。下凡に示さるゝを。上文にも。惑物情深。

適時智巧といへり。これ庸人の輒くすることを得ぬ。善巧方便なるが故。此に於て。適時之巧と。の玉へるものなり。而るを此方には。たゞ劣機の爲に。淺き觀を示す計りのことを。巧と云たる様に。惡くいひかけらるゝは。正直ならぬこと。此ぞ甚だ譯もなきことなれ。次に惑物と云言も。一人一機を憐むを。云ことにてはなしとは。此も亦此方に當らぬことなり。此方惑物と云を。一人一機と云たることは。終になし。此は全くなし。孤山等の師。内に解したる心妙觀は。且く云す。多く事相を談じて。我外の下凡の物機に廣く教へらるゝを。惑物情深と。の玉へるなり。惑物と云言は。一人一機を憐むを云こととは。誰人が左様にいへば。今破さるゝや。此には全く入ぬことなり。此方の終に云ぬことを。此方の云たる様に破さるゝは。此亦例のいひかけ。正直ならぬ妄言なり。さて分注に。四明我能くする所に非ずとの玉ふは。孤山杯は。佛菩

薩風をしたるものなり。われは。それはならぬと仰せらるゝなり等とは。此亦聞えず。談義本には。直に佛や大菩薩ならでは。ならざること等と云て。外の凡人を。堅く簡び孤山杯と云ことは。一言も云れざりしに。辨僞に於て。此序の文は。佛や大菩薩のことにてはなし。孤山等の人師のことなりと。辨破したるを見。内心には。其誤りを知られたれども。過を改むることが嫌ひと。止訛に見立し持病ゆへ。分明に誤れりとはえ云す。孤山杯と云詞を。此度偷かに入られたるは。何ごとぞや。談義本には。佛や大菩薩ならでは。ならぬと。慥かに云れしに。今は直に。佛や大菩薩の上にては云す。孤山杯は。佛菩薩風をしたるものなりと。孤山の上にて云るゝは。分明なる轉計。紛らかしの上なる分注なり。初學心を付てよく見るべし。又談義本には。佛や大菩薩ならでは。ならぬと。慥かに云るれば。佛や大菩薩を除て其外の凡師は。決してならぬと。聞えたるに。今は孤山杯も。よくなること

様に云るゝは。前後の自語相違せり。次に然れば物を惑むと云言も。智巧など云言も。皆廣きことなるゆへ。拙僧は。佛や大菩薩のことなりと云なりとは。此も是ならず。惑物の。智巧みのと云詞は。なる程廣きことにて。此は序文の通りに孤山杯の。廣く下凡の物機を惑み。よく時の機に適ふ。智慧の巧みなることを。の玉ふものなり。それを談義本に。孤山杯とは。一言も云す。たゞ佛や大菩薩といひ。今もまた。皆廣きことなるが故。拙僧は。佛や大菩薩のことなりと云なりと云るゝは。甚だ譯もなく。誤れることなり。さてかく申てこそ。上下の文意が。能く相契ふことなれどは。此甚だ非なり。適時之巧を。佛や大菩薩のことなりと云ては。此下の文にも契はぬこと。又上文に。相泓至。今著述不絶皆宗智者といひ下つて。惑物情深。適時智巧等といへるにも。全く契はぬなり。佛や大菩薩の。此經疏に記文を。著述し玉ひ。智者大師を。宗とし玉ふなど、云こと。何ぞこれ有んや。故に佛や大

菩薩のことなりと見ては。上下の文意。全く相契はぬを以て。辨偽に委く之を難じたり。此は孤山等の師。皆智者大師を宗とすれば。本より心妙觀を知れども。而も物を慙む情深くして。多く事相を談じて。下凡を化益するを。適時之巧と見てこそ。上下の文照應して。よく相契ふことなれ。此はたゞ觀經の上にて。事理の二觀のことのみを。序せられて。廣く諸の法門のことには非ず。而るを談義本に。此意は。佛や大菩薩の。時時の宜きに順つて。色色の法を説。それ〴〵の機に適ふて。さまざまの法門を授ることと談じ。今の返答にも。拙僧は佛や大菩薩のことなりと云るは。さて〴〵譯もなき云分なり。又上に於ては。彼文の講釋にてなければ。上下照應のことを以て難するは。筋の違ひたることと。いひながら。今はかく申てこそ。上下の文意が。能く相契ふと云て。たゞ一言一句ばかりにてなく。筋の違ふたと云るは。上下の文意を。反て出さるゝは。何としたることぞや。上下の文

意が。能く相契ふとは。即ち上下照應と云ものなり。上下照應と云と同じき。上下の文意が。能相契ふことを詮として。文の意を和解せらるゝは。これ講釋と云ものなり。かくの如く。自分にも。一言一句に限らず。上下の文意の。よく相契ふ様に。序文を講釋しながら。而も講釋にてはなしと妄言し。此方の上下照應を以て難するを。筋が違ひたることと云るは。甚だ譯もなきことならずや。さて安樂行品の疏等のことは。其文義を出されねば。今辨するに及ばず。

菴主曰。其上。四明約心觀佛とも。の玉はず。即心觀佛とも。の玉はず。即心念佛との玉へる心。彼人など。夢にも知られずと見へたり。觀佛と云は。事觀でも。理觀でも。觀念にかぎりて狭し。念佛と云は。口稱にも通じ。觀念にも通じて。廣きこと。淨土家にも。天台家にも。能く人の知りたる事なり。狭き觀念の言を出さず。廣き念佛の言を用ひ玉へるは。譯あることなり。願共有情とて。法界の諸有情と

共にと願ひ玉ふゆへ。觀念にも通じ。口稱にも通じたる言を出して。上根も。下根も共に往生の勝業を。成せしめんが爲なり。余は。其中の即心稱名念佛の方を取て。今時の台徒の劣機に。淨業を勸るなり。談義本の始終是なり。云云

彈曰。此は。思ひの外の妄談なるが故。なる程。此方には知ぬこと。此方に限らず。四明尊者も。また夢にも知り玉ふまじき邪說なり。辨偽の難破には。殊の外迷惑せられしと見えて。古今珍らしき邪說をいひ出されたり。總じて念佛と云は。觀念稱念に通ずること。自他宗の人の。よく知りたること。誰か之を疑んや。此方打忘れたるに非ず。今の序文は通途に非ず。別して西方の依正を。觀念する上にて孤山等の。たゞ事相にて觀念するに簡んで。西方の佛身を。唯心法界と觀念することを。願共有情。即心念佛との玉ふが故。此御願は。法界の諸有情と。専ら觀念し玉ふことにして。全く稱念には通せぬなり。總體觀經の中に。

念佛といへるは。皆悉く觀念のことなり。因て正しき佛身觀の經に。一一光明。遍照十方世界。念佛衆生。攝取不捨。○見此事者。即見十方一切諸佛。以見諸佛。故名念佛三昧。作是觀者。名觀一切佛身。と宣玉ふて。此經に念佛三昧とあるは。即ち觀佛のことなり。妙宗にも。一即一切。尊特身。故觀一佛。能見諸佛。と釋して。經文の念佛とあるを。觀佛とし玉へり。又大師疏に。念佛衆生。攝取不捨と牒し玉ふを。鈔に釋して。即前正觀佛身光明攝生之文也といへり。此等の經文疏鈔を見られよ。此經に念佛とあるは。皆悉く觀念にして。稱念に非ず。

念佛衆生の念佛を。稱念と見るは。淨土宗の意にして。天台四明の意には非ず。

又經に。若念佛者。當知此人則人中分陀利華と宣玉ふ。此念佛を。淨土宗の師は。稱名念佛とすれども。四明は然らず。顯修圓觀。超餘一切修道之人と釋し玉へり。此經文明かに念佛とあるを。已に圓觀と釋して

淨土宗の如く。稱名との玉はぬからは。序の文に自ら即心念佛との玉ふ念佛も。決して觀念にして。稱名に通せざること知ぬべし。又疏に。正しく佛身を觀する。觀行即の位を。觀行佛者。觀佛相好。如鑄金像。心緣妙色。與眼作對。○常運念。無不念時。念念皆覺。是名觀行佛也と云て。佛の相好を。心心休むことなく觀するを。常運念。念念皆覺とあれば。此疏文も。念とは。觀念なること分明なり。又疏に。得此觀佛三昧。解入相應とあるを。妙宗に引ては。疏云念佛三昧。解入相應との玉へり。此疏文は。明かに觀佛三昧とあるを。妙宗に念佛三昧との玉ふからは。今の序も。約心觀佛のことを。即心念佛との玉ふこと。何ぞ疑ん。談義本にも。即心念佛。亦約心觀佛とも云と云れずや。なを妙宗に。此則即觀無觀。用無作行。修念佛定。此法乃是觀佛要術との玉へり。此鈔。上には即觀無觀と云て。妙觀のことを明し。此觀を次に修念佛定といひ。此念佛定を。乃是觀佛要術と結し玉へば。

いよく四明の祖意。約心觀佛のことを。即心念佛との玉ふこと昭著なり。又妙宗に。得此位已。方令觀佛眞法之身。八萬相顯。乃得名爲念佛三昧といひ。且行人念佛。誰不託佛正報修觀と云て。此兩文も。上に解佛とあるを。下に念佛三昧と結し。上に念佛といへるを。下に修觀との玉へり。此外經疏妙宗の始終。往往に觀佛のことを。念佛といひ。念佛のことを。觀佛との玉へども。終に念佛のことを。稱佛との玉ふことは。一處もなし。又十六觀の。十六妙觀のとは。の玉へども。終に十六稱の。十六妙稱のと云ことは。一文もなければ。此十六妙觀を。釋し玉ふ妙宗序に。即心念佛とあるは。心妙觀の觀念にして。南無阿彌陀佛の稱念に非ざること。決定明白なり。因て此序には。即心念佛とあれども。下には。即心觀佛といひ。又は即心觀相と云て。たゞ佛の相好を。觀念することをの玉へり。もし剛然として。稱念にも通すと云れば。天台四明の疏鈔。何れの處にか。即心稱佛との玉ふ文あ

るや。其明文を出さるべし。即心觀佛とは。明かにあれども。即心稱佛と云文。なきからは。いよく此序文は。觀念に限ること顯然なり。又此度念佛とは。觀稱に通するが故。余は。其中の即心稱名念佛の方を取て勸ると云る。此即心稱名念佛とは。前代未聞。珍しき名目を。いひ出されたり。天台四明の疏鈔に。此名目もあることなりや。但し其方の。新しき自作なりや。不審なり。又其中の即心稱名念佛と云る。其中とは。四明の即心念佛との玉ふ。念佛の中をさゝれたると。聞えたるが。四明は此經の念佛を。竝に觀佛とは釋し玉へども。終に稱佛との玉ふことは。一處もなく。即心觀佛とはあれども。即心稱名念佛とは。妙宗の始終に曾てなし。已に曾てなきからは。四明の即心念佛の。其中より取られたるとは。全く見えず。たゞ其方の。妄料簡の。其中より自ら出されたる。即心稱名念佛と聞ゆるなり。又談義本の初に。即心念佛と云ふ名を立て。専ら弘め玉へるは。四明尊者なりと云

て。妙宗の序文を引きながら。四明の思議を忘る。心妙觀にて。佛の相好を。觀佛することは全く云す。たゞ口にて念佛申すことをいひ。くりかへし思ふたり。覺えたりすることを談せられて。初に四明尊者の。即心念佛と。標し出されしとは。大に違ふが故。譬へば看版には。すさまじき虎を畫き出して。而も虎にはあらぬ猫を見せるが如しと。辨偽に難せられて。百計思惟し。四明の即心念佛の言は。稱念にも通ずると。此度跡より云るは。譬へば。眼ある人に。虎にはあらぬ猫なりと。尤められて。跡より看版に。猫をそつと畫き添て。看版は虎ばかりにてはなし。なる程猫も畫てあるが故。此方は看版の中の。猫の方を見せられたるが如し。もと一枚の看版に。たゞ虎ばかりを。大きに畫きたるものなるに。其脇に跡より猫を畫き添たるは。其の間配が悪き故。跡より俄かに拵へ畫きたるものと。見ゆること決定なり。今も亦その如く。初に標せられし。四明尊者の。即心念佛は。心

妙觀にて。佛身を觀念することなれば。口にて稱念するは。四明に背くと。辨偽に尤められて。即心念佛の念佛は。觀念稱念に通ずる故。其中の即心稱念念佛の方を取て勤ると。此度跡より稱念を加えらるゝは。俄かに猫を畫き添たるが如き拵へものなれば。眼ある人は。初に四明尊者の即心念佛と。慥かに標する。根本の看版と。相違することを。明かに見分つべし。豈慚愧の至りに非ずや。

菴主曰。さて即心念佛と。の玉はねば。かなはぬ譯あり。觀佛にては。妙宗の中にも。もるゝ所あり。止觀の般舟三昧の行相が。すまぬなり。又念佛會の疏の心にも。背くなり。又境觀要門にも。背く。それゆへ。處あり。末にて出べし。狭き觀佛の言を用ず。通じたる念佛の言を出し玉へり。彼人の夢にも知られぬことなり。尤も念佛會の疏は勿論。止觀も。妙宗も。見らるべけれども。心觀道の上になき人なれば。視而不見なり。可憐彈曰。此は下にて。段段具さに云るゝことにして。一

一譯もなきこと共なる程に。段段下にて辨すべし。

菴主曰。妙宗に。もるゝ所ありと云は。下品下生の十念は。口稱なり。それを。四明料簡して。此人は。乘急戒緩の人なるゆへ。曾て修する觀佛三昧。一心三觀の定心が發して。十念成就して。往生すと。の玉へり。具なる文。鈔の下の四。十帯より書出すに及ず。此即一心三觀の定心に住して。稱念するゆへ。談義本に云る。即心念佛に非ずして何ぞや。觀佛と云ば。下品下生の十念が漏るゆへ。念佛と云て。此機までも收め玉へり。

彈曰。此段は。跡より稱念の猫を。畫き加えたる邪義を飾んとて。妄料簡を出されたり。まづ下品下生の經文に。汝若不念佛者。應稱無量壽佛とある文義をよく熟讀せらるれば。此經の中に。念佛とあるは。皆觀念のことにして。稱佛と同じからざることを知て。序文の念佛も。稱念には非ず。觀念なることを。合點なるべし。さて下品下生の十念は。口稱なり。觀佛

と云ば。下品下生の十念が漏るるゆへ。念佛と云て。此機までも收め玉へりとは。此れ大に然らず。下品下生の十念は。第十六觀の下の文にして。此は惡人の稱名を。所觀の境として。觀念せしめんが爲に。宣べ玉ふものなり。今まで修觀する人が。此に於て。觀念を改めて。俄かに自ら口稱の十念すると。云ことにては曾てなし。故に大師の疏に曰。此下の三觀。觀往生人者。有二義。云妙宗に之を釋して。既云此下三觀。觀往生人有二義。修前觀法行者觀於九品往生相非是凡小。求生之者。讀今三輩經文。改轉行業と。の玉へり。是に知ぬ。十六觀の中の。後の三觀は。九品の往生人を。所觀の境として。一一觀念せしめんが爲に明し玉へば。今即心の妙觀法を以て。九品の往生人を。所觀の境とし。一一唯心法界と。觀念するが故。觀佛と云ても。下品下生の惡人の十念を。少しも漏すこととはなし。定心の十念にもせよ。散心にもせよ。皆悉く漏さず。所觀の境として。唯心法界と觀するなり。

而るを觀佛と云ば。十念が漏るると云るゝは。十六妙觀を修する行者。第十六觀の下の。惡人の十念は。所觀の境とせず。心妙觀にて。觀念することなしと。思はるゝや。如何。

菴主曰。止觀の般舟三昧の行相が。すますと云は。妙宗鈔に。若此觀門。及般舟三昧。託彼安養依正之境。用微妙觀。專就彌陀。顯眞佛體。雖託彼境。須知依正。同居一心とありて。觀經と般舟三昧とは。同じことなり。然るに般舟三昧は。輔行に。一自心三昧所見佛。二西方從因感果佛。今具合二義。共爲一境とて。兩佛を境として。一心三觀を修すれども。其内には。口稱もあり。因て止觀に。九十日口常唱阿彌陀佛名無休息。九十日心常念阿彌陀佛無休息。或唱念俱運。或先念後唱。或先唱後念。唱念相繼。無休息時とありて。九十日口に名號を稱るなり。般舟の稱名は。兩種の佛を。心に念じて。其名號を唱るゆへ。彌陀を所觀の境にして。能念所

念。能稱所稱。皆三諦法界と照すなり。此れ豈吾所謂即心念佛に非ずや。談義本の始終。皆此の心なり云

彈曰。引る所の。妙宗鈔の文を。とくく見られよ。若此觀門。及般舟三昧。託彼安養依正境。用微妙觀。專就彌陀。顯真佛體と云て。たゞこれ心妙觀を以て。彼安養の依正の境を。唯心法界と觀じ。専ら阿彌陀佛に就て。眞佛の體を顯す。意論止觀の方の同きを取て。一等に擧玉へり。全く口説默の下なる。口常唱名の方を。一同し玉ふには非ず。般舟三昧には。或先念後唱等と云て。觀念の外に。唱名を明し玉へども。妙宗の始終。修觀の行者の。佛名を唱ることは。終になし。妙宗の中。何れの處にか。口常唱名の方を。此經と般舟三昧と。同じとの玉ふことあるや。其文證を明かに出さるべし。左様の文は。決してあるまじきなり。

重重文證もなき。妄料簡の妄義ばかりを云る、

が故。節節其證文を出さるゝ様にと。詰問することなり。本より妄料簡のことなれば。何れも明文を出すことはなるまじ。

その文證なきからは。たゞ般舟三昧の。兩佛を境として觀する。意論止觀の方ばかりを。一同し玉ふが故。此れにて。いよく即心念佛の念の字は。たゞ心觀の觀念なること明かに顯れたり。妙宗の文義を。とくと合點せず。觀經と般舟三昧とを。一同し玉ふ祖意をよく曉らしめずして。

此度止觀も妙宗も。見らるべけれども。心觀道の上になき人なれば。視而不見なり。可憐と。此方を妄りに破さるゝは。反て其方の身の上のことなりと。能く省みらるべし。

止觀の般舟三昧に。口常唱名とあるが故に。觀經にも同じく唱名の行を明すべしと云るゝは。面如満月と説て。佛の面貌の圓滿なる方を。秋の満月に譬へたるを聞て。月には盈虧があれば。佛の面貌にも。盈たり

虧たりすることが。あるべしと云んが如し。有智の人之を聞ば。さてく無智なることと。笑ふべきなり。此段の下に多く文證を引れたるは。竝に無用のこと。紙墨費しと。云ものなれば。今辨するに及ばず。

菴主曰。念佛會の疏の心に背くと云は。彼人も云るゝ通り。彼は萬人講の稱名念佛なり。然に彼疏に云。原夫一念本融。諸法無礙。遇熏既異。感報成差。是以順性而修。則顯諸佛淨土。隨情而作。則循五趣苦輪。○若欲生彼。但當稱彼佛號。修彼佛慈と。此明に。即心念佛を示し玉へり。因て起頭に。一念本融。諸法無礙との玉ふは。妙宗に所謂。法界圓融。不思議體。作我一念之心。亦復舉體作生作佛。作依作正。作根作境。一心一塵。至一極微。無非法界全體而作と云る心なり。即心念佛の根本なり。又順性而修。則顯諸佛淨土とあるは。妙宗に所謂。據乎心性。觀彼依正。依正可彰。託彼依正。觀於心性。心性易發とある心なり。觀經の約心觀佛

の心を。稱名念佛萬人講の疏に述べ玉へるは。談義本に所謂。即心念佛を示し玉ふに非や。

彈曰。四明の萬人講を。明かに即心念佛なりと云るゝは。甚しき邪説。大に明かならぬこと共なり。其證據に。淨社の疏を略して出し。一念本融。諸法無礙といひ。順性而修等とある。文言に攀附して。即心念佛を示し玉ふと云るゝは。文義を見るの甚だ癩く。不都合なることなり。今其全文を出すに。原夫一念本融。諸法無礙。遇熏既異。感報成差。是以順性而修。則顯諸佛淨土。隨情而作。則循五趣苦輪。所以處娑婆者。升出尤難。墮落者衆。故經云。得入身者。如爪上土。失入身者。如大地土。直待三修行備。方免四趣受生。益境界熾強。煩惱熾盛。自力求脫。實難其人。若夫生安養者。國土莊嚴。身心清淨。直至成佛。不墮三途。經云尙無惡道之名。何況有實。又云。衆生者。皆是阿鞞跋致。若欲生彼。但當稱彼佛號。修彼佛慈。必爲彼佛本願攝取。捨此報身。定生彼國。具如經説。實匪臆談。

云云 此文初より自力求脱。實難其人と云までは。境界熾強なる。娑婆世界にして。自力の修行を以て。五趣の生死を解脱することの。難きことを明し。次に若夫生安養の下は。淨土他力の行を示し玉へるなり。初の中に。一念本融等とあるは。一念の心性は。本來融通して。諸法の隔礙なきことをいひ。然も善惡の業を以て。熏起するが故。地獄人天等の。果報を感得するの。差別することを示して。遇熏既異。感報成差との玉へり。爾らば此起頭に。一念本融等とあるは。自力の解脱し難きことを明さんとて。まづ本性の融通することを。示す文にして。淨社の念佛を。一念本融。諸法無礙と。圓解を開て。解の如く念佛申せよと。云ことにては曾てなし。而るを今此二句は。即心念佛の根本なるが故。四明の念佛會は。明かに即心念佛を示し玉ふと云るは。さてく文義を見るの難きことなり。又順性而修。則顯諸佛淨土とあるは。極樂淨土に往生する爲の念佛を。性に順して修すと云こと

にてはなし。此は維摩詰經に。心淨則佛土淨と宣玉ふが如くにて。娑婆世界にして。自力を以て。性に順じて修行して。佛土を淨むることを。の玉へるものなり。因て次下に。之を受て。所以處娑婆者。升出尤難しといひ。結する處には。蓋境界熾強。煩惱熾盛。自力求脱。實難其人といへり。かくの如く。娑婆自力の行を明して。順性而修と云ふ文を。妙宗の。據乎心性。觀彼依正等と云ふ文に牽合して。觀經の想ひを西方に送る。約心觀佛と。同じことにして。萬人講の疏は即心念佛を。示し玉ふと云るは。大なる僻見。亦是文義を見るの難きことなり。か様の難き見解にて。ありながら。平生世上の學問が難きこと。歎かしく思ふと云るは。大に似合ぬこと。世上のことを歎かずとも。まづ自分の難きことを歎かれよ。但しなる程文義はよく合點なれども。四明の念佛會には。殊の外迷惑し。さすが閉口しても居られず。迷惑さの餘りに。かく無理なる見様をし。百題自在坊風を出さるゝ

ものなりや。次に淨土他力の行を示さるゝ中。初には總じて淨土の莊嚴。三途に墮落せず。不退轉なることを明し。次に若欲生彼の下。正しく往生淨土の行なる淨社の念佛を示し玉へり。此淨社の念佛を。但當稱彼佛號。修彼佛慈。必爲彼佛本願攝取等と示し玉ふて。彼極樂淨土に。往生せんと欲するには。一念本融等の。圓解を開くことも入す。順性而修する觀をも用ひす。但偏へに。彼阿彌陀佛の名號を稱念し。彼佛の慈悲を修すべし。必ず彼佛の本願力の爲に攝取せられ。定て彼極樂國土に。往生すると云こと。文義分明なれば。淨社の念佛は。事相本願の稱名念佛を勸め玉ふて。即心念佛に非ること。何ぞ復異んや。かく分明なる疏の文をも。見分つことならずして。重大に違ふたる見様をせらるゝは。其方の云るゝ。視而不見なり可憐と云ものにてはなしや。

菴主曰。又但當稱彼佛號。修彼佛慈と。佛慈とは。觀經に所謂。以觀佛身故。亦見佛心。佛心者。大慈

悲是とあるなり。此大慈悲を。天台は。生緣。法緣。無緣の三種を以て。釋し玉へり。四明は既に三種の慈體是三諦と釋せられたり。然ば。三諦の慈を修して。彼の佛號を唱るは。談義本に所謂。即心念佛に非して。何ぞや。如此稱名念佛に付て。一心三觀を修する方までも收めん爲。四明。約心觀佛と云す。即心念佛との玉へり。分明なることを。自分に合點せられざるゆへ。人の云ことまでも疑て。謗法の罪を造るゝなり。

彈曰。淨社の疏は。即心念佛の旨を明さす。無量壽經の本願に依て。但阿彌陀佛の名號を稱念することを普く愚癡無智の。俗男俗女までに。勸め玉ふ文にして。此稱名は。佛の大慈大悲より發し玉ふ。本願の念佛なるが故に。此本願の佛名を稱念するは。即ち佛の慈悲を修行すると云ものなり。因て但當稱彼佛號。修彼佛慈といひ。必爲彼佛本願攝取との玉へり。故に此は。かの心妙觀を宗とする。觀經に明す。三諦無緣の

慈を修することにては、曾てなければ、何ぞ之を即心念佛なりと云んや。さて如此稱名念佛に付て、一心三觀を修する方までも收めん爲、四明、約心觀佛と云す。即心念佛との玉へり等とは、甚だ聞えぬ云分なり。四明の念佛會は、俗男兒女までも、簡ばず結し入玉ふが故。淨社疏の文明かに、たゞ本願事相の稱名にして、一心三觀を修する。即心念佛には非ず。談義本には、即心念佛を、亦約心觀佛とも云と。明かに云れしに、此度は其口を俄かに翻轉し、約心觀佛と云す。即心念佛との玉へりと云て、即心念佛と、約心觀佛とを、別に簡びわけらるゝは、何事ぞや。此は辨偽に、四明の即心念佛との玉ふは、即ち約心觀佛のことにして、専ら圓妙の觀念なれば、談義本の如く、口にて念佛申すことにてはなしと、重重難詰せられて、術なきに、跡より猫を畫き加んとて、かゝる妄料簡を巧み出さるゝものと見えたり。か様に時に隨て、立義を改張し、十疑論や、淨社疏杯を、重重僻解して、道俗を惑

亂せらるゝは、此ぞ眞に謗法の罪を造らるゝと云ものなれば、千萬笑止に存するなり。

庵主曰。彼人、文字學問、一向不埒なること、昔より今に同ことなり。此云分にては、但の字が、顛倒なり。當但とあるべきことなり。尤加様の言は、當の字の上にあることあれども、今彼人の見様にては、顛倒なり。譯文などしたる人は、初心なる人も、合點の行くことなり。去ども今但の字が上にある譯は、初心なる人は、ちとすみにくかるべきか。初心の人の思惟の爲なれば、其譯云す。

加様に云を、文字に精き人が、見たらば、それはどのことにてはなきにと、笑ふべけれど。

彈曰。此は例の人と論するに、自分が墮負する様になれば、文字穿鑿して紛らかさるゝ、くせが出たり。此方の云分にては、但の字顛倒とは、何と妄見せらるゝや。但の字當の字の上在ても、なる程此方の云分に符ふなり。但當稱彼佛號とあるは、此方の云ふ通り

に、淨土に往生せんと欲するには、一念本融等の圓解を開くことも、性に順じて修觀する様なことも用ひず。彼佛の名號を、稱すべきことをさへ但すれば、定て往生すると云ことなれば、これたゞ口稱念佛の一途ばかりと云意ならずや。道氣法師、對唐明皇、佛力法力、難以識情圖度、但當仰信而行といへる等の、但の字の如し、埒もなき文字尤めをして、識者に笑はれらるゝこと勿れ。

庵主曰。復次に具如經說○必定なり。此はめつたなる料簡なり。具如經說と云は、慥かに觀經なり。皆觀經の文なればなり。彼佛本願と云言に因て、無量壽經と云るれども、觀經にも本是法藏比丘。願力所成とあり。又然彼如來、宿願力故と云文あり。本願とどこが違や。攝取の言は、無量壽經の念佛往生第十八の願には、結句なきなり。彼經の攝取の言は、行や、法のことを云て、攝取衆生の言にてはなきなり。觀經の大慈悲是のつゞきに、以無緣

慈攝諸衆生とあり。ちと上には、念佛衆生、攝取不捨とあり。捨此報身等の言は、觀經に、捨身他世等とあり。又稱彼佛號の言は、觀經の下品上生、下品下生にあり。此程明に、觀經の文なるに、無量壽經を指と云るゝは、妄料簡に非ずや。

彈曰。此段の云分は、世間に公事する人の、負そうになれば、種種のことに、取てかゝり、かれこれ、もがり觀經と云るゝは、全く慥かならぬ妄言なり。其慥かと云るゝ證據に、觀經の、本是法藏比丘、願力所成等と云ふ文を引れたれども、此二文は、無量壽經にて發し玉ふ。本願の噂さを、此經にての玉ふものにして、正しく觀經に、本願を明し玉ふと、云ことには非ず。譬へば駿河の國の富士山のことを、近江の國にて、何かと噂さをすれども、此は近江の國の山に非ず。富士は駿河の山なるが如し。とかく、彌陀の本願と云出處は、即心の旨を明さぬと云るゝ、無量壽經の説なるこ

と。決定なり。因て今引れし觀經の。華座觀の下の妙宗に。彼佛因中。作菩薩比丘。名爲法藏於世自在王佛所。發四十八願。取此淨土。攝諸衆生。今願力成。故令所依華座若此と云て。法藏比丘。世自在王佛の所にして。四十八願を發し玉ふを引き。此本願力にて。所依の蓮華座が。かくの如く。微妙なりと釋し玉ふは。正しく無量壽經の説を。さし玉ふこと明白なり。但し觀經の中にも。世自在王佛の所にして。四十八願を發し玉ふ文あるや。其經文を承りたし。かく明白なる四明の釋を捨て。其方の文もなき。妄義に誰か依んや。此段の如く。本を忘れて末により。名に迷ふて義に味きは。平生自負せらるゝが如く。精しき學問とは。さら〜いひ難きなり。次に攝取の言。無量壽經にはなく。觀經に。念佛衆生。攝取不捨等とあるが故。此も觀經のことなりと云るゝは。此も亦名に迷ふて。義に味きことなり。本願にて攝取すと云は。念佛の行者を攝め取て。淨土へ引接し玉ふ義なれば。必

爲彼佛本願攝取との玉ふ。攝取の言が。無量壽經のことに。なるまじき様はなし。因て此第十八念佛往生の願を。淨影の遠師は。攝衆生願と科し。義寂法師は。攝取至心欲生願といへり。名に迷はず。義に明かなる名師達は。かくの如くなり。たゞ他師のみに非ず。四明尊者も妙宗に。於世自在王佛所。發四十八願。取此淨土。攝諸衆生との玉へり。此攝諸衆生とある攝の字は。正しく攝取のことならずや。四明の祖意。已に四十八願を以て。諸の衆生を攝取すと云。御合點なるが故。今も亦彼佛號を稱する人を爲本願攝取との玉へり。攝取の二字に取てかゝり。何かと無理を云るゝは。甚だ義に味きこと。亦これ自在坊風ならずや。次に捨此報身等の言も。觀經にあると云るゝは。亦名に迷ふて。義に味きことなり。無量壽經の中に。願生彼國。即得往生とのべ。本願の文には。欲生我國とあるが。本願に依て。極樂國土に往生するには。此娑婆界の果報の身を捨る義は。なしや否や。捨る義なしと

はえ云るまじ。もし捨る義はあれども。捨ると云文字がなき故なりと云れば。それこそ。文字に取付て。義に味き學問と云ものなれ。次に又稱彼佛號の言は。觀經の下品上生等にありとは。此も亦聞えず。前にも云し通り。下品に明せる惡人の稱名は。所觀の境とさせんが爲に宣玉ふて。修觀の行者に。自ら稱名念佛せよと。教へ玉ふには非ず。故に四明の萬人に。毎日自ら稱念せよと勸め玉ふ。淨社の念佛とは。同じからぬことなれば。今此下品の稱名を出さるゝも。亦名に迷ふて義に味きなり。上來段段辨する所の如くなれば。四明の淨社は。たゞ事相本願の稱名にして。全く即心念佛に非ること。明明白白たり。爾らば願共有情。即心念佛とあるは。別して心妙觀を明す。妙宗の序なるが故なり。總じていへば。事の口稱念佛をも捨ずして。

此度事の念佛を捨るには非すと云は。相符極成の過なり。此方に事の念佛を捨ると云ことは。曾

て云ぬなり等と云るゝは。此亦紛らかしの妄言なり。台宗には。事理の二行を。雙べ弘ることなるに。談義本に。四明は理觀の一道を。勤んとの御願ひなりと。明かに云れしは。事相の一道は。捨ると云ものならずや。もし捨るに非ずば。何とて。事理の二道とは云ず。たゞ理觀の一道と云れしや。不審なり。又即心念佛を。専らとせいでは。天台宗になりたる甲斐は。なきなりと云れし。専らとは。獨なり。專一の義なれば。二行の内。たゞ即心の理觀を。獨り專一にするを。天台宗と云るゝも。これ亦事相の一道は。捨ると云ものなり。因て辨偽に。片輪車と名けたり。此方には。四明は。理觀も。事相も。雙べて弘め玉ふと云に。其方には。たゞ理觀の一道と云る。此が何として。相符極成の過になるや。但し自分と。敵者との。立義不同なるを。相符極成の過と云。因明の文もあることなりや。出さるべし。

萬人に勧め玉ふこと。昭著たれば。四明はたゞ理觀の一道とある談義本は。此淨社の疏に對して。瓦の如くに破解し了れり。

庵主曰。念佛會の疏の跋を。書たる青山樓居士は。俗人なれども。文學ありて。賢きゆへ。能く四明の心を知て云。四明法智大老。起天台大教於既墜之後。使人見性成佛。猶且以此化人。是知此深法門。爲不可廢明矣と云り。四明の即心念佛を。達磨の直指人心。見性成佛と同じと思へり。且又此を以て萬人を化すと云り。奇特なることなり。俗人は。能く四明の心を知ども。彼人は。台宗ながら。出家ながら。四明の書を見ても。四明の心を知ぬなり。あさましきことなり。

彈曰。青山居士の跋文は。本萬人講の念佛會の跋なれば。稱名念佛のことをこそいへ。見性成佛を。普く僧俗男女に勸ると云ことには非ず。而るを猶且以此化人とある。此の字を。上にいへる見性成佛を指と見

て。四明の即心念佛を。達磨の直指人心。見性成佛と同じことと思へり。且又此を以て。萬人を化すと云ると云るは。甚だ癡き文義の見様にして。見性成佛の句に取付れたるは。此ぞ其方の節節云る。百題自在坊風なり。左様に云ては。禪錄杯の跋の様にて。曾て念佛會の跋とは聞えず。此は四明の事相本願の念佛を。勸化し玉ふことを云として。まことに天台の大教の。中比衰へて。既に地に墜たるを。再び屈起して。天台中興の祖師と仰がれ。人をして見性成佛せしめ玉ふ様なる。高德の四明尊者なれば。事相の稱名念佛杯は。意にも。詞にも。掛玉ふまじきことと思はるゝに。かゝる高德の四明にてさへ。猶且又此事の稱名念佛を以て。萬人を勸化し玉ふ。故に知ぬ此稱名念佛の深法門は。破廢すべからずとすること明かなりと云意なれば。此跋文は。四明の疏文と符合して。いよく事相の念佛と云こと炳然なり。かくの如く見てこそ。念佛會疏に跋せらるゝ。居士の本意もよくたち。上下

及ばず、

庵主曰。分注に。虎溪境觀要門には。即心觀佛。亦名約心觀佛と云りと。此は自分の指合になることを云れたり。先年數年の間の往復に。境觀要門を。自分の證據に引たることはなし。今こゝに引れば。指合が出来なり。彼人の立義は。約心觀佛は。一途の内觀。内觀と云は。妙境妙觀なりと云る。然に御信仰の境觀要門には。觀之一字。是能觀觀。心佛二字。是所觀境とありて。心佛の二字は。妄境なりと云に。灼然として相違す。今時は。初心の學者と云へども。彼人の立義を。曾て受取らず。最負偏頗の人は。各別。

彈曰。辨偽に。境觀要門の。即心觀佛。亦名約心觀佛と云を引たるが。此方の指合になることは。少しもなし。此文は。即心念佛のことを。即心觀佛といひ。亦名約心觀佛とあるが故。反て其方に。即心念佛を稱念として。念佛申すゝと云る。大指合なり。とか

の文義もよくすみ。猶の字もよく聞ゆれ。而るを四明の即心念佛は。達磨の見性成佛と同じことにして。此見性成佛を以て。萬人を化すと云るは。さてく文義も。文字の見様も癡きことなり。か様のことにて。世上の文字や。學問が癡しと云て。平生歎き。今も亦俗人は四明の心を知ども。彼人は。台宗ながら。出家ながら。四明の書を見ても。四明の心を知ぬなり。あさましきことなりと歎かるは。さて。うらはらなること。總じて人のことを。妄りに悪く云て。それが皆我身の上にあることなるを。自ら知られぬが。彼人の持病なり。出乎爾者。反乎爾者也と云ことを思ひ。今歎かるゝことは。一字をも改めず。皆これ其方の身の上のことなりと。痛く省みられよ。なを此外に。四明の放生文や。授菩薩戒儀。慈雲の放生慈濟門杯を引て。四明の淨社も。即心念佛なりと云るは。竝にこれ牽合附會の妄說にして。四明の所謂。漫指餘義遮掩過非ものなれば。今勞はしく辨するに

く他人の方を。妄りに悪くいひかけて自分の上を。少しも省みることのならぬ人なり。さて數年の往復に。境觀要門を。自分の證據に引れたることなし等とは。此は明かなる妄語なり。境觀要門は。先和尚も尊信せられし書にして。其說正しければ。此方處處に引證したり。今それを示さば。辨内外辨下九に。虎溪の境觀要門には。定境屬外。境便是。心不須攝佛歸心。方名約心觀佛と。釋せられたりと云て。なる程自分の證據に引たり。何ぞ數年の往復に自分の證據に引たることなしと妄語して。初學を誑らかさるゝや。但し辨内外辨は。往復書に非るや。但し彼辨を終に見られたることはなしや。又其方には。從來境觀要門に。糺繆ありと云るゝが故。内外拾遺の第五廿七に。境觀要門を引證して。糺繆なるには非すと辨じて。此方の義を成立したるを。亦見られざるや。彼に彈をせらるゝからは。見るはよく見られたれども。此度は墮負を救んとて。かく云るゝか。又二百難下四にも。今境觀

要門の全文を出さばと云て。其文を引き。此方の證據としたり。かくの如く往復書に。節節引て證據としてこれあるに。曾てなしと云るゝは。正しくこれ妄語なり。次に彼人の立義は。約心觀佛は一途の内觀。内觀と云は。妙境妙觀なりと云る。境觀要門に。心佛の二字は。妄境なりと云に。灼然として相違す等とは。此大に然らず。此方約心觀佛を。一途の内觀と云ことは。辨辨等に委く辨するが如く。妙宗十義書等の祖教に順するが故なり。此を常途の外觀と云るゝ。其方の立義は。不二門等の諸文に達することなれば。往復書をよく見たる學者は。全く受取ぬことなり。さて約心觀佛を内觀なり。内觀は妙境妙觀なりと云が。いかなれば。境觀要門に灼然として相違するや。此は其方に内觀と云を。從來大に誤て。所觀の妄境のことと。妄見せらるゝが故。かく妄難を構へらるゝなり。此方には。能觀の方なる唯心の内觀をこそ。妙境妙觀といへ。境觀要門の如くに能觀所觀を分別する時。此方。

觀の一字を能觀に非すといひ。所觀の境の心佛の二字を。妄境に非すと云たることは。終にこれなし。此方何れの處にか。左様に云こと有て。灼然として。境觀要門に相違するや。此も亦妄言なること灼なり。さて初心の學者と云ども。彼人の立義を。曾て受取ず。最負偏頗の人は各別とは。此も亦此方のことを云んより。全く其の方の身の上のことなりと省み知れよ。此次に不可思議の一心三觀のことを云るゝは。全く此方の轉計にても。墮負にてもなし。此はもと問詰録に。紛らかしたることをいひ。其後其方の不台點にて妄破せらるゝことなるが故。此方に兼て委く筆記し置て享保丙午の秋。十義書講談の時。具さに辨斥したれば。一會の大衆の皆聞れたることなり。今亦辨すべけれども。此は別の所論にてもあり。長くもなれば且く略す。時等もあらば。筆記をも梓行し。重て辨斥すべし。

庵主曰。辨偽に。さて上に即心念佛を○決してなる

まじきなり。此段は。なにとしたるわけもなきを云るゝや。諦觀を云ず。觀せずして。南無阿彌陀佛と念佛申すを。即心念佛と云ことは。此方には曾て云ず。それは誰の立義なるや。此方に云ぬことゆへ。其明文を出すことは。申さるゝ通り。決してならぬなり。

彈曰。此方に曾て云すと云るゝは。亦是例の妄言なり。此辨偽は。談義本の初座を難じたるものなるが。かの初座の初に。淨土も彌陀も。即ち我心なりと知て。念佛申して。往生を求るが。即心念佛なりと。明かに云れたり。今此即ち我心なりと知るとは。開解の解知にして。未だ修行の妙觀には非ず。次に其行相を。念佛申してと。ばかり云るゝは。たゞ南無阿彌陀佛と申すことなれば。此明かに知て後の行を。三諦三觀も云ず。觀すとも。照すとも云ことなく。たゞ念佛申すを。即心念佛なりと云るゝこと。了了分明なるに非ずや。而るを今。諦觀を云ず。觀せずして。念佛申すを即

心念佛と云ふことは、此方には曾て云す。誰の立義なるやと。餘所ごとの様に。とぼけて妄言せらるゝは。辨偽に於て。四明何れの處にか。南無阿彌陀佛と念佛申すを。約心觀佛。即心念佛なりと。示し玉ふ文あるやと。急切に詰問したる所の。明文を出すこと。決してならぬが故。かくとぼけたる妄言をせらるゝものゝえたり。

庵主曰。談義本に。亦約心念佛。

念佛の念の字。談義本に。觀とあるは筆誤なり。今改めて念の字に作。即心とも云。約心とも云ことは。境觀要門の如し。觀の字。筆誤なることは。旁觀記。台宗綱要にて。知るることなり。彼の兩書に。觀佛にも。事理あり。稱名にも。事理あることを記し置ばなり。

とも云。亦理持とも云なりと擧て置て。やがてつひて。即心念佛は。唯心法界を知て。念佛申を。即心念佛と云なりと云すがたを。具さに記せり。然に次

下に云ることをば。かまわす。上に標し擧たる分計りを取て。難せらるゝは。百題自在防風の難なり。可笑可憐。

彈曰。此段の初に。約心念佛と云て。分注せらるゝは。さて驚き入たる云分。轉計にてもあり。墮負にて。妄言にてもあり。實に無慚愧の至なり。か様に無慚愧なる云分の出るは。もと談義本に。即心念佛を。亦約心觀佛とも云と談じ。而して約心觀佛と。全く同じき四明の即心念佛を。初に標し出しながら。四明の如くに。佛の相好を。唯心法界と觀念することは。一言も云す。たゞ口にて。念佛申すことのみを。始終云るゝが故。四明の即心念佛と。初に標し出されしとは。大に相違すと。辨偽に重重詰難したるを見て。談義本の本宗。忽ち墮負するが故。千想萬思せらるれども。已に即心念佛を。亦約心觀佛とも云と。慥かに云れたることなれば。今さら約心觀佛とは違ふて。觀念することに非ずとは云れず。約心觀佛と同じと極め

ては。口にて念佛申すゝと。始終云れし談義本が。墮負する故。此に於て。妄料簡を運らし。談義本に。亦約心觀佛とも云と。慥かに云れし所の。觀の字を。偷かに念の字に作りかへ。即心念佛を。亦約心念佛とも云と改れば。念の字は。觀念稱念に通するが故。談義本は。其中の稱念の方を取て。念佛申すと云たる様に。跡より上手に紛らかし。それでも人情が強くて。我誤れり。我書かへたりとは。曾て云す。觀字筆誤なりと。心もなき筆に。誤りをにじり付らるゝは。毛錐子が身になりては。近比迷惑なることと。思はるゝなり。談義本梓行してより。今歳三年に及び。三千部に垂んとして。弘通するまで。何も云す。今春辨偽の詰難を見て。此度俄かに觀の字筆誤なりと。いひ出さるゝは。これ手のわるき轉計妄言にして。觀の字にては。念佛申すゝと云れし義の。墮負なること決定するが故なり。か様に俄かに文字を。跡より改めらるゝは。かの山外の。初には直顯心性といひしに。四明に

詰難せられて。後に直顯法性と。偷かに改るが故。四明尊者。之を破して。若轉改有路。終不偷換文字。蓋是路極。遂至於此との玉ふが如し。かゝることを云て。山外風を學ばるゝは。豈無慚愧の至り。ひきやうなることに非ずや。且此度俄かに書改られし通り。念の字に作りては。又大に不審あり。談義本に。亦約心念佛とも云。理持とも云なりと。云るゝ所の理持とは。彌陀經要解等に云て。これあるが。約心念佛と云こと。天台四明の疏鈔等。何れの處に云てこれあるや。明かに其文を承りたし。此方には約心觀佛と云ことは。處處の文に見たれども。約心念佛と云ことは。終に見たることも。聞たることもなし。必ず珍しき約心念佛と云てある處を。示されよ。理路極ても。人情強くて。なを誤れりと云ぬ人は。後には。か様に妄言妄義を。巧み出すものと見えたり。慎むべし。さて觀の字筆誤なることは。旁觀記。台宗綱要にて。知ることなり等とは。此れは一圓聞えぬこと。彼兩書

に。觀佛にも事理あり。稱名にも事理あれば。何とて此談義本の觀の字は。筆誤にして。念の字なることが知るや。紛らしたる云分。不審なり。亦約心觀佛とも云とある觀の字は。即心念佛の念の字。専ら觀念にして。稱念にあらぬと云。此方の的據。其方の違文にして。辨偽に詰難する所の眼字なれば。此觀の字の有ん限りは。念佛申すと云る。稱念の猫を。畫き加ることならずして。其方の墮負に極るが故。術なさの餘りに。人目をもかへり見す。別して眼なる觀の字を。念の字に作りかへ。念の字は觀稱に通ずるが故にと云て。俄かに稱念の猫を畫き加え。談義本は。其中の稱念の方を勸ると。妄料簡を巧み出さるゝは。庵主の肺肝の。よく見ゆる所にして。墮負せられしこと。此筆誤の段にて。別してよく顯るれば。初學心を留て審かに見るべし。次に即心念佛は。唯心法界を知て。念佛申すを。即心念佛と云なりと云すがたを。具に記せり等とは。なる程左様の義を。記してあれども。此

云分が不埒なることなる故。此方より難するなり。四明の即心念佛は。先に唯心法界の妙解を開き。淨土も彌陀も。我心なりと知て。而して後に。佛の相好を所觀の境とし。心妙觀を以て。念念に觀すること。妙宗鈔に明す所の如し。而るに談義本に。知て我心なりと知てとある知るとは。且く妙解の分齊なり。知解の後の行を。佛の相好を。所觀の境とすとも。心妙觀を以て觀すとも。一心三觀にて觀念すとも。曾て云す。たゞ念佛申すとばかり記されしは。大に四明に背くが故。全く受取ぬことなり。開解定境用觀は。觀道の網格なるが。開解の知ることばかりを云て知て後の用觀の。觀念することを云す。たゞ念佛申すとばかり云を。何とて四明の即心念佛と云べきや。次下に云るゝことを。此方に。かまはぬには非ず。故に此事は。辨偽の四葉。廿五葉の左。卅二葉に。委く辨じたり。之を見られざるや否や。次下に云るゝことを。かまはぬには非ざるを。百題自在坊風と。無理に嘲けらるゝは。明かなる

妄言なり。此方を自在坊風と嘲らんよりは。此論の別して眼なる觀の字を。偷かに書かへて。山外風を學ばるゝは。此ぞ其方の云るゝ可笑可憐ことなれば。早く慚悔せられよ。

庵主曰。慈雲の示し。事の念佛には非すと云にては。なけれども。譯あることなり。先示人念佛方法と云。題號に大に不審あることなれども。彼人などは。曾て氣が付ぬと見へたり。佛菩薩より。列祖の言句。聖默然聖說法。人に示すにあらぬことはなきなり。孔子吾無行而不與二三子者と。宋儒注して曰。聖人作止語默。無非教也とあれば。世教すらかくの如。況や佛法をや。況や又方法と云が。人の示にてあるまじき様はなし。然にわきに見當ぬ。示人の二字を加へ玉ふは。何ごとぞや。此を心得べき様は。總じて一切に亘る教なれば。示人の二字を加ふことはいらぬなり。別して一類一縁の爲に。示し玉ふなり。慈雲の本意には非るなり。慈雲の本意

は。即心念佛なり。

彈曰。談義本に。四明は理觀の一道といひ。理觀を専らとせいで。天台宗になりたる甲斐はなしと云るゝが故。辨偽に。四明尊者の淨社を出し。慈雲大師の念佛方法を引て。理觀の一道ばかりに非ず。事相の稱名念佛をも。兼て弘め玉ふと辨じたるに。此度明かに。慈雲の示し。事の念佛には非すと云にてはなしと云るゝは。正しく此方の義に首伏せられて。慈雲の弘め玉ふ念佛は。事相の稱名と云こと。決定したれば。まづ珍重なり。さて慈雲の示し。事の念佛なるは。譯あることと云るゝ。其譯を見るに。示人念佛方法とある。示人の二字に取付て。總じて一切に亘る教へに非ず。別して一類一縁の爲に。示し玉ふ方法なれば。示人の二字を加へ玉ふなりとは。此は術なさの餘りに。大に顛倒したることを云るゝなり。此題號に。彼人に示すと云。此人に示すと云あらば。一人一類の爲に示し玉ふものと云べけれども。簡別の詞なく。た

ト示人とあるは。總じて廣く一切に亘る教示なること明かなり。譬へば富士の山とか。愛宕の山とかいは。たゞ一山に限れども。たゞ山とばかりいへば。廣く一切の山に通じ。山鳥とか。庭鳥とかいへば。一鳥のことなれども。たゞ鳥と云は。一切の鳥に亘るが如し。もし強て論語を引き。聖人ノ作止語默。無非教也とあるが故。示人と云は。一類一縁にして。一切に亘る教へに非すと云れば。大學序に。大學之書。古之大學。所以教人之法也と云も。聖人の作止語默。教へに非ることなきに。此別して教人とあるが故。一類一人の爲に教へ示すと云ことなりや。もし左様に云れば。自天子之元子衆子。以至公卿大夫。元士之適子。與凡民之俊秀。皆入大學而教之とあるは。如何。又孟子に。教人以善謂之忠といへるも。別して教人とあれば。善を教ふことは。一切に亘る教示に非ず。たゞ一類一縁の爲なりと云んや。不審なり。題號已にかくの如く。たゞ示人と有て。一切に亘るが故。其別文にも。故今

普示稱佛之法とあり。此普示とある普の字を。いかと思はるゝや。石鼓雲師。通爲一切。故云普と釋し玉へば。普示稱佛之法とあるは。通じて一切の人に。事の稱名念佛の方法を。教示し玉ふものなり。而るを示人とあるが故。一切に亘る教へに非ずとは。これ顛倒せる云分ならずや。かく顛倒せることを。いひながら。彼人などは。曾て氣が付ぬと見へたりと。僞慢せらるゝは。尤もならぬこと。なる程此方には。曾て氣の付ぬ顛倒の妄義なり。次に慈雲の本意は。即ち心念佛なりとは。交聞えぬことなり。慈雲師に限らず。總じて台宗の意。即心の理觀が本意なることは。誰か之を遮せんや。今はその本意か。旁意かと云論には非ず。たゞ理觀の一道といひ。理觀を専らにすと云るゝ故。此方より。四明も慈雲も。理觀の一道ならず。事の稱名念佛をも。兼て弘め玉ふと辨じたるに。此度慈雲の示し。事の念佛には非すと云にてはなしと。首伏せられたれば。辨偽の能破能成し。理觀の一道と

云。其方の立義。明かに墮負したり。慈雲の示し。事の念佛に非ずとは。え云す。今の所論にてもなき。本意穿鑿をして。紛らかざるゝは。豈聞えぬことならずや。

庵主曰。又慈雲の心からは。事の念佛の方法が。即ち眞に即心念佛の方法になるなり。かくの如く云は。私の料簡に非。行願二門の中に明に見へたり。上に一心法界。心具心造の圓理を談じて。下に如此則方了。廻セドモ神億刹。實生乎自己心中。孕質九蓮。豈逃乎刹那際内。○との玉へり。即心念佛の心分明なり。然に下に至て。問。如上所明。妙理圓極。爲世人盡須觀行。然始生耶。答。此不然也。○慈雲の心は。事の念佛が本意にてはなし。又慈雲の心よりは。事の念佛が。即ち理の念佛になるなり。加様の譯。彼人は曾て知られず。四明。慈雲。念佛とさへの玉へば。事の念佛のことと計り思ふ。あさましき見解なり。

彈曰。慈雲の心からは。事の念佛の方法が。即ち直に即心念佛になるなりとは。これ其方の私の料簡にして。慈雲の心より。自ら著はして。示し玉ふ方法の中には。左様のこと一言も見えず。かの方法は。たゞ事の稱名念佛にして。高聲念佛。せめ念佛までを。勧め玉へども。此を即ち直に即心念佛になせども。一心法界と觀念せよとも。の玉ふことは。終になきなり。次に行願二門を引證して。即心念佛の心分明なりとは。此も亦漫指餘義。山外風なり。行願二門の文に。即心念佛の心が分明なれば。何として。示念佛方法文が。即心念佛の心になるや。從來云が如く。天台には。理觀事相の二途あるが故。行願二門には。圓理を明し。念佛方法は。事相の稱名を明して。其明す所。各異なるに。慈雲の行願二門に。圓理を明すが故に。此慈雲の念佛方法も。即心念佛なりと云るゝは。目を以て耳とし。我目にてよく物を見るが故。我耳にてよく物を見るべしと云様なることなり。次に引るゝ

所の行願二門に。問。如上所明妙理圓極。爲世人盡須觀行。然始生耶。答。不然也といへる問答にても。慈雲の心は。理觀事相の二途を立て。皆盡く妙理圓極の理觀の一道のみを修するに非ず。もし其方の如く理觀の一道を専らとせば。答ふ然りとなくては。叶はぬことなるに。不然と答へ玉ふは。理觀の一道を専らとせず。事相の稱名念佛をも。用ひ玉ふこと明かにして。かの念佛方法と。よく符合せり。次に慈雲の心は。事の念佛が本意にてはなしとは。此は此方にもよく合點のことなるに。又紛らかしの本意穿鑿をせらる。此は相符極成の過にてはなしや。次に慈雲の心よりは。事の念佛が。即ち理の念佛になるなりとは。此は場の違ふたることなり。慈雲師の理觀を修し玉ふ時。事の念佛を。唯心法界。即空假中と。觀念し玉は。なる程事が即ち理の念佛になるべし。然れども今示念佛方法玉ふ。慈雲の心は全く理觀を用ひず。たゞ事の稱名念佛。たゞの高聲念佛なること。文義明白

なり。此方は此明白なる方法に依て。理觀の一道に限らず。たゞ事の稱名をも。勸め玉ふと云ことなり。左様に理觀を修することに取付て。餘所ことは云す。次に四明慈雲。念佛とさへの玉へば。事の念佛のことと計り思はる。あさましき見解なりとは。此れ例の無理なる云かけなり。此方念佛とさへの玉へば。事の念佛のことと計り。思ふたること。云たことも曾てなし。從來四明慈雲の妙宗等に。念佛との玉ふは。全く稱名念佛には非ず。これ圓妙の理觀なる。觀念の念佛なり。淨社や。方法に。勸め玉ふは。事相の稱名念佛なりと。二途を分て。重重云たること。辨偽の中明白なるに。其明白に云たる趣きは。をしかくして云す。四明慈雲。念佛とさへの玉へば。事の念佛のことと計り思はる。あさましき見解なりと云るは。止訛に見立し。云かけが御すきとある持病が。今に平癒せずして。いかに墮負するが。悲しきとて。極樂往生の法門を議論するにも。かく無理なる云かけ。妄言せらるる

は。反てあさましき心底。恥かしきこと。思はるるなり。さて此次に辨偽には。慈雲大師の。晨朝十念法も。即心唯心の名もなく。三觀三諦の言もなく。たゞ事相口稱の念佛なりと。文を引て具さに辨じたるに。一言の返答もなきは。已に屈伏せられしが故と見えたり。もし屈伏はせず。此も即心念佛なりと云れば。唯心の名もなく。諦觀をも云ぬ。即心念佛もあることなりや。もしなきならば。餘りに餘義をさす。山外風にてなく。正しく此十念の中に。即心唯心や。三諦三觀と云文言を。明かに出さるべし。

庵主曰。さて十疑論のこと。兎角。彼人は文句計りに取りつひて。心を得ぬ學問なり。十疑論の通りは。念佛の事の方を。述玉へるものなり。それを圓人が修すれば。即ち即心念佛になるなり。彼論の第二。諸法無生の疑の答は。見られぬか。談義本の第四座の。往生無生の心に非や。談義本。能く十疑論の心に契たるに。十疑論を貴で。其心を述たる談義

本を。破さるるは。法には依ずして。人計りを論せらるるゆへ。佛の教に背きたる。妄料簡なり。

彈曰。談義本に。四明は理觀の一道。台宗は理觀を専らとすと云るが故。此方より。台宗には。理觀の方と。事相の方と。雙べて二途を立るが故。觀經疏鈔は。理觀の方の念佛。十疑論は。事相の方の念佛にして。たゞ理觀ばかりに非ず。事の本願の念佛をも弘ると云證文に。明かなる十疑論を引て辨じたるに。此度十疑論の通りは。念佛の事の方を述玉へるものなりと云るは。明かに此方の義に歸伏せられたれば。復珍重なり。此方は。十疑論の文により。論文の心をよく得て。此れは事の本願の念佛を明し玉ふと云に。此を心を得ぬ學問なりと嘲けらるるは。亦無理なる云かけなり。辨偽に云所。何くか論文の心に叶はずして。心を得ぬと云るや。其處を承りたし。次にそれを圓人が修すれば。即心念佛になるなりとは。此れは墮負を紛らかさんとて。場の違ふたことを云るるな

り。理觀を明す場ならば。事の念佛を修するが。即ち即心念佛になるなりと云べけれども。今の十疑論は。たゞ事の方の稱名念佛を。述べ玉ふばかりにて。此を即ち即心念佛になせども。唯心三諦と觀念せよともなきこと。論文天日の明かなるが如し。もし此方を即ち即心念佛になると云ねば。心を得ぬ學問なりと嘲られば。所引の十疑論にも。圓人が修すれば。即ち即心念佛になると云ことは。一言もの玉はぬ程に。宗祖天台も。亦心を得ぬ學問なりと云れんや不審なり。明かに論文の心に違ふたる。妄料簡を構へながら。彼人は心を得ぬ學問なりと云るゝは。うらはらなること。此云分も。亦其方の身の上のことなりと省みられよ。次に彼論の第二。諸法無生の疑ひの答へは。談義本の往生無生の心に非ずや。能く十疑論の心に契ひたるに。其心を述たる談義本を破さるゝは。佛の教へに背く等とは。此は筋の違ふたること。亦これ例の云かけなり。談義本の第四座に。往生無生なることを談せら

るゝを。辨偽の中に破したることは。始終一言もなし。而るを今往生無生の心。能く十疑論に契ひたるに。其心を述たる談義本を破するは。佛の教へに背くと云るゝは。分明なる妄語。云かけならずや。辨偽をよく見たる人は。さても云かけが。御すきと。大に笑ふべきなり。又辨偽には。彼論の第四の疑の下の文を引て破したるに。今彼論の第二の疑の下に據て答へらるゝは。豈筋の大に違ふたることに非ずや。これ亦漫指餘義。遮掩過非。山外風を學ばるゝなり。

菴主曰。嗚呼天台の宗教盛に富るかな。淨土之教。至于天台。其說大備と。古人の稱歎せるは。正しく此が爲なり。此れ亦自在坊風のこと。官僧の小僧衆の。論議法門風のことなり。淨土指歸を書き出して。見せたらば。心熱し面赤かるべし。彼書に云。歷代諸師著述淨土傳。記淨業之文。無非祖聖遺誥。淺深工拙。片言隻字。同歸於善。天台智者大師。悟法華三昧。說己心所行。曰一心三觀直示一心當

處即空。全體即假。亦空亦有。非空非有。不可湊泊。不容擬議。心路絕處。即名爲佛。故淨土之教。至于天台。其說大備。昭昭猶揭日月。而耀太虛也。これを見られよ。歷代の諸師の淨土之教は。工拙あり。天台計りが一心三觀を以て。淨土の法を修するゆへ。淨土之教。至于天台。其說大備と云なり。尼入道をも。もらさぬゆへ。其說大備と云にては曾てなきなり。

彈曰。此段。とくと辨じたらば。反て其方の心熱し面赤かるべしと。思はるゝことなり。此淨土指歸の意は。天台已前の歷代の諸師の。淨土を述るは。淺深巧拙。同く善に歸すれども。たゞ事の念佛にして。圓妙の理觀を云ざれば。未だ備らざることあり。天台大師に至て。十疑論には。事相の本願念佛を明し。觀經疏には。歷代の諸師の。未だ云ざる。淨土の依正を。所觀の境とし。一心法界。即空假中と。觀念する理觀を明し玉ふが故。事理の二行闕ことなく。よく備足する

を以て。淨土之教至于天台。其說大備といへるなり。もし其方の如く。天台計りが。一心三觀を以て。淨土の法を修するゆへ。理觀を専らとし。たゞ理觀の一道ばかりならば。それにては。事の稱名念佛が漏るゆへ。其說大備とはいひ難し。此方の意は。已に事理の二行大に備れば。上上根は勿論。下下根の尼入道をも。漏すことなき。天台の宗教と云ことなり。今無理に悪く取なして云るゝが如く。尼入道も漏さぬゆへ。其說大備と云ことにては曾てなし。とかく人のことを悪き様に。いひ落したがるゝくせが有て。意地のよからぬことなり。さて其方の書れし。眞盛上人傳論を見るに。淨土之教。至于天台。其說大備。良以境觀雙明。事理兼運也といへり。此傳論は。此方の云が如く。天台大師は。歷代の諸師と異にして。淨土の依正を。所觀の境とし。即空假中と觀すれば。境觀も雙べて明し。理觀の一道ならず。理觀も事相も。兼て運ぶを以て。其說大備と云ことなり。傳論には。かくの

如く。事理兼運ふといひながら。談義本には。理觀の一道。理觀を専らにすといひ。此度は天台計りが。一心三觀を以て。淨土の法を修するゆへ。其說大備と云るは。前後の云分相違せり。此も四明の。良爲心無的解。隨時改轉と破し玉ふ。山外風と見ゆるなり。かゝる自言の相違を。内に自ら省みれば。最も恥しきことなれば。實に心熱し面赤かるべし。此にても。熱せず。赤からぬならば。それは無慚愧の人なり。

庵主曰。至極愚癡無智の尼入道は。もれても。少もかまわざるなり。滋賀のあたりにて。大綱を引を。舊と見られざるか。聞れざるか。鯉鮒。網に留をこそ取。だんぎぼうなどの。にげていぬるは。少もかまわぬなり。去ども世間に。談義ぼう賣と云ものあれば。漏るるを取人もあるなり。其人は獨身の。その日すぎの。あさましきしよざいなり。彼人の念佛會の勸は。談義ぼう賣の様なることなり。佛教を魚を取に喩るは。勿體なき様なれども。天台大師は。敷

八教綱。巨法界海。懼其有漏と釋し玉へり。荆溪は。華嚴經を引て張佛教綱。巨法界海。漉天人魚。置涅槃岸との玉へり。

彈曰。此段はあはぬ譬へを出し。心入のよからぬ云分なり。世間の綱を引者。たゞ鯉鮒を取て。だんぎぼうを。かまはぬは。いかなることぞや。鯉鮒は市に買るに。價がよければ。我身を賣ること多く。だんぎぼうは。價少くて。我身を賣けぬ故。いぬるを少しも。かまはぬなり。佛の衆生を見玉ふは。綱引の我身の利養を専らとするには同じからず。一切衆生を。皆悉く吾子と愍み玉ふなり。まづ世間の親の。子を思ふを見らる子のことは。さのみ思はず。病もなく。達者にて。福分あり。其心平等なれども。病もなく。達者にて。福分あり。目も見えず。足も立す。貧乏子は。別して愛愍を加ふ。此があり難き。親の慈悲心なり。又文王の政を發し。仁を施すも。鰥寡孤獨の告ることなく。便りなき者を。先にし玉ふことあり。もし其方の如く。綱引者に譬へて。愚癡無

智の尼入道の漏るるは。少しもかまはぬならば。親の心も。病なく。達者にて。福分ある子は。親の賣けとなれば。之を偏へに寵愛し。病もあり。目も見えず。足も立ぬ子は。少しも賣けとなることなく。反て親の厄害になるが故。死なば死にしたい。いなばいにしたいにして。少しもかまはぬと云れんや。さて。無慈悲なる心入なり。親の慈悲かくの如くなれば。況や佛はなを然り。因て涅槃經に。譬如一人而有七子。是七子中。一子遇病。父母之心。非不平等。然於病子。心則偏重。如來亦爾。於諸衆生。非不平等。然於罪者。心則偏重。於放逸者。則生慈心。不放逸者。心則放捨と宣玉へり。尼入道の愚癡無智なるは。過現の罪業重くして。煩惱の病もあり。智慧の日も開けず。修行の足も立す。法財に貧しき者なれば。佛弟子たらん人は。及ばすながら。分に隨て。佛の慈悲心を學んで。此等の衆生をも。捨す漏さず勸化して。綱引の心とは。異なるべきものなり。次に彼人の念佛會の勸めは。談義

ぼう賣の様なることなりとは。大に尤ならず。天台の十疑論には。十方恒沙の諸佛まで。舌相を舒て。證成し玉ふとて勸め玉ひ。四明尊者は。俗男俗女まで。一萬人を結して勸め玉ふ。本願の念佛なるが故。今も亦祖訓に順じて尼入道をも簡はず。數千人を會して。稱名せさせ。極樂國土に。往生せしむる念佛會なれば。之を聞れたらば。隨喜讚歎せられても。過にはなるまじきことなるに。重重法然流の念佛を勸ると云て。他宗のことを勸る様にいひなして嘲り。此段にては。彼人の念佛會の勸めは。談義ぼう賣の様なることと貶せらるは。さても。あるまじき云分。尤ならぬ心入なり。もし事相の念佛を勸るが。談義ぼう賣ならば。天台の十疑論。四明の淨社。慈雲の方法も。竝に皆談義ぼう賣りなるや。又此等の宗祖も。悉く法然流の勸めなりと云れんや否や。吾宗の祖師のみに非ず。本師釋尊の。阿彌陀經や。無量壽經を説せ玉ふも。即心の旨を明さぬ經説なれば。釋尊もまた談義ぼう賣な

りと云れんや。此返答、紛らかさず、分明に承りたし。觀經の理觀や。理持の稱名は、淨土宗と。大に異なれども。事相本願の佛名を稱念して、極樂國土に、往生すと云ふことは、もと阿彌陀經、無量壽經の佛説にして、自他宗共に、此一つの佛説によるが故。天台流も、法然流も同じことなり。其方の台宗綱要にも、事持と云は、餘念を起さず、心を彌陀の名號にかけて、南無阿彌陀佛と唱るなり。此邊は、善導法然の勸めと。かはることなしといひ。此度も、彌陀の本願ゆへ、念佛すれば必ず往生すと云ふ事邊は、淨土家と相替らすと。度度初學の爲に談せしことなりと云れずや。已に事の稱名の邊は、天台と淨土家と、相替らぬことならば、此方のは、天台流と云るべき筈なるに、天台海とは、一言も云ず。たゞ法然流くと。重重云るゝは、そこ意地のよからぬ云分なり。此方には、たゞ事の念佛計りに非ず。從來幾度か、法華をも講演して、天台の教觀、開顯の圓解を、普く雲集の大衆に勸め、幾度か

妙宗鈔をも講談して、四明の即心念佛を弘通し。智解ある人には、心妙觀を勸るに、か様のことは一言も云ず。四明の意に味くして、事の念佛計りを弘ると云るゝは、明かなる妄言なり。かゝる妄言を云かけて、人を無理に悪くいひ落す様にせらるゝ。從來のくせが、年よられても、今に直らぬは、殘念なることなり。次に引れし天台荆溪の文は、文を見ること、甚だ變きが故。其方の大違文なることを、知ずして引れたり。天台大師、敷八教綱、亘法界海、懼其有漏との玉ふは、八教の網を張て、法界の衆生を、一人も漏さず、漉ひ取る御心にて、懼其有漏とあるに、其方には、圓教の中の、事の稱名念佛の網は張ず。もれても少しもかまはぬと云るゝは、天台の文に、顯然として違背すれば、我持たる及にて、我身を害する様な引證。其方の云るゝ、視而不見可憐なり。又荆溪大師、張佛教綱、亘法界海、漉天人魚、置涅槃岸との玉ふは、事の念佛も、亦佛説なれば、これ佛教の網なり。此佛教の網

にて、漉天人魚とあれば、愚癡無智ながら、尼入道も人間にてはなしや。已に人間なるからは、漏さず漉ひ取る。荆溪の御心なるに、もれても少しもかまはぬと云るゝは、また荆溪の文に、違背すること顯然なり。菴主曰、慧心の僧都のことは、末にて云べし。繪詞傳のことは、受取れぬことなり。總じて彼傳は、先頃少讀て聞きたるに、笑止なること多し。法然上人の道徳を、顯さんとて、書きたる傳なるが、結句法然上人の、威光のさがることどもがあるなり。彼時分の叡山の學問は、殊の外衰へて、譯もなかりしことどもなり。彈曰、慧心のこと、末にて云べしと云るゝは、廿八葉の左に、慧心の先徳は、慈慧大師、四人の上足の中の第一なり。弘め玉ふ所の念佛、慈慧大師と、同じく即心念佛なること決定なり等とある處のことなるべし。此れは一圓聞えぬことなり。まづ慈慧大師の念佛を、西方の佛を、唯心法界と觀する所の、即心念佛な

りと云るゝは、全く信受し難し。縦ひ即心念佛にもせよ。衆生の根性不同にして、師匠は座禪すれども、弟子は經をよみ、師匠は經をよめども、弟子は陀羅尼を誦することあれば、慈慧大師が、即心念佛なればとて、弟子の慧心も、決定即心念佛なりとは、これ推量の説なり。かゝるあて推の説は、いか程決定なりと云れても、さら／＼決定なりとは思はれず。古へ覺超僧都、直に慧心の僧都に相見して、所行の念佛は、これ事を行すとせんや、これ理を行すとせんやと問るゝを、慧心の僧都、自ら答へて、我たゞ稱名念佛を行するなり。往生の業には、稱名もともたれりと、明白の玉へば、かく明白なる慧心の直説を捨て、其方のあて推を、誰か決定なりとて、受取ものあらんや、入ざる妄説を構へらるゝなり。慧心の直説明白なれば、法然流に限らず、天台の先徳も、事の稱名念佛を行じ玉ふこと、亦明白なり。さて彼傳は、法然上人の道徳を、顯さんとて、結句法然上人の威光のさがることども

もがあるなり等とは。此は例の餘所ごとを云て。紛ら
 かざるゝなり。慧心の明白なる直説なれば。此を直に
 誤りと云ことはならず。繪詞傳には。よからぬことが
 あり。彼時分の叡山の學問は。衰へたれば。慧心の問
 答のことをいへる處も。誤りにてもあらんと。餘所な
 がら聞ゆる様に。紛らかす合點と見えたれども。左様
 の妄料簡にて。紛らかすことはなるまじ。もし慧心の
 僧都。自ら覺超僧都に。たゞ稱名念佛を行すると。答
 へたることは曾てなし。我は本より。即心念佛を行す
 との玉ふとある。慥かなる書の。證文を引て云るゝな
 らば。さては繪詞傳は誤りなり。慧心の所行は。即心
 念佛決定なりと。深く信受すべけれども。法然上人の
 道徳を顯さんとて。結句威光がさがる坏とある。餘所
 ことの紛らかしにて。明白なる慧心の直説を。捨んと
 することは。堅くなるべからず。

菴主曰。眞盛上人のことは。色色のことも。之有な
 り。余が著せる西教寺中興開山眞盛上人傳論草堂雜
 錄第三

に載すに記すが如し。眞盛上人の念佛は。隨他意の邊
 にて。至極愚癡の輩には。事の念佛を。勸め玉ふこ
 とあるべし。上人の本意。自行の勤めは。決定して。
 即心念佛なるべし。因て傳論の末に。上人既宗智
 者。博涉群籍。則豈不欲念佛據於心性。持律依於佛
 制乎と。いへり。今又思ふに。淨土院にて。傳教大
 師の夢の告を蒙り。慧心の往生要集にて。自利利他
 すべしとのことなれば。上人の勸。即心念佛なるこ
 と。決定なるべし。云云

彈曰。此段も。亦あて推にして。彼上人の傳とは。大に
 相違せり。かの傳には。眞盛上人の。一代の自行化他
 を明すに。即心念佛と云ことは。一言一句も終にこれ
 なく。皆悉く事の稱名念佛なるに。今云るゝ意は。上
 人平生は。即心念佛を勸め玉ひ。至極愚癡の輩に對す
 る時は。事の稱名念佛をも。勸め玉ふことあるべしと
 云意なれば。かの傳とは明かに相違する妄言なり。
 さて其證據に。眞盛上人傳論を引れたり。此傳論と

は。其方自分の作ならずや。後にも。自分の作の。行業
 記を證文に出ささたり。此は可笑こと。世上にて。縁
 者の證人さへ。人の慥かには。思はぬことなるに。他
 人と議論するに。自作の文を引て。自分の義の證據と
 せらるゝを。誰の有智なる人が。受取べきや。但し其
 方の作をも。佛祖の教文の様に。頂戴信受する人もあ
 るべしと思ふて。引るゝや不審なり。いま眞盛上人傳
 論に。記すが如しと云るゝ程に。かの傳論を見るに。
 凡其所示淨土之法。專爲愚士庸人。而無有理持妙觀
 之説といへり。此傳論に。凡其所示すとある。凡の字
 は。上人一代の淨土の教示を。總じてさしたるものな
 り。又專爲愚士庸人とあるは。上人一代の示しは。上
 根利智の爲なる。即心念佛にてはなく。専ら偏へに。
 愚癡凡庸の人の爲に。事の稱名念佛を示し玉ふと云
 意なり。因て次下に。無有理持妙觀之説と。明かに
 結せられたり。此論は。かの傳の始終にはよく符合
 し。此度云るゝとは。大に相違すること。水火の各々

異なるが如し。此に知ぬ。傳論は本氣にて。傳記の通
 りを。正直に書れ。此度は妄料簡にて。あて推量を云
 て。墮負を紛らかさるゝことを。四明尊者。山外を破
 して。只將前後語詞勘驗。則欺詐顯然。還知慚恥否
 との玉へるを。此處にて亦云たきなり。次に上人の
 本意。自行の勤めは。決定して即心念佛なるべしと
 は。此もかの傳記には。全く見えぬことなり。決定し
 て亦あて推なるべし。次に淨土院にて。夢の告を蒙
 り。往生要集にて。自利利他すとのことなれば。上人
 の勤めは。即心念佛なること。決定なるべし。往生要
 集の本意は。理觀理持なること。文に明かに。又無相
 の廻向を勝れたりとし玉へり等とは。今論辨する所
 は。上人は。事の稱名が。即心念佛かと云ことなり。左
 様に。本意の正意のと云穿鑿にてはなし。事理や。有
 相無相を對論せば。理觀無相。正意にて勝るゝこと
 は。此方も合點のことなるに。入ざることを。節節云
 るゝなり。後にも。此度談義本が出て。即心念佛が。天

台宗の正意と云ことを。人が知る故。從來のことが面目なさに。妄説妄難を云述べらる等と云れたり。此も亦是ならず。理觀の即心念佛が。天台宗の正意と云ことは。云に及ばぬこと。誰か之を知らざらんや。此方にもよく合點のことなり。從來も辨偽にも。即心念佛が。天台宗の正意に非すと。云たることは終になし。此方は。從來妙宗鈔をも。節節講じて。眞の即心念佛を弘め。平生も智解ある人には。圓解妙觀を勧め。又無智の尼入道には。兼て事の稱名念佛をも勧むることなるに。もし天台宗は。必ず理觀の一道に限て。事の稱名念佛は。堅く勧めぬ筈。弘めぬことに決定せば。其時は面目なく思ふことあるべけれども。即心念佛が。天台宗の正意と云ことを。人が知るとて。面目なく思ふべきことは。なきことなるが故。佛祖の照覽し玉ふ所。此方面目なく思ひしことは。少しもなし。それを。從來のこと。面目なさにと云るは。此も明かなるあて推量の妄言なり。談義本には。四明は理觀

の一道。天台は即心念佛を専らにすと。慥かに云れしに。辨偽に。天台宗祖の十疑論。明かに事相本願の念佛を勧め玉ひ。四明の淨社も。慈雲の方法も。慧心の先徳等も。各々事の念佛をも。勧め玉ふこと分明なる證據を。出したることなれば。反て其方の面目なさに。妄言妄義を云述べらるゝが故。面目なさは。此も其方の身の上的ことなりと省みられよ。今の用にもなき。正意穿鑿をして。紛らかざるゝことなれば。さて上人の勧め。即心念佛なること。決定なるべしとは。亦これ其方のあて推にして。かの傳の中には。全く見えぬことなり。尤往生要集に。理觀理持を明し玉へども。慧心の僧都は。事の稱名念佛を行すとの玉へり。今の上人も亦然り。夢の告に。往生要集を以て。自利他すべしとあるは。彼集には。六道の生死の。厭はしき相。淨土の十樂の。欣ばしきことを明し。事の稱名念佛を。具さに示し玉へば。此等の法を以て。自利他すべしと云意にて。往生要集を示し玉ふと見

えたり。因て上人の一生。厭離穢土。欣求淨土を説て。事の稱名念佛を勧めもし。弘めもし玉へるは。皆これ夢の告を謹んで奉行し玉ふが故なり。もし其方の如く。往生要集は。理觀理持が本意なれば。此集を告玉ふからは。上人の自利他は。即心念佛決定なりと云れば。上人の一代。専ら偏へに。即心念佛と云ふべき筈なるに。傳の中。上人の自行化他終に即心念佛と云ことは。一處もなきは何としたることぞや。但し夢の告は。なる程本意なる理觀の即心念佛なれども。上人は夢の告を用ひず。告に背て。たゞ事の稱名念佛にて。自利他し玉ふと云。證文もあることなりや。

菴主曰。上に云所の如くなれば。眞盛上人は。傳教。慈覺。慈慧。慧心の御心を能く知て。即心念佛を弘め玉ひしこと決定なるべし。特に慈慧大師は。彼寺の開山なり。豈彼の大師の心に順せざらんや。眞盛上人が。眞盛上人でなくは。それは格別のことなり。

今時の眞盛派の人の。即心念佛を。得弘めぬは。彼人の先師の弟子と思ふて居ながら。先師一生の心要たる即心念佛を。得弘られぬたぐひなるべし。彈曰。傳教。慈覺。慈慧大師の念佛。西方の佛を。唯心法界と觀する所の。即心念佛なりと云こと。上に云るゝ所にては。曾て分明ならぬことなり。縦ひ諸大師各々即心念佛なるにもせよ。眞盛上人の自行化他は。其即心念佛には非ず。我たゞ稱名念佛を行すと。明かに直説し玉ふ。慧心の僧都の御心をよく知て。たゞ事の稱名念佛を弘め玉ふこと傳の文昭昭たり。而るを今。眞盛上人は。即心念佛を弘め玉ひしこと。決定なるべしと云るゝは。全く傳記に見えぬ。あて推の妄言なり。もし妄言にてなくば。上人の盛んに念佛を弘め玉ふ。江勢越賀の間。何れの處にて。即心念佛を。弘め玉ひたるや。其弘め玉ひたる處處を。分明に承りたし。本よりあて推の妄言なれば。其處を出すことは。決定してなるまじきなり。又其様に決定して。即心念佛を

弘め玉ひしならば。上人の傳論に。無有理持妙觀之說と。其方の書れたるは。明かなる相違に非ずや。但し即心念佛を弘るは。妙觀の說にてはなしや如何。上人の一代。凡そ示し玉ふは。専ら偏へに。愚士庸人の爲の。事の稱名念佛にして。終に一言も。理持妙觀の說なきに。今眞盛派の人。事の稱名念佛を勧めず。反て心妙觀の。即心念佛を。専ら弘るならば。正しく逆路伽耶陀と云ものならん。此ぞ安樂院の先祖師の。慧心の僧都の所行なる。事の稱名念佛を。極樂の順禮やど位ならでは。えをるまじの。天台宗になりたる甲斐は。なきなりと云る。彼人の類ひなるべし。さて先師一生の必要なる。即心念佛を。得弘められぬとは。此方も先師の妙宗鈔の講談を聞き。其後幾度か。妙宗鈔を自らも講談して。四明先師の心要なる。眞の即心念佛を弘め。平生も智解ある人には之を勸るに。かくの如く云るは。これ何としたる妄言ぞや。後に出さるる所の。先師。作智信女に示すとす。以具佛之

心。念即心之佛。以即心之佛。熏具佛之。心此謂即心念佛等とあるは。其方の談義とは違ふて。最もよく四明の祖意を。得られたる示しなれば。誰か之を違奉せざらんや。次に引れし。欲續難續之智莫如持名念佛等といへるも。其方の談議とは。大に同じかからず。其方の談義本には。初に四明の即心念佛と。慥かに標しながら。四明の如く。佛身を所觀の境とし。思を絶し。議を忘る。心妙觀を以て。唯心法界と。性に稱ふて。絶待に觀することは云す。始終念佛申す申すといひ。忘れぬ様に覺えたり。くりかへし思ふたりするを。四明の即心念佛と云るを以て。四明尊者の心要なる。即心念佛とは。大に相違するが故。辨偽に重重辨せしことなり。

菴主曰。妙宗鈔にと云より下の云分。知れたること。二筋ある中の一筋計りを知られたる分なり。前に段段云しが如し。彈曰。此に牒せらるる辨偽は。極て略なる程に。今其

全文を出すに。妙宗鈔に。稟圓說者。初心即用佛智照境。故能信解諸法實相。乃至若離心緣能所等相。名爲實相。介爾有相。即爲魔事。故別教已下。至六道法。皆有能所心緣等相。魔能說之。悉名魔事。乃至以此覺心。觀於依正。能所即絶。待對斯忘。妙觀之宗。自茲而立といへり。此鈔文をよく見られよ。圓頓の行人は。初心始行より。諸法實相を信解すれば。三乗の聖智に超過し。究竟の佛の智慧を用て。名字の相も。心緣の相も。能所言説の相をも。とく離れて。所觀の境を。待對を忘れ。能所を絶して。觀じ照す妙觀を用るなり。

復楊文公書に。若し今圓に論せば。不離而離。初心能離佛之所離。以一心三觀。即佛智故との玉へるも。亦此意なり。初心は爾らず。後心に至て。方に離ると云は。權教の意なり。圓頓は初後不二にして。後心の佛智を。初心始行より用るが故。用る所の觀智に。能所心緣等の相は。全くな

きことなり。因て妙宗鈔に。圓人始終能用上品寂光理。而爲觀體との玉へり。

もし介爾も。能所心緣。名字等の相あるは。全く佛智の照す實相には非ず。悉く魔事と名くと示し玉へば。今圓人の即心念佛を云として。三諦の理の明かならず。未だ圓解の開けぬ人の。西方の彌陀を。我心の内彌陀なりと。其名相を認て思ふたり。學問せぬ人の。功を積んでくりかへし。忘れぬ様に。覺えたりすと云は。大に心緣の相もあり。能所思も。能覺所覺も有て。能所絶せず。待對忘れざれば。四明所説の。即心念佛の妙觀には非ず。即ちこれ魔事を行すと云ものなり等といへり。此辨偽に妙宗を引たる一段を。熟覽せん人は談義本に思ふたり。覺えたりして。能所の相もあり。心緣の相もあるは。魔事の即心念佛にして。四明の祖意に違ふことを。合點なるべし。因て今煩重なれども。其全文を出すなり。此妙宗文は。其方の大違文にして談義本の妄義。明かに顯はるるが

故。分明に返答することはならず。因て妙宗鈔にと云より下の云分と。略して牒し。前に段段云が如しと。紛らかして。しまはるゝは。甚だ聞えぬことなり。今創に云るゝ二筋を出すに。四十八葉の左に。彼人は一心三觀は。佛智なるゆへに。初心より絶待の妙觀を修すと云。一通り計りを覺て。住前觀智。皆名爲情光明玄記上頁八十と云一通りを。夢にも知られぬゆへ。譯の聞へぬことを云るゝなり。右の二筋の融會は。一家の學者の能く明らめずして。叶はぬことなれども。彼人は曾て知られぬ。知れたらば。云るべけれども。知られぬ故。云れぬなり等といへり。此會通も。亦甚だ聞えぬなり。此二筋ありと云は。珍しからぬこと。此方にも夢ならずして。從來よく知つたることなり。而るに情の方の一筋を云ぬは。四明の即心念佛は。たゞ解悟の方にして。全く迷情の筋にてはなきが故なり。知らぬが故と云るゝは。亦あて推の妄言なり。其方の云るゝ如くならば。今引く妙宗の文も。智の方ばかりを云て。情の

方を全くの玉はぬ程に。四明も亦一通り計りを覺えて。皆名爲情ある一通りは。夢にも知ず。知られぬが故。妙宗の始終に思ふたり。覺えたりする。情の方を云れぬなりと。破されんや。さてく受取れぬ破斥なり。此二筋のわけ。其方には。從來能く明らめずして。不埒なること共を云るゝなり。上品の寂光や。究竟の佛智を觀體とする。絶待の妙觀は。専ら解悟の方にていひ。全く迷情の方には非ず。もし毫末にても。迷情が難らば。それは中下の寂光。三乗の聖智にして。上品の寂光にても。究竟の佛智にてもなく。情智が待對すれば。絶待の觀智も云れず。此處一家の學者。最も深く審かにすべきなり。圓人の觀智。かくの如くなれども。住前觀智。皆名爲情との玉ふは。住前は未だ無明を斷せず。行者の法體。迷にあるが故なり。妙宗に。人雖解妙。法體是迷へりとの玉ふも。此意なり。然れども用る所の觀智に。迷情が難ると云には非ず。指要抄に。初心に用る絶待の觀體を。方譬日光不與暗共

と明し。妙宗には。初心即用佛智照境との玉ふが故。行者は初心なれども。用る所の佛智。豈情暗と共ならんや。初心より絶待の妙觀を修すと云。此方を破さるゝは。四明祖師を破さるゝになること見つべし。而るに此二筋ある中。今論する所の心妙觀の即心念佛は。用る所の觀智の方に約して云ことなりや。行者の迷にある。迷情に就て云ことなりや。北峰は約解悟修觀といへり。全く迷情に就て云ことには非ず。故に此妙觀を。何思不絶。何議不忘といひ。以此覺心。觀於依正。能所即絶。待對斯忘との玉へり。圓人はかくの如く。初心始行より。能所を絶し。思議を忘るゝ佛智を用て。境を照せども。無明未斷のことなる故。何としても。思議の念も起り。能所の情もやみ難し。故に此を情の一心三觀ともいひ。皆名爲情との玉へり。かく云ねば。初心の觀智を。上品の寂光の。究竟の佛智のといひながら。皆名爲情とある等の文が。すまぬことなり。此處にて。情と云は。觀智の體に非ず。

行者の法體。迷にある方より名ると云ことを。合點せられよ。か様の入わけ。七十年來。未だはつきと。明らめられぬは。思ひの外なること。其方の云るゝ。心觀道の上になき故なるべし。總じて圓解妙觀を論ずるは。専ら解悟に約し。全く迷情の筋にはよらぬなり。因て妙宗には。以理簡情との玉ひ。柏庭は。凡論圓理。但可背情而從理。豈可違理而順情といへり。爾らば談義本に四明の即心念佛と。標せらるゝからは。解悟に約し。圓理に順じて。名字の相を離れ。心縁の相を離れ。能所を絶し。思議を忘るゝ。絶待の妙觀を。委く談せらるべき筈なるに。反て忘れぬ様に覺えたり。しづのをだまき。くりかへし。思ふたりせよと云て。妙宗に甚だ嫌ひたる。心縁の相もあり。能所も絶せず。思議も忘れぬ迷情を。段段勸めらるゝは。大に四明の祖訓に背くが故に。重重辨斥せしことなり。隨分解悟に約し。圓理に順じて勸るさへ。迷にある行者は。何としても。思議分別の情となるものなるに。首

より。思議分別の迷情を教へらるゝは、全く絶待の心
 妙觀なる。即心念佛の談義とは聞えず、其方の云るゝ
 所の。兎角觀道のこと。一向不合點ゆへと見ゆるな
 り。此度二筋あると云るゝに由て。今其二筋を辨別す
 るに。其方の云分は。行者の法體。なを迷にある筋に
 して。解悟妙觀の筋なる。四明尊者の。名を立て弘め
 玉ふ。即心念佛には非ざること。いよ／＼炳然明白な
 り。右の外にも。妄說妄義多ければ。具さに彈斥すべ
 けれども。上來辨する大綱の文義さへ。よく顯るれ
 ば。其餘の妄說は。自ら敗壞すべきが故。之を略する
 ものなり。法明律院沙門慶義瑞敬て書す。

即心念佛彈妄錄 終

享保十四巳酉年霜月吉旦

京師 書林

小河久兵衛 梓刻
 八木八郎兵衛

(編者云。本書中二字下者。原本割註)

即心念佛彈妄錄略箴

老苾芻 光謙 著

享保十五年庚戌。正月十六日。午の下刻。書林某。即心
 念佛彈妄錄一本を。持し來れり。相尋ひて。來客多き
 ゆへ。晝の内は。とくと披見せず。夜に入て。侍人に讀
 せて。二十枚聽ぬれば。様子相知れたり。先年とかは
 らぬ。不合點にて。此度は。殊の外。瞋らるゝ心顯はれ
 たり。爲人爲法の議論なれば。自分の義非ならば。速
 やかに改たむべし。他人の義非ならば。委細に辨論す
 べしと。心得れば。瞋ることは。なき筈のことなり。是
 非ともに。我云分を立んと思へども。立られぬゆへ。
 無理を云。墮負の處は。をしかくし。何とぞ初學。無識
 の男女を誑惑して。利名を失なはぬ様にと。思ふ心あ
 れば。瞋りが起る筈のことなり。笑止千萬なり。人の
 瞋りを益さんと云。此方の心にてはなし。爲人爲法な
 れば。老衰甚しく。殊の外難義なれども。不得已。侍

即心念佛彈妄錄略箴

人に口授して。十七日未上刻に。書付始めます。
 去りし秋。談義本の辨偽を著したれば。見人此返答
 は。なるまじきこと共なりと。いひあへるに。今歲仲
 春。或問といへる書出たり。此は或人に辨偽を問せ
 て。幻菴主の答へられたるものなり。其答への趣
 き。果して正直に返答することはならず。さすが。默
 然たるも。いと念なく思はるゝか。自ら恥を省み
 ず。人の笑ひをも避くることなく。忽ち立義を改張
 し。妄りに前言を翻轉し。罵辱讒言にて。重重紛ら
 し。盡くこれ誑他の説なれば。四明尊者。山外の答義
 を述て。縱事改張。終當乖理。始末全書於妄語。披尋
 備見於諸心。毀人且容。壞法寧忍との玉へるに。恰か
 も當れり。已に理路窮ると見えて。改張顯然として。
 墮負明白なれば。重て辨ずるには。及ばぬことなれど
 も。何とぞ辨せよと再三勸る人もあり。初學の知るこ
 となく。惑亂せらるゝも。歎しければ。且く大綱の文
 義を擧て。其妄言妄義を彈駁すと云ことしかり。于時

享保十四年己酉九月下旬。

箴曰。此は。或人に辨偽を問はせてと云るゝこと。先づ相違なり。此方は。有人の問ひや。物語どもを。自ら問ひにして。自ら答へたるなり。曾て問はせはせぬなり。但し假立賓主を。或人に問はせてと云ことか。それなれば。かきやうがわるきなり。言を加へて然るべし。忽ち立義を改張しとのこと。をびたしき云かけなり。立義と云。張と云は。多くの言語のことと。聞ゆるなり。左様のこと。曾て致さず。觀佛の觀の字の寫語を。念の字に改ためたるばかりなり。但一字のことなり。

筆誤なれば。公灼に今改めて。念の字に作ると書付て。版行せり。儉かに。改轉するには。非ざるなり。

何とて立義改張と云るゝや。四明の言を。戀く心得られたるか。仰山に云立て。愚人を誑惑する心か。筆誤てにはを改たむることは。今に折折これあることなり。

り。立義を改張することは。曾てなきなり。縦事改張終當乖理。此二百問の文。誤まれる版點のまゝに。點つけられたるなり。點を改たむることならぬ。彼人なり。加様の講釋などを。信受する初學こそ。不幸のことなれ。先師の點の直しもなく。拙衲が直し置けるは。見られざるゆへ。誤まれる點を。信仰せられたり。縦事と讀ては。終當と云二字が。ちが明ぬなり。縦事改張終當乖理と。改むれば。縦事の二字より。終當と移りて。文義が能くすむなり。初學。能く思ひ明らめられよ。

彼人は。初心なことを。云ことがすきなれば。定めて板點には。事とある。しのでにはを。すと改めたりと云るべし。しと云は。下もへかゝる。てには。すと云は。讀きるてにはなり。何れでも終當とのうつりがあしきなり。

戀き學問者は。加様のことを。むづかしがれども。ちと仕馴るれば。むづかしきことにてはなし。兎角學問

は。道理は勿論。文字の點。てにはにても。吟味せねば。ならぬ處あるなり。尤も點は。どうつけても。苦しからぬ處もあるなり。今此二句は。板點の通りにては。譯が聞へぬなり。改張顯然として墮負明白なれば。彼人の自分定め。誰か之を信用せん。見墮別宅舍之淺深。觀序知述作之難易と云り。此序既に譯もなきことなれば。正說の。彈妄に非ずして。妄彈なること知れたり。

凡例

一 妙宗鈔に。適時之巧。非我所能等といへるは。談義本の根本。網格の文なるが。此は理の觀念を明して。口稱の念佛を示す文には非ず。又四明尊者も。理觀の一道を専らとせず。事相本願の念佛を。普く萬人に勧め玉ひ。なを天台。慈雲。慧心。眞盛等の宗師も。なる程事の念佛を。弘通し玉ふと云義。又絶待に照す。即心の妙觀は。覺えたり。思ふたりする様なるものには非すと云義さへ。明かに顯るれば。

談義本并に或問の。云云たる妄説は。自ら一時に破廢し。辨偽の能破。よく成立するが故。今はたゞ此根本の文義を辨するなり。

一 菴主。從來人と議論せらるゝに。自義敗壞せんとすれば。旁論枝説にて。廣く紛らかし。轉計讒言にて。巧みに紛らかさるゝが故。今は随分紛らかさぬ様にと思ふて。枝葉旁義に及ばず。見人之を知ぬべし。

一 内外境觀の論。菴主の立義は。妙宗十義書に背て。墮負分明なるに。なを慚悔の心なく。此度何か過言せらるゝは。笑止なること。辨斥したきことどもなれども。此は別の所論なれば。且く此に略す。

なり。初心なる佛學者の爲。略して之を云。凡例の二字は。左傳序が。根本なり。云。其發凡以言例。皆經國之常制等とあり。林堯叟が註に云。左傳之中發凡言例。如隨公七年。凡諸侯同盟。于是稱盟之類。有五十條。皆以凡字。發明類例。凡例の二字に。點を付れば。凡の例。凡ての例なり。凡は。凡ての辭ばなれば同じことなり。玉篇に。凡非一也とあり。凡の例。凡ての例と云は。所すべにも能すべにも。數多あることなり。五十條など云は。能すべの數なり。然れば。凡例と云ものは。皆其書にあることを示して。心得置ねばかなはぬことなり。凡そ加様なるは。こうしたごとと。類例するなり。然るに。此度。三箇條を凡例と云るゝは。何れも皆。彈妄錄の上になきことを。云たるものなり。めづらしき。凡例かな。第二。第三は。勿論。錄になきことなり。第一箇條は。錄にあることの様なれども。根本の文義を専ら辨するを。凡例にすべき様は。なきことなり。知れたることなればなり。此箇條

も。墮負閉口の云紛らかしと云は。今はたゞ。根本を辨すと。云るゝゆへなり。此は。會通せられひでかなはぬことが。甚多きゆへ。其閉口を。云紛らかさん爲に。但根本を辨すと。云るゝなり。其上。錄の中。根本の四句の外のこと共が。大分これあるに。何とて。たゞ根本を辨すと云るゝや。妄言に非ずや。第二條は。枝葉旁義に。及ばすとあれば。此亦錄の中になきことなり。何ぞ凡例と云んや。此れ正の墮負閉口の云紛らかしなるに非ずや。また見る人之を知るべしと云るゝは。錄を見る人と云ことが。此は凡例にして。示さるゝに及ばぬことなり。錄を見れば。その有無は明かに知るゝことなるがゆへなり。若し又この箇條を見る人と云ことが。それならば。三箇條の中。第二條に。別して念を入らるゝことは。何ぞや。其上。枝葉旁義も。錄の中にあることどもなれば。此亦妄言なり。第三條は。猶以て墮負閉口の。云紛らかしなり。此は。此方より二千酬に數へ立たる。九十餘條の閉口

のことや。往復の始終に。云れぬ。不思議の一心三觀の言。轉計と難じたるに。殊の外迷惑せられたるゆへに。云紛らかさるゝなり。其上。錄の文に指合なり。内外境觀の論は。別の所論なれば略すと。云るゝが。錄の三十六紙より。三十九紙の始めまで。三枚ほどの辨は。内外境觀のことにてはなしや。長長と云て置て。略すと云るゝは。妄言なり。但し且く此に略すと云は。凡例の中に。略すと云ことか。三枚ばかりの議論を。凡例の中に。書くべきやうは。なきことなれば。且此に略すと云は。譯もなき云分なり。問。凡例には。必ず其書になきことは。云まじき答か。答。其書にあることを。多く書きたる中には。一二箇條は。其書になきことも。云べきか。あることを表詮してをひて。なきことを遮詮すること。あるべきか。此度の三箇條の様なることは。必定なき答なり。問。彼人の惡口罵辱を。返答せねば。何とやら。ぬるき様に。思はる。答。言の纏軟を認る人は。左様にも思ふべし。

此方の心は。自己一分の毀譽褒貶の爲。世間の紙墨を。費やすは。入らざることなり。少しなりとも。初學の爲になることを。書き付たしと思ふゆへ。惡口罵辱には。取合はぬなり。此より末のことは。同志の人の。評判次第にすべし。初學の爲なれば。辨せよと云人多くは。なるほど辨すべし。談義本や。或問や。餘説。非摘欺など出たれば。最早辨するに。及ぶまじきことと云人多くは。辨すまじ。仍て正月十八日。先づ且く書付さすることを止むるなり。彼人墮負閉口の勘定。正月十八日より。書き始めさせ。廿一日に書せ畢る。一或問に。去る俗人の物語りを出し。藕益の語などを引き。法明上人は。俗人の見解に不及と。破し置けり。返答せられひで。かなはぬことなれども。一言も云れず。墮負明白なるに非ずや。一談義本の題號。ながくとして。をかしと。云るゝ

ゆへ。佛頂經や。儀軌品の。長き題號を出して。難じたり。一言も得云れず。此ことは學問もせぬ。俗人まで。往往に。そしるなり。此度返答なければ。彌以可笑。

一拙僧も。勤め得たりとは。思はずと云を。難せらるゝゆへ。儒佛の大綱を。知れずと。難じたり。肝要のことなれども。閉口せられたり。肝要のことは。知られずが多しと云が。無理にてなきこと。知れたり。

一四明の。適時之巧等との玉へるは。安樂行品や。疏の意や。金律論の意にも。相合ふと補助記に云るを。何の沙汰もせられず。心中の墮負。分明なり。但し。彼人のこまりたる時。能く出さるゝ。攀附餘義と。云るべきか。末世弘經のことを説たる法華。それを受たる金律論に依らずして。何によるべきや。

一觀佛三昧。一心三觀の定心が發して。往生すと。の玉へり。具さなる文。鈔の下の四書出すに及ばずと云

るを。一言の會通も。得せられず。忘れたるふりなる。紛らかしの云分。笑止なる心底なり。

一圓解の開けたる人。九十日の間だ。善導。法然風の事の念佛を申すと。云べしやと云て。天台。荆溪。四明の語を引けり。道理極成なれば。ひしとつまりて。一言も云れず。方法各異。理觀則同は。往復の書に。度度引て。二千酬に。數へ立たる。九十餘條の閉口の。其一なれば。此度も閉口。其筈のことなり。

一辨偽の題號。偽作の言のこと。非を知られたるか。一言なし。此ことは。拙衲が難する計りにてなし。世間に難する人多し。

一淨土も彌陀も。即ち吾心なりと知て。念佛申すが。即心念佛なり。心の性は。三諦法界にてはなしやと云一段。肝要のことなれども。返答なし。

一三諦法界と觀するが。約心觀佛。即心念佛なり。口に申す念佛の外なりと云るゝゆへ。旭師の要解。天台の普門品の疏を。出して難じたり。加様の處は

心底に。殊の外こまられたるか。閉口。

一四明の即心念佛の言。心念。口稱に通ずと難するを。此度心念の方ばかり云て。口稱に通せぬ譯は。曾て云れず。云るゝ方は。相符極成なり。云れぬ方は。墮負分明。

一四明の自利の爲の。事持口稱の念佛は。あるまじきことなりと。難するに。はたとつまられたると見へて。閉口せらる。圓解明らかに入れて。人の行じ難き。四種三昧を。能く行じ玉ふ四明が。忽ち圓解を忘却して。自利の爲に。法然流の念佛を。申し玉ふべきことは。決してなきことなり。

一四明尊者は。水族飛禽にさへ。即心三諦の理を。説きかけ玉ふ。信心ある。萬人の念佛申しに。即心三諦の理を。説き示し玉ふまじき様は。決してなきことなりと云難。道理決定せることなる故。一言も會通せられず。墮負了了。

一四明の舊式に仍ると云るれども。よらるゝ所と。勸

めらるゝ所が。大ひにかはれり。疏の文の前書に。發菩提心の言兩處にまで。見へたり。法然上人の。菩提心。念佛を抑ふと。の玉へると。大ひに違へりと云て。授菩薩戒儀の文を。引き示したり。念佛會の疏を。會通せらるゝに就ては。此のこと。とりわけ會せられひでは。かなはぬに。うはさばかりを云て。逃らるゝは。心底の迷惑。墮負了了なり。

一四明の立一切行以觀導達之の文を引て。難じたり。圓人の開解。立行の相にて。至極肝要なることなるに。一句も得出されぬは。哀れなることなり。

一四明。先師の思ひ入れを。合點せられずと云て。難じたることは。頂門の一針なるゆへ。殊の外迷惑と見へて。一言も得云れず。

一四明の勸めの意は。慈雲の放生慈濟門にも。見へたりと云難。口を緘まる。

一内外境觀の分ちに昧しと。云るゝゆへ。二千酬の。

九十餘條の閉口のことを。出して難じたり。然るに此度。うはさばかりを云て。一言も會通せられねば。昔の閉口。今に開けぬなり。

一心觀爲宗は。觀經のことなるが。心觀の二字。修心妙觀の四字は。通じたる言なりと難す。此にも。ぎつとつまられたり。

一稱名念佛。慧心の。始めて立玉ふことにてはなきに。此れは。法然上人。いなことをの玉へるなりと難す。此も亦閉口。尤も法然上人のことにてはあれども。法然上人。信仰の人なるからは。會通せられひて。かなはぬことなるに。何とも云れぬなり。

一西教寺の開山と云は。相違なりと難す。決定せる相違ゆへ。閉口の筈なり。尤も輕きことにてはあれども。如法者の議論なれば。誤まりならば誤まり。覺へそこなひならば覺へそこなひと。斷はらるべきことなり。彼人。昔しよりすてがな一つにても。人に云れては。改ためらるゝことにてはなし。其持病

今に平愈せず。

一傳教。慈覺。慈慧。慧心の念佛。皆即心念佛なりと云こと。委細に書示したれども。何とも云ずに。指し置かる。極めて大切のことなるに。得云れぬは。墮負明白なるに非ずや。

一往生要集は。法然上人の勸めと。違ひたる證據。彼集の丁付をし。彼文を引て明らかに示せども。うはさばかりを云て。會通はせられぬなり。墮負ゆへに非ずや。

一下の鈔の。即心念佛の言。意廣しと云。一段の分註を。何ともうはさもせられず。墮負了了。

一何れの處にか。佛の名を唱ふると。あるやと云るゝゆへ。下品の上生下生に。二處までありと云て。一段理窟をつめたり。一言の返答なし。此ことも。拙訥ばかりにてなし。世上に難する人あるなり。

一心作心是の文は。談義者のにげ口に云れんと思ふ文と。云るゝを。ひしと難じたるに。何の云分も得

せられず。

一義徧初後と云ことはりを云ぬを。とがめらるゝを難じたる一段返答なし。

一境觀要門にも。即心念佛見へたりと云趣を。彼書を引て示したり。うはさは云れたるが。稱念佛號の會通はせられぬなり。墮負。

一念佛申しの上まで。徧く通すと云には非すと。云るゝを。難じたり。此亦閉口。

一持名と觀佛とを。一つにして云る。それでは外にある筈なりと難す。得會通せられず。

一桶の底のぬけぬと云るゝを。解をさすか。證をさすかと。兩様に詰問したるを。何とも得云れず。觀道不案内の人なれば。其筈なり。

一四明の融心解。往生要集を引て。難じたる一段。いきのねがあがらず。

一能思所思の相も。忘れすと云るゝを。難じたれども。返答ならず。

一胸中に。もやつく。周徧法界と云るゝゆへ。談義本を引て難じたれども。一言なし。

一唯心の緣影の言に就て。徧計執亦依圓成而起と云文を引て。彼人の。合點のゆくことにてはなしと難じたるに。合點がゆかぬと見へて。何とも得云れず。

一教より云。理より論すれば。愚癡の念佛も。無念の念なりと難するを。亦閉口。

一情智の辨。此方の雜錄を見られぬゆへ。何とも得云れず。此れは其筈なれども。閉口は同じ。

一緣影の事は。大ひに學者の爲になることなりと云ども。得と合點せられぬゆへか。尼入道ばかりを。大切にして。學者の爲は。かまはぬ合點か。閉口せらる。

一止觀の第三を引て。絶待のことを。指示せり。誠に大切のことなれども。合點がゆかぬやら亦閉口。

一阿彌陀經より出たる。理持の念佛と云るゝゆへ。自